サクラ大戦Ⅵ ハロー・マイラブ

蛇王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

太正２０年。大日本帝国海軍、神木裕一郎少尉は新天地である伯林に降り立った。

――伯林華撃団・四季組の新隊長として。

帝都・巴里・紐育に次ぐ、新たな華撃団の物語が始まる！

『サクラ大戦Ⅵ　ハロー・マイラブ』

「お楽しみは、これからだ！」

目次

サクラ大戦Ⅵ　基本設定集 …… 1
Ep.1　新たな物語の始まり
パート1 …… 4
パート2 …… 7
パート3 …… 9
パート4 …… 11
パート5 …… 13
パート6 …… 17
パート7 …… 20
パート8 …… 23
Ep.2　孤高の戦士
パート1 …… 27
パート2 …… 29
パート3 …… 32
パート4 …… 35
パート5 …… 38
パート6 …… 42
パート7 …… 46
Ep.3　ヤマトナデシコ二変化
パート1 …… 50
パート2 …… 53
パート3 …… 57
パート4 …… 60

パート5 64
パート6 68
Ep.4 天使の吐息
パート1 74
パート2 77
パート3 80
パート4 82
パート5 84
パート6 88
パート7 91
Ep.5 嘆きのトップスタァ
パート1 95
パート2 98
パート3 100
パート4 102
パート5 104
パート6 106
パート7 108
Ep.6 箱入り娘クライシス
パート1 111
パート2 114
パート3 116
パート4 119
パート5 121
Ep.7 すてきなウィンターホリデイ

パート1 ―― 124
パート2 ニーナルート ―― 126
パート2 マレーネルート ―― 129
パート2 リリィルート ―― 134
パート2 秋奈ルート ―― 137
パート2 ナターシャルート ―― 143
パート2 スピカルート ―― 147
パート3 ―― 151
パート4 ―― 154
パート5 ―― 156
Ep.8 華撃団は平和を愛す
パート1 ―― 159
パート2 ―― 161
パート3 ―― 165
パート4 ―― 168
パート5 ―― 170
パート6 ―― 172
パート7 ―― 175
パート8 ニーナエンド ―― 177
パート8 マレーネエンド ―― 179
パート8 秋奈エンド ―― 181
パート8 リリィエンド ―― 184
パート8 ナターシャエンド ―― 187
パート8 スピカエンド ―― 190

サクラ大戦Ⅵ　基本設定集

【あらすじ】

太正２０年。帝国海軍の神木裕一郎少尉は、新設されたばかりの伯林華撃団・四季組の隊長として伯林に着任した。四季組隊員である、ニーナ・ヘルプスト、マレーネ・ミッドサマー、若林秋奈、リリィ・ヴィンター、ナターシャ・イヴェールと共に、伯林の平和を脅かす魔と戦っていく。

【登場人物】

《伯林華撃団・四季組》

神木裕一郎（２１）

大日本帝国海軍から伯林華撃団にやってきた海軍少尉。海軍士官学校を主席で卒業後、トランペット奏者として一年間軍楽隊に所属。そのため実務経験は浅い。

両親はピアノ教室を経営しており、姉も音大出身という音楽一家で生まれ育つ。

ニーナ・ヘルプスト（１６）

ミュンヘンにある薬局の一人娘。役者としての演技経験は無いが、回を重ねるごとに上達していく。父親からは箱入り娘として育てられた。

マレーネ・ミッドサマー（２３）

ドイツ系アメリカ人。ブロードウェイのトップスタァとして長い間活躍。愛称は『氷の微笑』。

伯林華撃団所属を機に紐育を離れ、伯林にやってくる。あまり人と接しようとしない事なかれ主義な性格。

金髪のフィンガーウェーブに、切れ長の目を持ちこけた右頬にはほくろがある。

若林秋奈（１７）

日本出身。クライナ・トーキョー内にある在ドイツ日本大使館特命全権大使・若林正毅の一人娘。

『青踏』を愛読するモダン・ガール。祖母は日本橋で茶道の家元をして

いる。
リリィ・ヴィンター（１０）
オーストリア出身。『ウィーン少年少女合唱団』のメンバー。突出した歌唱力を誇り、合唱団の看板として活躍。
霊力がメンバーの中で最も強く、歌っている時は制御できなくて霊力が体から漏れ出てしまう。
ナターシャ・イヴェール（２１）
モロッコ出身。１７歳の時に巴里に移住し、フランス外人部隊の傭兵として４年間前線で活躍。戦術面では神木よりも優れている部分がある。バズーカ砲を常に持ち歩いている。
四季組メンバーの中で唯一の黒人。金髪がトレードマーク。

《伯林華撃団・空組》
野々村つぼみ（２０代前半）
帝国華撃団員養成学校乙女学園の出身。卒業後、新設されたばかりの伯林華撃団に配属された。
普段は事務をしている。おしとやかな性格で、和服を着て生活している。
学園在籍時は帝国華撃団に一時的に配属されたこともある。
アンジュ・ヒメル（１５）
ドイツ出身。普段は売店で売り子をしている。お団子ヘアーがトレードマーク。
快活な性格で、空組の盛り上げ役。皆からは『アンジュ』と呼ばれている。
リュウ・リン（１７）
台湾出身。劇場の舞台監督と、アイゼンクライトの整備を担当している。
物忘れがはげしい、おっちょこちょいな性格。皆からは『リン』と呼ばれている。

《伯林華撃団・司令／副司令》

ヨハン・ヴォルフ（５０）
伯林華撃団司令兼伯林歌劇団支配人。白いスーツと赤いシャツ、チョビヒゲに丸眼鏡、坊ちゃん刈りという出で立ち。伯林一の富豪であり、華撃団新設の際に多額の資金援助をしたことからドイツ国防省と賢人機関に司令として推薦され着任。勤務態度は不真面目で、仕事の大半は副司令のスピカに任せ、劇場を留守にして外出することが多々ある。
スピカ・レンテ（２５）
伯林華撃団副司令兼伯林歌劇団副支配人。事実上の責任者。
元欧州星組隊員。星組解散後、霊力がピーク時の半分までしかいかなくなったため引退。
オランダで隠遁生活を送っていたが、ラチェットに説得されて伯林華撃団副司令として復帰。
女優のグレタ・ガルボ似の美形で、茶髪ロングとフレアスカートがトレードマーク。

《敵》
ヨーゼフ（次男）
ハインリヒ（三男）
トゥルーデ（長女）
ユッタ（次女）
伯林華撃団と対峙していく敵四人組。敵蒸気機械を操って対抗する。
敵蒸気機械の名前はそれぞれ、『シュテンゲル』『フェーレ』『アネモーネ』『リーリエ』
ゴーレム
土から出来た魔物。かつて帝都や巴里に現れたという脇侍や蒸気獣と同種類。
その実態は未だに解明されていない。

Ｅｐ．１　新たな物語の始まり

パート１

太正２０年春、伯林のテンペルホーフ空港。
８年前に開港したというこの空港は、洒落た服装に身を包んだ富裕層やドイツ空軍の兵士で溢れている。
そんな中、滑走路に見慣れない飛行機が着陸してきた。機体はアメリカで開発されたフォッカー　スーパーユニバーサルだが、横には日本語で『日本航空輸送』と書かれている。
飛行機が止まり、タラップを降りてきた白い軍服を着た青年は、ドキドキを抑えられないといった表情で周囲を見渡す。
『ここが、伯林……。ここが、僕の新たな物語の始まりなんだ！』
男の名前は、神木裕一郎。大日本帝国海軍から伯林華撃団に配属になり、今日新天地である伯林に足を踏み入れたのだ。

事の発端は一ヶ月前。急な呼び出しを受けた神木は、あまり深く考えずにのこのこと海軍省に出頭した。だが応接室で待ち構えていた人を見て、思わず固まってしまった。
立っていたのは、帝国華撃団総司令の大神一郎大尉だった。
大神一郎は帝国軍人なら知らない人はいないだろう。太正１２年に帝国華撃団隊長として就任した後、帝都や巴里を幾度も魔の手から救ってきた伝説的な人物だ。現在も総司令として劇場運営に携わる傍ら、事件が起きた場合は自ら出撃するなど精力的に活躍しているという。
神木も士官学校時代は耳にタコが出来るほど大神の噂を耳にした。だが、実際にお目にかかったのはこれが初めてだった。
「君が、神木裕一郎少尉かい？」
先に口を開いたのは大神の方だった。
「は、はい！　帝国海軍所属、神木裕一郎少尉であります！」
若干声が上ずりながらも、大声で名乗りを上げる。

「緊張しなくていい。とりあえず、掛けたまえ」
「は、はい！失礼いたします！」
勧められるがままソファに腰かける神木。握り拳にじんわりと汗が噴き出てくる。
「本日、君を呼び出したのは他でもない。君に、重要な任務を任せようと思う」
向かい側に座った大神が、まっすぐ神木の目を見て話す。
「任務……でありますか？」
「あぁ。――神木裕一郎少尉、君に、伯林華撃団・四季組への配属を命ずる」
「は、、、」
あまりに突然のことで、神木は言葉を失う。それを見て、大神はフッと笑みを漏らす。
「いきなりで驚いただろう。だが、これは少尉の能力を買ってのことなのだ。
神木裕一郎少尉。海軍士官学校を主席で卒業した後、一年間軍楽隊に所属。トランペット奏者として活動した後、海軍に戻り今日に至るまで実務経験を積む――。軍楽隊にいたとは、なかなか興味深い経歴だよ」
「両親がピアノ教室を開いておりまして、姉も音大出身なのです。私もその影響で少しばかりかじっておりました」
「なるほど。――少尉の培ってきた力は、伯林でも十分に発揮されると思う。
伯林華撃団はまだ出来て間もない。少尉のような若い才能が隊長として加われば、きっと良い結果が生まれるだろう。――どうだ？やってみないか？」
神木が結論を出すまでに０．５秒も掛からなかった。
「やります！　是非とも自分にやらせてください！」
それから、あれよあれよと月日は流れ、今日ついに伯林にやって来たのだ。

『大神司令の顔に泥を塗ることが無いよう、しっかりしなければ！』
入国審査を終え、空港の外に出る。外に出ると、周りからはドイツ語しか聞こえてこない。
『確か、伯林華撃団から迎えが来るとかって聞いていたけど……』
キョロキョロ辺りを見渡していると、神木は背後から「あのー……」といきなり声を掛けられた。

パート2

「わっ！　びっくりした！」
　慌てて振り返ると、ドイツの伝統的な服であるティアンドルを着た女性が立っていた。背丈は１５０ｃｍくらいで、黒髪を後ろで短くポニーテールにまとめている。ハッキリとした顔立ちで愛らしく、どことなく少女の面影が残っている。
「あの。もしかして、神木裕一郎少尉ですか？」
　女性はもう一度質問を繰り返す。日本人の名前が発音しにくいのか、かなり慎重に聞いている。
「は、はい。自分は、神木ですが……」
「あー良かった！　見つからなかったらどうしようかと思った！」
　女性は緊張の糸が切れたのか、屈託のない笑顔を浮かべる。
「あのー、その、君はいったい……？」
「……あ、すいません！　私、すっかり安心しちゃって。私、伯林華撃団・四季組の、ニーナ・ヘルプストと言います。よろしくお願いします！」
　ニーナと名乗る女性はそう言って握手を求める。
「――じゃあ君が、僕の迎えなんだね？」
　握手を返しながら神木が尋ねる。
「はい！　劇場へお連れするようにと、ヨハン支配人から言われてますので！　それじゃ、行きますか！」
「あ、ニーナ君、待って。その……、君のことが知りたいな」
　そう言われて、ニーナの頬が赤らむ。
「私のこと、ですか？　じゃあ、馬車を呼んでいるのでその中でお話ししますね！」
「あ、あぁ」
　二人は馬車に乗り込み、目的地である劇場まで向かう。
「――それでっと、私のことですよね？
　私の名前は、ニーナ・ヘルプスト。実家はミュンヘンにある小さな薬局です。伯林華撃団の副指令にスカウトされて、こっちにやってき

ました」
「へぇ、ミュンヘンかぁ。地ビールで有名だよね」
「そうですぅ！　よく知っていますねぇ！」
「士官学校で地理を習ったときに、教わったんだ」
「へぇーさすがエリートさんですねぇ！　いいなぁ、私も神木さんくらい頭が良ければなぁ」
「ハハ。僕は君が思うほどエリートじゃないよ。ただ、運が良かっただけさ」
「いや、でも凄いですよ！　憧れるなぁ……」
　神木は照れ臭くなって、目線を外に移す。すでに馬車は伯林市内に入っていた。市内は活気が溢れており、人通りも多い。街のあちこちに歴史を感じさせる建造物がある。
『流石、日本が近代化の際に参考にしたと言われるだけあるな……』
　やがて目の前に大きな劇場が見えてきた。東京の大帝国劇場と規模は同じくらいだが、ロココ様式建築で歴史を感じさせる外観だ。
「着きましたよ、神木さん。――ここが、伯林華撃団の本拠地、『ベルリン歌劇場』です」

パート3

ベルリン歌劇場は、18世紀に建築されて以来数々の歌劇を人々に提供してきた由緒ある劇場である。伯林華撃団開設に伴い、賢人機関が施設を買収。作戦指令室の設置等整備が進められてきた。

「凄く大きい建物だなぁ。圧倒されちゃうよ」

馬車から降りた神木は、劇場を見上げながら呟く。

「神木さん。こっち、こっちですよ」

ニーナにせかされるがまま、正面玄関から入る。中は吹き抜けでとても広く、洗練された印象を持つ。

「じゃあ、神木さん。まずは事務室で着任届を書いてください。その後に、支配人室に寄ってください。私はひとまずこれで失礼します」

「あぁ、ありがとう」

ロビーでニーナと別れた神木は、奥の方に歩いていき『事務室』と書かれた部屋に向かう。ドアをノックすると中から「どうぞ」という女性の声が聞こえた。

「失礼します」

中に入ると、20代くらいのおしとやかそうな着物姿のアジア人女性と、お団子ヘアーの白人の10代の少女が立っていた。

「本日、伯林華撃団に配属になりました、神木裕一郎少尉です。着任届を書くようにとのことなのでこちらに参りました」

「あなたが、神木さんですか。お話は伺っております」

着物女性が口を開く。

「はじめまして。事務をしております、野々村つぼみと言います。よろしくお願いします」

「は、はい。こちらこそ。……あの、日本の方、ですよね？」

「はい。乙女学園を卒業後、伯林華撃団新設に伴い、こちらにやってきました。これでも、帝国華撃団にお手伝いに行っていたこともあるんですよ」

「そうなんですか！　凄いですねぇ」

「はい。――そしてこちらが……」

「アンジュ・ヒメルでーす！　売店で売り子をやってまーす！」
　つぼみと対照的に元気いっぱいのアンジュ。
「ハハハ、よろしく。――それで、着任届ですが……」
「あ、はい。ではこちらにサインをお願いします」
「売店でブロマイドも売っているから時間があったら来てねー！じゃーねー！」
　アンジュはそれだけ言うと事務室を後にした。
「元気があって良い子ですね……はい。これでいいかな？」
「はい、ありがとうございます。支配人は隣におりますので、よろしくお願いします」
「ありがとう。……君たちも、伯林華撃団の一員なんだよね？」
「はい。私達は、伯林華撃団・四季組を影でサポートする、伯林華撃団・空組です。実はもう一人いるんですけど、今は外出をしていて……」
「そうか。今後色々と世話になるんだね。よろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしくお願いいたします……」
　事務室を後にした神木は、隣にある支配人室に移動する。
『ここか……よし！』
　満を持してノックをする。
「失礼いたします！　大日本帝国海軍より参りました、神木裕一郎少尉です！」
　一拍おいて、聞こえてきたのは「ど～ぞ～」という気の抜けた軽い返事だった。

パート4

「失礼します」
　支配人室の中に入ると、デスクに白いスーツと赤いシャツ、チョビヒゲに丸眼鏡、坊ちゃん刈りという出で立ちの男性が座っていた。
「本日、一二〇〇を持ちまして、伯林華撃団・四季組に配属となりました、帝国海軍少尉、神木裕一郎です。よろしくお願いします！」
「やぁ、君が神木くんか。まぁそう固くなりなさんな。リラックス、リラックス！」
　緊張感に欠ける間の抜けた声を出す男性。神木も思わず拍子抜けする。
『な、何なんだ？　この父ちゃん坊やは?!』
「僕ちゃんが、伯林華撃団支配人兼司令の、ヨハン＝ヴォルフだ。気軽に、ヨハンと呼んでねー」
「は、はい……。よろしくお願いします、ヨハン支配人」
「うーん、固いなぁ。これだから軍人は嫌いなんだ」
　その言葉を聞いてムッとする神木。
『こいつ……いちいち神経に触る言い方をするな』
「ま、いいや。とりあえず、これに着替えて」
　そう言うとヨハンは机の中から洋服一式を取り出す。
「……これは？」
「君は軍楽隊にいた経験があるみたいだけど、我が伯林華撃団には奏組という専属の楽団を持っている。誰も彼も一流の弾き手だ。君みたいなアマチュアとはわけが違う。だから君には、劇場のモギリ係を命じる。オーケー？」
　それを聞いて思わずニヤリとする。大神司令も、紐育華撃団の大河新次郎隊長も、最初はモギリからキャリアをスタートさせたというのは有名な話だ。もはや様式美と言っても良い。
「分かりました。謹んで、お受けいたします」
「うん。ま、そんなに頑張らなくていいから。テキトーにやってってね」

「はい。……失礼しました」
　支配人室を後にすると、先ほど分かれたニーナが「神木さん！」と言いながら走り寄ってきた。
「支配人にお会いしたんですね？　どうでした？」
「……なんと言うか、華撃団を舐めてる感じがしたな。ヨハン支配人だっけ？　彼は一体何者なんだ？」
「伯林一の大富豪で、なんでも伯林華撃団新設の際に一番資金援助してくれたのが支配人だったそうです」
「へぇ、そうだったのか」
「だから、賢人機関も感謝の気持ちから支配人を伯林華撃団のトップに据えたそうですよ」
「ふぅん。……だが、成金の道楽と思われるのは心外だな」
　そう言って、神木は支配人室のドアを見つめる。
「……あ、そうだ。神木さん、まだ自分の部屋をご覧になっていないでしょう？　部屋も含めて、私が劇場内を案内します！」
「え、本当かい？　じゃあ、お言葉に甘えて……」
「はい！　それじゃ、劇場探検にレッツゴー！」

パート5

ベルリン歌劇場は一階と二階が劇場部分となっており、ニーナや神木などスタッフの部屋は三階にある。
「ここです。ここが、神木さんの部屋でーす！」
木で出来た扉にドイツ語で『神木』と表記された表札が掛かっている。
「あ、そうだ神木さん。せっかくですし、着替えたらどうですか？　一応劇場なんで、軍服を着た方が歩いていると……」
「あ、あぁ。そうだね。じゃあ、中で着替えさせてもらうよ」
部屋の中は、机に椅子にベッドにクロゼットと質素な作りとなっていた。神木は軍服を脱いで、先ほど渡されたモギリ服に腕を通す。
『少しデザインはダサいけど、まぁモギリ服なんだし、しょうがないか』

「おまたせ」
廊下に出ると、ニーナが目を輝かせながら立っていた。
「わぁ、神木さん！　モギリ服も似合ってますね！」
「そ、そうかな？　自分ではあんまり自信は無かったんだけど……」
「とんでもない！　サマになってますよ！」
「――そ、そうか。ありがとう」
「それじゃあ、次は舞台を案内しますね」
ベルリン歌劇場の舞台は大帝国劇場以上に広く、神木は舞台から見る客席の光景にただただ圧倒された。
「凄いな……ここで、舞台をやるんだね」
「えぇ。来月から、マレーネさんと『ロミオとジュリエット』を公演するんですよ」
「……マレーネ？」
「あ、神木さんはまだマレーネさんに会ってませんか。マレーネさんも、伯林華撃団・四季組のメンバーなんですよ」
「へぇ。同期なんだね」

「同期って言っても、マレーネさんの方がキャリアは長いですから……」

「ニーナ」

突然二人の後ろから声を掛けられる。振り返ると、金髪のフィンガーウェーブに紺色のワンピースドレス、目元は切れ長でこけた右頬にはほくろがある。女性らしいエレガントさを持ちながら男性的な美しさも兼ね備えた、まさにクールビューティーという名にふさわしい女性だ。

「……こちらの方は？」

神木の存在に気づいた女性がニーナに尋ねる。英語訛りのドイツ語だ。

「あ、日本からいらした神木裕一郎さんです。伯林華撃団・四季組の新隊長さんですよ」

「神木です。よろしくお願いします」

「マレーネ・ミッドサマー」

女性はそれだけ言うと、キセルに火をつけて一服吸う。

「――見た感じ、まだ若いって感じね。あなた、おいくつ？」

「今年で21になります」

「あら、私より2つも下なのね。――それで、この四季組をどうまとめていくつもり？」

「私は、悪を人々から守るためにこの伯林にやってきました。四季組の皆さんも同じ志を持った同志です。互いに手と手を取り合って、悪と戦っていく所存です」

「……二流ね」

「なにっ……?!」

「戦いの時は少なくともあなたの指示には従うわ。でもそれ以外のことで指示されるのはご免よ。――それから、ニーナ」

「は、はい！」

突然声を掛けられビックリするニーナ。

「……大道具部屋に、見かけないボルトが落ちていたから、後でリンに

報告しといて」
「は、はい……」
「それじゃ」
　マレーネはそれだけ言うと、さっさと舞台を後にした。
「……何て言うか、キツイ性格の人だね……」
　神木はマレーネの気配が消えたと同時にニーナに呟く。
「マレーネさん。元々アメリカはブロードウェイの看板女優だったんですって」
「ブロードウェイ?!　凄いなぁ」
「こっちに来てまだ日も浅いと思いますから、きっと、大丈夫ですよ！」
「……そうだな。それより、さっき言っていたリンって……？」

「ニーナちゃーん！」
　今度は前方からツナギ姿でショートボブのアジア系の女性が走り寄ってきた。顔はススで黒くなっており、手には軍手をはめてスパナを握っている。
「ニーナちゃん。舞台で使うボルト知らないかな？　朝からずっと探してるんだけど」
「ボルト？　……あぁ、それならさっきマレーネさんが大道具部屋で見たって」
「ほんと？　あざっす！　……あれ、こちらの方は？」
　神木に気づいた女性が指をさす。
「伯林華撃団・四季組の新隊長、神木裕一郎さんよ」
「神木です。あの、あなたは？」
「伯林華撃団・空組の、リュウ・リンです。台湾からこっちに来ました！　主に舞台設営とメカを担当しています。よろしく！」
「あぁ、よろしく」
「えーっと、それで……あれ？　私、何を探してたんだっけ？」
「え、ボルト、じゃないの？」
「あ、そうだボルトだ！　ありがとう、それじゃ！」

それだけ言い残すとリンは足早に大道具部屋に向かった。
「……結構、抜けてる子だね」
「えぇ。でも、メカに関しては右に出る人はいませんから」
「なるほど……。それで、他の四季組のメンバーはどこにいるんだい？」
「今の四季組には、私とマレーネさんしかいませんよ」
「何だって?! それじゃ、人手不足ってことかい？」
「伯林華撃団は出来たばかりなので、まだ色々と準備が間に合ってないんです。来月の『ロミオとジュリエット』も、私とマレーネさんの二人芝居なんですよ」
「でもその状態で、悪に立ち向かえって……」
「だ、大丈夫です！ 今、副指令さんがあちこちで交渉しているところですから」
「……副指令？」
その言葉が、神木には引っ掛かった。

パート6

＊＊＊＊＊＊＊

「忠実なる我が弟妹たちよ、姿を現せ」

誰にも知られていない洞窟。闇に支配された謎の男の言葉で、四人の男女が姿を現す。

「兄者よ。なぜもっと早く行動を起こさない？　伯林華撃団など、取るに足らない存在ではないのか？」

次男坊のヨーゼフが詰め寄る。

「慌てるでないよ、ヨーゼフ。先走りは命とりだよ」

長女のトゥルーデが牽制する。

「トゥルーデの言う通りだわ。あんたは黙ってなさい」

次女のユッタも口を挟む。

「チッ、どいつもこいつも」

「しかし兄者。我々を呼び出したわけを聞かせてください」

三男坊のハインリヒが尋ねる。

「……明日、伯林はポツダム広場に攻撃を仕掛ける。――ヨーゼフよ、指揮はお前に任せる。存分に暴れてこい」

「言われなくても分かってるよ。善良な市民どもを、恐怖のどん底に突き落としてやる」

＊＊＊＊＊＊＊

神木はドアがノックされる音で目を覚ました。窓の外を見ると、すでに陽は落ちている。

『もう夜か……』

ニーナに案内してもらった後、旅の疲れからか少し貧血気味になったため、大事を取って部屋に戻り今までベッドに横になっていたのだ。

ノックはまだ続いている。時計を見ると、もうすぐ２２時になろうとしている。

『こんな時間に誰だ？』

服装のシワを伸ばしてドアを開ける。立っていたのは意外な人物

だった。
「マレーネ……」
マレーネがつまらないといった顔立ちでドアの前に立っているのだ。
「ど、どうしたんだい？」
「支配人から、これから毎晩劇場内の夜の見回りをやるようにとの言伝を預かってきたのよ」
「へ、へぇ。でも、珍しいね。その、君が伝えに来るなんて」
「たまたま支配人室の前を通りがかった所を捕まったのよ。――それじゃ」
「あ、待って！」
足早に去ろうとするマレーネを呼び止める。
「その……一緒にどうだい？　見回り」
「……」
「僕も今日来たばかりで、まだ劇場のこと、詳しく知らないから……。無理にとは言わない、けど……」
「女性を誘う時くらい自信を持ったらどうなの？」
マレーネはポケットから懐中時計を取り出して、「３０分だけなら付き合ってあげるわ」とだけ言った。
マレーネはシャネルの仄かな香水の匂いがした。身長は神木とほぼ同じくらいだ。
「マレーネって、前はアメリカにいたんだろ？　凄いなぁ」
見回りをしつつ何とか話を盛り上げようとする。
「君なら、男性役も似合いそうだし、僕も来月の舞台が今から楽しみだよ」
「……」
何の反応も示さないマレーネ。流石の神木もムッとする。
「少しぐらいは興味を示したらどうなんだい？」
斜め上の反応だったからか、マレーネが驚きの表情に変化する。
「君が気難しい性格なのは会った時から分かっているけど、それでも相手が何とか話を盛り上げようとしてんだ。少しぐらいは興味を

持ってくれてもいいだろう?!」
　言ってから神木は後悔したが、しばらくしてマレーネが「フッ」と笑みを漏らした。彼女の笑った表情はこれが初めてだった。
「……真っ直ぐなのね。確かに紳士に対しては相応しい態度では無かったわね。――でもいいこと？　私は望まれてここに来たわけじゃないから」
「えっ……？」
「そろそろ３０分ね。おやすみなさい、隊長さん」
　マレーネはそれだけ言うと自室に戻っていった。

パート7

翌日。慣れないベッドでなかなか寝付けなかったが、それでも朝の9時くらいまでは寝てしまっていた。自覚していないところで疲れがたまっていたのだろう。

モギリ服に着替えて朝ごはんを食べに食堂に向かうと、空組のつぼみ・アンジュ・リンの三人がお茶を片手に談笑している所だった。

「あ、神木さん！　おはようございます」

神木に気づいたつぼみが立ち上がって挨拶をする。

「昨夜はぐっすり眠れましたか？」

「あぁ、おかげさまでね。朝食を取りたいんだけど……」

「ちゃーんと神木さんの分も取っておきましたからね！」

アンジュがそう言って神木の分の朝食プレートを持ってくる。パンとコーンスープとシリアルだ。

「ハハ、ありがとう」

「それで、神木さん。どうですか、伯林華撃団は？」

リンが茶を飲みながら尋ねる。神木はスープをすすりながら考える。

「うーん。何とかやっていけそうだよ」

「良かったー。ほら、支配人とかマレーネさんとか、結構変な人多いから」

「リン。そういうこと言わないの」

つぼみがたしなめる。神木は心の中で『リンくんも相当変だけどね』と呟く。

「今日はどうなさるつもりですか？」

「昨日来たばかりだからね。市内観光でもしようか――」

神木が答えたその時だった。

ブーーーーブーーーーブーーーーブーーーー

突如劇場内に警報音が響き渡る。咄嗟のことで動揺する神木。

「な、何だ？　なにがあった？」
「出撃です！　敵が現れたみたいです！」
「何だって?!」
「神木さん。すぐに作戦指令室に急ぎましょう。こっちです！」
　三人に連れられるがまま、神木は三階にあるダストシュートに向かう。中に入って長い滑り台を滑っていくと、戦闘服が置かれた着替え室に出てきた。そこで着替えて『ＧＯ』と書かれたボタンを押すと、底が抜けて再び滑り台っを滑っていき、地下にある作戦指令室へと向かう。
　指令室に着くと、すでにニーナとマレーネ、空組の三人は着替えを終えて到着していた。
「あれ、司令は？」
「まだ来ていませんけど……」
　ニーナが不安そうな顔で答える。
「緊急時だってのに、何やってんだ?!」
　神木がそう呟くのと指令室の扉が開いたのは同時だった。
「なに、なに、もうー！　せっかく気持ちよく寝ていたのにぃ」
　寝間着姿のヨハンが寝ぐせをボリボリかきながら入ってきた。
「司令！　なにノンキなこと言っているんですか！　敵が現れたんですよ！」
「んなこと分かっているよ。――つぼみ君、状況報告を」
「は、はい！」
　指名されたつぼみが慌ててモニターに画面を映す。映し出されたのは、見慣れない物体が建造物を破壊している様子だった。
「これは？」
「最近出現している土属性の魔物です。私達はこれを『ゴーレム』と呼んでいます。誰が動かしているのかは分かっていません」
「ゴーレムか……かつて帝都や巴里に現れたという脇侍や蒸気獣みたいなものか」
「伯林華撃団・四季組はゴーレムに対抗すべく、かつて欧州星組で使用されていたアイゼンクライトに帝都の光武と紐育のスターの性能を

組み合わせた、その名もアイゼンクライト改に乗って出撃します」
「ちゃーんと、ウチが整備しといたから思う存分操作できるよ！」
リンがピースサインしながらアピールする。
「――神木さんは、アイゼンクライト改には乗ったことがありませんよね？」
「いや、伯林に来る前に帝都で光武の試乗訓練はやったから、何とかなると思う」
「そうですか」
「そういうわけだから、神木ちゃん。ポツダム広場のゴーレムを倒しちゃってね」
「……分かりました」
「神木さん、出撃命令をお願いします！」
ニーナが神木に言う。

「よし。……伯林華撃団・四季組、出撃！　目標、ゴーレムの破壊！」
「了解！」

パート８

ポッダム広場に現れたゴーレムは全部で１０体。
アイゼンクライト改で出撃した神木たち伯林華撃団・四季組は飛行形態にトランスフォームして空から様子を伺う。
「さすが最新型霊子甲冑。帝都の光武よりも動きが軽いな……」
『神木さん、どうしますか？』
ニーナが通信を通して聞いてくる。
「そうだな。――よし。近距離攻撃タイプの僕とニーナくんが前線に立って、遠距離攻撃タイプのマレーネが後方で支援してくれ！」
『了解！』
作戦を伝えると、すぐに三人のアイゼンクライト改は地上に降り立つ。

「伯林華撃団、参上！」

神木とニーナはすぐにゴーレムたちに切りかかる。不意を突かれたのか、ゴーレムたちは次々となぎ倒されていく。
ゴーレムの攻撃は近距離攻撃型のいわゆる『土埃』だが、後方で支援しているマレーネにはそんなものは子供だましでしかない。
あっという間にゴーレム１０体を倒してしまった。
「どんなものかと思ったが、案外取るに足らない敵だったな……」
『そう思うのはまだ早いみたいよ、隊長さん』
マレーネに言われ、前方を見る。倒されたゴーレムの山の上に、黒騎士の姿に身を包んだ男性が立っている。
「貴様らが、伯林華撃団か。ふん、どんな奴らかと思ったが、この程度か」
「貴様……何者だ!?」
「我が名はヨーゼフ！　兄者の命令によりここに来た。貴様らの命、ここで頂戴する！」
そう言うと、地響きと共に地下から銀色の敵蒸気機械が出現した。

ヨーゼフはそれに乗り込む。
「我が蒸気機械『シュテンゲル』の餌食にしてくれようぞ！」
「来るぞ！　みんな、目標はヨーゼフの『シュテンゲル』の撃破！　いくぞ！」
「了解！」

ヨーゼフの敵蒸気機械『シュテンゲル』のパワーは並大抵のものではなかった。
「きゃあああ！」
前線で戦っていたニーナのアイゼンクライト改を、一振りで吹き飛ばすほどの威力だ。
「ニーナくん！　――クソ、まともに戦ってはこっちの体力を削られるだけだ！　……よし。マレーネ、なるべく後方から攻撃を畳みかけてくれ！　力が弱まった隙に僕がとどめを刺す！」
『了解』
マレーネは飛行形態にトランスフォームすると、空中から攻撃を仕掛ける。近距離戦を得意とする『シュテンゲル』も、空からの攻撃には耐えられない。
「ぐわ、ぐわぁ！」
「今だ！」
隙を見せた『シュテンゲル』に、神木はありったけの力を込めて切りかかる。
「どりゃあああああ！」
神木の攻撃は見事機体の急所を捕えた。動きが止まり、振動が徐々に大きくなっていく。
「バカな……我が『シュテンゲル』が……こんな……雑魚どもに……」
「貴様の負けだ！　ヨーゼフ！」
「クソォ……！　覚えていろー！」
それだけ言い残すと、ヨーゼフは機体ごとその場を後にした。
『逃げられたわね、隊長さん。どうするの？』
「……深追いは禁だ。奴をやっつけたことに変わりは無いからな。―

――よし、帰還するぞ！」
『待ってください！　勝負の後は、四季組のカーテンコールですよ！　神木さん！』
「……へっ？」
「それじゃ、行きますよー！」

「勝利のポーズ、決めっ！」

＊＊＊＊＊＊＊
「いやぁ、おつかれちゃん！　よくやったねぇ！」
そう言って、ヨハンはビールをガブ飲みする。
「んもう、支配人は何もしていないでしょう？」
神木たちの初勝利と、神木の就任祝いを兼ねて、ベルリン市内にある高級レストラン『Ｂｌｕｍｅ』でパーティーが行われることになった。
「それにしても神木さん！　初出撃とは思えないほどの指揮でしたね！」
ニーナが頬を赤らめながら言う。
「ハハ、みんなが僕に協力してくれたからだよ」
「でも凄いです！　私感動しちゃいました！　これからもよろしくお願いします！」
「ハハッ、よろしく」
そんな輪から離れたテーブルに、マレーネは一人座ってワインを飲んでいる。
「マレーネ」
神木はマレーネの席に移動し、隣に座る。
「ありがとう。君の援護が無かったら、ヨーゼフを倒すのは難しかったよ。これからもよろしく」
「……」

マレーネは顔色一つ変えず、持っていたグラスを差し出す。神木はすぐに自分のグラスを掲げると、軽くチンと鳴らして乾杯をした。

ベルリンの春を肌で感じながら、神木はこの先どんなことがあってもやっているけるという確信を抱いていた。

【Ｅｐ．１　完】

Ｅｐ．２　孤高の戦士
パート１

＊＊＊＊＊＊＊

「ふん、ヨーゼフめ。伯林華撃団相手に尻尾を巻いて逃げてきたらしいね」

トゥルーデが嘲笑しながら言う。ユッタもニヤニヤしている。

「まったく、あれだけ啖呵を切ったのに、情けないよ」

「姉貴、言いすぎだぞ。ヨーゼフ兄貴だってあぁ見えてショックを受けているんだ」

ハインリヒがたしなめるが、トゥルーデはフンっと鼻で笑う。

「何だい、男どもは女々しいねぇ。情けないと言って何が悪い？　事実だろう」

「トゥルーデ！」

「我が弟妹よ……」

闇に包まれた声が奥から聞こえる。三人はその場で直立不動になる。

「あ、兄者！」

「……ヨーゼフは失敗した。だが、こちらも奴らを甘く見ていた節がある。――トゥルーデよ、次はお前に任せる」

「はい。お兄様の期待に応えられるよう、このトゥルーデ、命に代えても尽くすつもりです」

「……期待しておるぞ」

＊＊＊＊＊＊＊

《あぁ、ロミオ。あなたはどうしてロミオなの？》

《ジュリエット、君はどうしてジュリエットなんだ？》

舞台の上で、ニーナとマレーネが圧巻の演技をしている。観客は息

をのんでその芝居に食い入るように見ている。
伯林歌劇団五月公演『ロミオとジュリエット』は、初日以来連日満員御礼で立ち見を擁するほどの盛況ぶりだ。特にマレーネは【ブロードウェイから舞い降りた大天使】として批評家たちからこぞって称賛の声を浴びている。ニーナも新人ながら、その堂々とした振る舞いに早速ファンが出来、こぞってブロマイドを買い漁っている。
神木も慣れないモギリに悪戦苦闘しながら、何とかチケットをさばいた。
空組の三人も、舞台の準備や手伝いにてんてこ舞い。特にリンは舞台監督も兼ねているため、不備が無いように夜遅くまで何度も点検をしていた。
何もしていないのは、ヨハンただ一人だけだった。
額ににじみ出た汗をハンカチで拭いていると、ヨハンが「神木ちゃん」と近づきながら声を掛けてきた。
「支配人。何ですか？」
「今、ヒマ？」
「は？……はぁ。まぁ、モギリの仕事は終わりましたけど……」
「ならちょうどいい。――実は今日新入隊員が来ることになってて ね。神木ちゃん、迎えに行ってよ。待ち合わせ場所はベルリン中央駅だから。よろしくねー」
「えぇっ？　――そういうのは、支配人の仕事じゃないんですか？」
「何言ってんの！　僕ちゃんこれからお昼寝タイムなんだから。さっさと行ってきて！」
言うだけ言って、ヨハンはさっさと奥に引っ込んでしまった。
一人残された神木は、言いつけを無視するわけにもいかず、結局迎えに行くことにした。

パート2

ベルリン中央駅に向かった神木だったが、構内を探してもそれらしき人は見かけなかった。
「おかしいなぁ。行き違いになったのかな？」
不審に思った神木は、蒸気小型コンピューター電話【アイフォトロン】を取り出してヨハンに電話をする。
『……もしもしい？　誰？』
「あ、支配人。神木ですけど、駅に新入隊員らしき人を見かけなかったのですけど……」
『……あぁそれならさっき副指令からこっち向かってるって連絡来たから……』
「は？」
『……悪いけどすぐ戻ってきてね～それじゃ、おやすみ』
それだけ言うとヨハンは通信を切った。
「なんだよ、いったい……」
苛立ちながら駅を後にし、劇場に戻る。
伯林の街並みを歩きながら見渡すと、アイゼンクライト改に乗っている時とはまた違った光景に見える。
『そう言えば、まだ市内をゆっくり観光していないな……。今の舞台が終わったらちょっと探検してみるか』
そんなことを考えながら歩いていると、突然前方から銃声と阿鼻叫喚が聞こえてきた。
「ぎ、ぎ、銀行強盗だー！」
太った男が叫びながら神木の横を駆け抜けていく。
「なに、強盗？」
現場に駆け付けると、警官隊に囲まれる形で覆面をした銀行強盗が女性行員を人質に銃を向けていた。
「おい！　馬鹿な真似はよせ！　銃を下すんだ！」
年老いた刑事が必死に呼びかけるが、犯人は応じない。
「うるせぇー！　早く１００万マルクと逃走用の車を用意しろ！

じゃなきゃ、この人質を殺す！」
「キャーーー！」
「くっ……」
　刑事は歯がゆそうに唇を歪める。
『いかん！このままじゃ――よし、すぐに劇場に戻って華撃団を出撃させよう。そうすれば――』
　神木がそう思った次の瞬間、突如銀行の壁が爆発した。
「な、なんだぁ?!」
　あっけにとられた犯人が思わず顔を上に向ける。空から埃やコンクリートの破片が降ってくる。
「あ、危な！」
　犯人は咄嗟に人質を離し、その場にうずくまる格好を取る。その瞬間を刑事は逃さなかった。
「今だ！　捕まえろー！」
　警官隊が押し寄せて、犯人はそのままお縄となった。
「あーあ、情けないねぇ。破片ぐらいで怖がるようじゃ、強盗には向いてないね」
　あっけにとられた神木の後方からため息交じりの声がする。振り返ると、バズーカ砲を肩に抱えた金髪パーマで引き締められたボディの、黒のタンクトップに迷彩色のズボンを履いている黒人女性が立っていた。
「そう思うだろ？　あんたも」
『な、何だこの軍人は？』
「おや、あんた……日本人だね？　もしかして……あんたが神木かい？」
「えっ……？　どうして自分の名前を……。まさかっ、君が新入隊員?!」
「やっぱりあんたか。そうさ。あたしが今日から伯林華撃団・四季組に配属されることになった、ナターシャ・イヴェールだ。ナターシャと呼んでくれ」
　フランス訛りのドイツ語でナターシャはそう言うと、二カッと笑っ

て握手を求めてきた。

パート3

「あ、見つけた！　ここにいたのね、ナターシャ！」
　二人の後ろから声がする。目線を向けると、フレアスカートを着た茶髪ロングの女性が近づいてくるところだった。女優のグレタ・ガルボ似の美形で、年齢はマレーネと同じくらいに見える。
「もう、勝手に出歩いちゃダメでしょう？」
「いいじゃねぇか。伯林はあたしも初めてなんだから」
「だからダメなのよ。劇場まで無事に送り届けるのが私の義務なんだから。――あら、あなたは？」
　隣に立っていた神木に気づく女性。
「あ、じ、自分は日本から参りました伯林華撃団・四季組の隊長、神木裕一郎です」
「あぁ。あなたが神木くんね。はじめまして、伯林華撃団副指令のスピカ・レンテです」
　スピカはそう言って手を差し出す。神木も握手をし返す。
「副指令……あなたが。お噂はかねがね」
「ふふっ。どうせロクでもない噂でしょう？」
「そ、そんなことないです。ニーナくんをスカウトしたって……」
「ニーナがそう言ったの？　まぁ、半ば強引だったけどね……。ま、いいわ。立ち話もなんだし、早く劇場に戻りましょう」

＊＊＊＊＊＊

「というわけで、この劇場にまた戻ってきました。みんな、よろしくね」
　みんなの前に立ってスピカが笑顔で挨拶をする。
　舞台終了後、ニーナとマレーネを交えて一同はサロンに集合していた。ニーナは久々にスピカに会えて感動している様子だ。
「じゃあ、これからはずっと私達と一緒なんですね？」
「ええ、そうよ」

「やったー！」
「――なに？気に喜んでいるのよ」
　キセルを吸いながら、手放しで喜ぶニーナを見てため息をつくマレーネ。
「スピカが戻ってくると言うことは、海外でのスカウトは芳しい結果ではなかったということなのよ」
「……マレーネの言う通りね。でも、そう簡単に霊力の持ち主がいるとは考えてないから、あまり気を張らないことね――さて」
　スピカはサロンの隅の方で座って待機していたナターシャを連れてくる。
「今日から新たに、伯林華撃団・四季組のメンバーに加わることになった、ナターシャよ。ナターシャ、みんなに挨拶して」
　ナターシャは一同を品定めするように一瞥してから自己紹介を始めた。
「ナターシャ・イヴェールです。生まれはモロッコで、17歳の時に巴里に移住してフランス外人部隊の傭兵として4年間前線で戦ってきました。戦闘や戦術面に関しては皆さんより長けてると思うので、どうぞよろしく」
　深々と頭を下げるナターシャ。一同はパチパチと拍手する。
「フランス外人部隊って凄いな。エリートじゃないか」
　拍手をしながら神木が声を掛ける。
「しかも4年も前線にいたって、並大抵のことじゃないぞ」
「ありがとう。そう言う隊長も、日本では海軍にいたんだろう？」
「一応ね。君とは比べ物にならないけど」
「――さぁ、ニーナとマレーネは明日も舞台でしょう？　ナターシャも明日から舞台に上がるから、今日はここまでにして早く寝ましょう」
「えぇ？　ナターシャをもう舞台に上がらすんですか？」
　驚きの声を上げる神木。
「そうよ。彼女も女優ですもの。良いわよね、ナターシャ？」
「これでも、ガッツと度胸は人一倍あるからね。舞台だろうがなんだ

ろうが、ヘッチャラさ」
そう言って、腕の筋肉を見せるナターシャ。
「――あ、神木くんは夜の見回り、お願いね。それじゃ、お開きにするわよ」
スピカの一声で、一同はサロンを後にした。

パート４

その日の夜。劇場内を見回りしていた神木は、ふとスピカのことが気になった。

『そう言えば、僕はまだ副指令のことをよく知らないな。――せっかくだし、少し話をしてみるか』

スピカの部屋は神木の隣にある。神木は一息ついてからドアをノックした。

「はーい、どなた？」

「神木です。少しよろしいでしょうか？」

「神木くん？　ちょっと待って、カギを開けるから」

カギが解除される音と共に、中からスピカが出てきた。服装は変わっていない。

「どうしたの？　何かあったの？」

「あぁ、いえ。――きちんと、挨拶をしていなかったもので」

「あら、それでわざわざ？」

「はい。――お邪魔だったでしょうか？」

「いいえ、ちょうど私もヒマしていたから。――どうぞ、中に入って」

「失礼します」

スピカの部屋は女性の部屋という感じがせず、必要最小限のものしか置かれていなかった。神木がキョロキョロ辺りを見渡していると、机の上に置かれている写真に視線が釘付けになった。まだ１０代前半ぐらいの５人の少女たちが戦闘服姿で写っている。彼女たちの後ろにあるのは、アイゼンクライトのようだった。

「……欧州星組。かつて私が所属していた部隊よ」

神木の視線に気づいたスピカが説明する。

「欧州星組……。確か、華撃団が出来る前に組織されていた実験部隊、でしたよね？」

「真ん中に立っているのが、隊長だったラチェット。右二人が、今帝撃にいるレニと織姫。左二人が、紐育にいる昴。そして、私よ……」

遠い目をするスピカ。

「欧州星組解散後、理由は不明だけど私の霊力が突然ピーク時の半分にまで落ちたの。霊力が半分までしか出せなきゃアイゼンクライトは操れない。アイゼンクライトが操れなきゃ私が戦う意味は無い。だから早々に引退を決めて、オランダの田舎にある小さな家で隠遁生活を送っていたの」
「霊力が落ちたって……心当たりはあるんですか？」
「無いわ。だからどうすることも出来なかったの」
　あっけらかんとした口調で答える。
「でも、まだ１０代で隠遁生活だなんて……」
「引退する時に口止め料として一生暮らせる程の額をもらったから、毎日遊んでても問題無かったわ」
「……でも、引退していた方がなんでまた伯林華撃団の副司令に？」
　スピカはベッドに腰かけると「一年前のことよ」と話し始めた。
「どこをどう調べたのかは分からないけど、突然ラチェットが私の家を訪ねてきたの。欧州星組のみんなには私の居場所は言っていなかったから……。その時に、伯林華撃団の副司令をやってくれと打診されたのよ」

＊＊＊＊＊＊

『――私はもう引退した身なのよ、ラチェット。戦線から離れて１０年以上経つわ』
『私も今は引退の身よ。でも紐育星組の副司令としてやっているわ』
『あなたはそれでも最近まで戦っていたじゃない。私はもう……』
『スピカ。私は何も戦えと言っているわけではないの。それに、戦うことだけが副司令の仕事ではないのよ。隊長や隊員への指揮やケアも、大切な役目なのよ』
『でも……』
『欧州星組にいた頃から、あなたが司令向きであることは薄々感じていたわ。それにまだ悪が撲滅されたわけじゃない。人々の平和を守るためにも、伯林華撃団は、あなたの力が必要なの』

『……』
『よく考えて、決まったら連絡をして。私はしばらくこっちに滞在しているから……』

＊＊＊＊＊＊

「ラチェットがオランダを発つ前日に、副司令を引き受けると返事をしたわ」
ふぅーっと息を吐くスピカ。
「多分、心の奥のどこかで、負い目を感じていたのかもしれないわね。他の四人が、まだ体を張って戦っていたから……」
「……そうだったんですか」
「――ま、副司令もやってみると案外楽しいわよ。おかげで、ニーナやマレーネ、ナターシャとも出会えたし。――それに神木くん。あなたにも、ね」
「えっ……？」
ふいにそう言われ、ドギマギする神木。
「……なーんてね。さ、まだ夜の見回りが残ってるんでしょ？　明日も公演はあるんだし、早く終わらせて来なさい」
「は、はい」
スピカにせかされる形で、神木は部屋を後にした。

パート5

翌日。ナターシャの舞台デビューは、本番前の前座で場を盛り上げるシェイクスピア役となった。演技はほぼ未経験ながらも、本人の言う通り緊張せずに堂々とした立ち振る舞いが、逆にシェイクスピアの貫禄を表現していた。また、本人は元々トーク能力があったようで、三十分という短い時間ながら何度も観客を笑わせていた。

「これだけの度胸があれば、きちんと演劇を勉強すれば凄い女優に化けること間違いなしね」

舞台袖から見ていたスピカが呟く。隣にいたリンも頷く。

舞台は無事に進み、いよいよクライマックスという時だった。

ブーーーーブーーーーーブーーーーー

劇場内に突然警報が鳴り響いた。会場内がざわざわし始める。ニーナとマレーネも演技を止めた。

『バアフトゥン（アテンション）、バアフトゥン。ゴーレムが出現。劇場内にいる皆さまは、係員の指示に従って避難をしてください』

スピーカーからつぼみの声が流れる。

「はーい。お客様、落ち着いて、私たちの指示に従ってくださーい！」

売り子をしていたアンジュが声を上げながら、観客たちを誘導していく。観客たちも大騒ぎせず、避難は１０分もかからず完了した。

神木たちは急いで作戦指令室に集合する。

「なに、なに、もうー。せっかく人が惰眠貪っていたのにー」

警報で昼寝を妨げられたヨハンもやって来る。

「……何だい。あのモヤシ野郎は？」

ナターシャがヨハンを軽蔑のまなざしで見る。

「も、モヤシ野郎とは何かね！　私はここ、伯林華撃団の司令だぞ！君こそ、誰だ！」

「伯林華撃団・四季組新メンバー、ナターシャ・イヴェールだよ。司令だか何だか知らないけど、この緊急時にそんなだらしのない態度でい

るとタダじゃすまないよ」
「な、何だと?!」
「おい、今は喧嘩している時じゃないぞ！」
　神木が仲裁に入る。そしてスピカに向き合う。
「……それで、ゴーレムの出現場所は？」
「赤の市庁舎付近よ。今、現地の様子を確認するわ」
　スピカがモニターを操作する。赤の市庁舎前の広場に５体ほどのゴーレムが闊歩している。
「このままだと中にいる役所の方々の身が危ないわ。神木くん。すぐ出撃命令を！」
「はい！　伯林華撃団・四季組、出撃せよ！　目標、赤の市庁舎！」
「了解！」

＊＊＊＊＊＊＊

　赤の市庁舎に、トゥルーデと彼女の敵蒸気機械『アネモーネ』の姿があった。
「ハッハッハ。そうだ、破壊だ！　破壊しろ！　こんな趣味の悪い赤色の建物なんか破壊してしまえ！」
「そうはさせるか！」
「……なにっ!?」
　声と共に空からアイゼンクライト改が降ってくる。空中から攻撃を掛けられたゴーレムたちはあっという間に倒された。
「伯林華撃団、参上！」
「……ほう、貴様らが伯林華撃団か……。ヨーゼフを倒したという」
　そう言ってトゥルーデは不敵に笑う。
「ヨーゼフ？　……そうか、仲間か。名を何と言う?!」
「私の名はトゥルーデ！　お兄様に使えし兄妹の長女……。ヨーゼフの恨み、ここで晴らさせてもらう」
　神木は『アネモーネ』をゆっくり観察する。機体中央にあるシルバーの紐飾りが気になった。

『隊長、作戦はどうするんだい？』
　初出撃のナターシャが通信で尋ねてくる。隊長は状況ごとに「作戦」を立ててそれを隊員たちに指示することが出来る。作戦のモードは【雪】【月】【花】の三種類あり、【雪】は防御重視、【月】は防御・攻撃共にバランス型、【花】は攻撃重視の作戦が取れる。
　前回のヨーゼフでは【花】で押し切ったが、トゥルーデは何か裏がありそうだ。神木はそう睨んだ。
「全隊員に告ぐ。今回の作戦は、防御重視の【雪】で戦う」
『了解！』
『ちょっと待て！』
　ナターシャが声を上げる。
『相手は一人でこっちは四人だぜ？　それにあたしの戦術は近距離攻撃特化だ。【雪】でちんたらやってたら思う存分に暴れ回ることは無理だぜ』
「今回のトゥルーデは何か仕掛けがあると睨んで、用心をしての【雪】だ。相手は仲間の復讐に燃えているんだ。正攻法で来るとは思えない」
『甘いよ隊長。そんなんで、今後もっと強い敵が現れた時どうするのさ？』
「ナターシャ。君のいた部隊とここ伯林華撃団は違うんだ。向こうの常識とここでの常識が違うってことを分かってくれ。とりあえず今は、僕の指示に従ってくれ」
『分かってないのは隊長の方さ。あたしは経験だけは誰にも負けない。こういう時は、袋叩き一択さ！』
　言うが早いが、ナターシャのアイゼンクライト改は一足早くトゥルーデに向かっていく。
「ナターシャ！　クソッ、二人とも、急いでナターシャの援護をするぞ！」
「了解！」
　ナターシャはトゥルーデ目がけて一直線に突っ込んでいく。
『隊長は甘すぎる。そんな甘々じゃ、戦場じゃ命とりだぜ！』

「おりゃあああああああ！」

次の瞬間、ナターシャの機体をトゥルーデの『アネモーネ』のシルバーの紐飾りが貫通していた。
紐飾りは見掛け倒しで、敵が近づいてきた瞬間に鋼鉄と化し相手を貫くシステムとなっていたのだ。
「ナターシャ！」
神木たちは慌ててナターシャのアイゼンクライト改に駆け付ける。
『たい……ちょう……』
通信スピーカーからナターシャの弱々しい声が聞こえる。
「ナターシャ、無事か!?」
『だい……じょうぶ……かす……り傷さ……』
「あーっはっは！　ヨーゼフの恨み、晴らさせてもらったよ！」
トゥルーデは高笑いをすると、そのまま姿をくらませた。
『神木くん。聞こえる？』
指令室からスピカが通信してくる。
『すぐにナターシャを劇場の医務室に連れていって！』
「わ、わかりました！」

パート6

その日の夜。ヨハンを除く一同はサロンに集まっていた。
「……それで、ナターシャの容体は？」
神木がスピカに聞く。
「幸い、急所は外れていたわ。本人の強靭な肉体のおかげで、怪我も普通より早く治りそうとのことよ」
「良かった……」
ホッと安堵する一同。だが、スピカの顔は険しいままだ。
「ナターシャには、それ相応の処分が必要ね」
「……え？　副司令、どういうことですか？」
「彼女は上官であるあなたの命令を無視し、身勝手な行動をとった。その結果、あなたを始め他のメンバーに迷惑を掛けた。これは立派な規律違反よ。司法局に問い合わせて軍法会議に掛ける必要があるわね」
「ちょ、ちょっと待ってください！」
ニーナが口を挟む。
「軍法会議って……、そんなのひどすぎますよ！」
「ニーナ。これは遊びじゃないの。一人の行動が、部隊を破滅させることだってあるのよ」
「でも……」
「ニーナ」
マレーネが声を掛ける。
「マレーネさん……。マレーネさんも、何とか言ってくださいよ！」
「ニーナ、落ち度は１００パーセント彼女にあるはずよ。私たちがどうこう言う筋合いは無いわ」
「だって……」
「ま、待ってください！」
神木がたまらず声を上げる。
「副司令、処分は待ってくれませんか？　自分がナターシャと話をします。彼女だって責任は感じているはずです。それに――彼女は僕

たちの仲間なんですよ」
「仲間だからこそ、厳しくしようと言っているの」
「……とにかく、自分に任せてくれませんか？　お願いします！」
「……分かりました。二人でよく話し合ってから、私のところに来なさい」
「はい！」
　神木はサロンを後にして、ナターシャの部屋へと向かう。だが、彼女は不在のようだった。
『おかしいな……どこにいるんだろう……』
　散々探し回った末、彼女はテラスにいた。
「ナターシャ……」
　神木は小声で彼女に声を掛ける。包帯で巻かれた腕が痛々しい。
「隊長か……。まぁ、座れよ」
「あぁ……」
　言われるがまま、神木は隣に腰かける。
「その……怪我は、どうだい？」
「こんな怪我、傭兵だった時に比べれば大したことないさ」
「……そうか。なら、良いんだ」
　ナターシャは市内の景色を見つめたまま、動かない。神木はまどろっこしいことは止めて、率直に話すことにした。
「副司令が、君を軍法会議に掛けようとしている」
「……」
「それ相応の処分が必要だと言うのが言い分だが、僕もニーナくんもそれは重すぎると意見した」
「……」
「僕は今度のことは問題視していない。君が無事であるならそれでいいと考えている」
「……だから甘いんだよ、隊長は」
「――えっ？」
「軍人にしては、優しすぎるのさ。あんた」
　神木に向き直るナターシャ。

「――あたしは、４年間傭兵として戦場の最前線で戦ってきた。同期や後輩、尊敬する上司が目の前で倒れていくのをこの目で何度も見てきた。仲間を一人失うたびに、あたしは自分がもっと戦術面に精通していれば……と後悔したよ。だからあたしは、古今東西ありとあらゆる戦術本を読んで、どの場面にどういう戦術がしっかり合うのかをシミュレーション出来るようにした。――だけど、アイゼンクライト改での戦闘は盲点だったなぁ。向う見ずに突っ込んでいった結果が、このザマさ」

　ナターシャはギプスに目を落とす。

「はーあ、せっかくスカウトしてくれたスピカさんにも迷惑かけちゃったし。軍法会議に掛けるんなら、あたしはそれで構わないと思っている」

「ナターシャ！」

「それぐらいのことをしたんだよ、あたしは。どういう処分を下されようと、あたしはそれを甘んじて受け入れるつもりだよ」

「……ナターシャ、君は確かに今日失敗をした。だが一度の失敗ですべてを棒に振る必要がどこにある？　失敗したのならそれを反省し、次回に生かすのが軍人としてあるべき姿なのではないのか？」

「隊長……」

「僕は海軍に所属してまだ2年だし、うち1年は軍楽隊で戦闘には参加していない。だから僕の言う言葉は頼りないかもしれない。だけど、命がけで君たちの盾になる覚悟はある。だからもう一度、僕たちと一緒に戦ってくれないか？」

「隊長……」

　ナターシャはしばらく神木の顔を見つめていたが、そのままプッと吹き出して照れ臭そうに笑った。

「――ありがとう。隊長の言葉を聞いて、何だかやってやるぜ！って気持ちになったわ」

「そうか！……よし、スピカさんの所に行ってもう一度チャンスをくれるよう直談判しよう！」

＊＊＊＊＊＊＊

「――それが、二人の出した結論ね？」

黙って話を聞いていたスピカが、氷のように冷たい声を発する。

「ええ。伯林華撃団・四季組隊長としてお願いします。もう一度、彼女にチャンスをくれませんか？」

深々と頭を下げる神木。ナターシャもそれに続く。

スピカはしばらく二人を眺めていたが、机の上にあった書類をビリビリ破るとそれを床に落とす。

書類には『ナターシャ・イヴェールの処罰に関して』の文字があった。神木は顔を上げる。

「副司令、これって……」

「……賢人機関に対する言い訳を考えなくちゃね。ほら、行きなさい。……ナターシャ、さっさと怪我を治して。敵は待っちゃくれないわよ」

「……はい！　ありがとうございます！」

二人は部屋の外に出ると、互いに笑顔でハイタッチした。

パート7

ナターシャの怪我は、3日もせずに9割方回復した。普通に考えても驚異の回復力だ。
「だから言ったろう？　心配するなって」
サロンで、ギプスの外れた腕を見せながら笑うナターシャ。マレーネを除く他の皆も笑顔だ。
「でも良かったよ本当に。大事に至らなくて」
「オーバーだなぁ隊長は。あたしは打たれ強いのさ」
「――みんな、聞いて」
スピカが手を叩きながらやってくる。
「いよいよ明日が『ロミオとジュリエット』千穐楽よ。残り4公演、気合い入れていくわよ！」
「はい！」
皆が返事をした瞬間、警報が劇場内に鳴り響いた。
「おっと、敵さんのお出ましね。みんな、すぐに作戦指令室に集合よ！」
「了解！」
指令室に集まると、モニター画面に赤の市庁舎とトゥルーデの姿があった。
「こいつ……また現れたのか！」
ナターシャが言う。
「みんな！　前みたいな戦闘はしないでね。必ずこいつを倒すのよ！
――神木くん、出撃命令を！」
「はい！　伯林華撃団・四季組、出撃！　目標、トゥルーデの撃破！」
「了解！」

＊＊＊＊＊＊

赤の市庁舎前の広場では、トゥルーデの高笑いが響いていた。
「あーはっはっは！　ヨーゼフの仇討ちに目がくらんで肝心の破壊を

忘れていたとは、私もつくづくバカよねぇ。さぁ、忌まわしき人間どもを恐怖に陥れてやる！」
「そこまでだ、トゥルーデ！」
　空中からアイゼンクライト改が飛来してくる。
「伯林華撃団、参上！」
「ふん。来たか、負け犬どもめ。また私に倒されたいみたいねぇ」
「その言葉、よく覚えておくんだね」
　ナターシャが啖呵を切る。
「泣いて許しを請いてもダメだからな」
「チッ、調子に乗りやがって！　すぐ楽にしてやるからな！」
　トゥルーデが襲い掛かってくる。神木が素早く命令を出す。
「みんな、【雪】作戦でいくぞ！」
「了解！」
　防御力を上げ、持久戦に持ち込む一同。上手いこと『アネモーネ』の攻撃をかわし、相手が隙を見せるのを待つ。
「クソッ。ちょこまか動きやがって……。うぁあああああ！」
　痺れを切らしたトゥルーデが一直線に突っ込んできた。
「今だ！」
　神木の合図と共に、三人が一斉にトゥルーデに攻撃を仕掛ける。隙を突かれたトゥルーデは『アネモーネ』の防御も間に合わず攻撃を直で受ける。
「ぎゃあああああああああ！！！」

　トゥルーデの断末魔の叫びが響き渡る。
「これで終わりだ！」
　ナターシャの渾身の一撃が、『アネモーネ』の急所を突いた。

「お兄様ぁあああああああ！！！！！　お許しをぉおおおおおお！！！！！」

『アネモーネ』は爆破に巻き込まれ、トゥルーデは業火の中で散っていった。
「……終わったな」
燃え盛る炎を見ながら、ナターシャが呟く。
「あぁ、僕たちが勝ったんだ。ナターシャ、君のおかげだ」
「……隊長。あんたの場をよく見た指揮、大したもんだよ。これからもよろしくな」
「さぁ、さぁ。皆さん！」
ニーナが元気よく割って入る。
「リベンジも果たしたことですし、いつものあれ、やりましょう！」
「あれ？　あれって？」
「四季組は戦いに勝った後は、いつも『勝利のポーズ』をするんですよ。さぁ、ナターシャさんも入って、入って。――では、行きますよ。せーの！」

「勝利のポーズ、決め！」

＊＊＊＊＊＊＊
翌日の千穐楽は、無事に終えることが出来た。
カーテンコールでは、お客さんのスタンディングオベーションが10分以上も続いた。
ニーナたちキャストは満面の笑みでお客さんたちに手を振り続けた。
ナターシャも舞台の楽しさに目覚めたようで、これから本格的に演技の勉強をするらしい。
また、ナターシャもスピカの尽力でお咎めなしとなった。
舞台袖で見ていた神木は、感慨の笑みを浮かべて惜しげもない拍手を送った。

【Ep.2 完】

Ｅｐ．３　ヤマトナデシコ二変化
パート１

＊＊＊＊＊＊＊

「お姉さまが、やられた……そんな……」
　ユッタは愕然として床に崩れ落ちる。
「お姉さまを倒すなんて……許さない！　兄者、ここは是非あたしに、復讐のチャンスをください！」
「待て、ユッタ」
　ハインリヒがたしなめる。
「俺たちの目的を忘れたのか？　この伯林を根城に、世界を征服することこそが真の目的。それを忘れて、ただ仇討ちのために行くなんて本末転倒だよ」
「でも……」

「ハインリヒの言う通りだ……」

　兄者と呼ばれた男の声が響き渡る。
「ユッタ……。お前は少し頭に血が上りすぎている……。ハインリヒよ。今度はお前に任せる。伯林華撃団を倒し、人間どもを震え上がらせろ」
「分かりました」
「期待しておるぞ……」

＊＊＊＊＊＊＊

「――リンちゃーん。本当にこの辺りに落としたのかい？」
　埃まみれになった顔で神木が尋ねる。

「おかしいなぁ。確かに、この辺りに落としたはずなんですけどー」
顔をススだらけにさせながら、リンが首をかしげる。

事の発端は、朝、リンが舞台に使う設計図を無くしたと騒いでいるところから始まる。
「だからちゃんと持ち物は整理しなきゃダメだって、言っているでしょう？」
つぼみがやれやれといった顔をする。
「だってー……」
「それで、リン。心当たりはないの？」
アンジュがリンの顔を覗き込んで尋ねる。
「うーん……。昨日の記憶が大道具部屋で止まっていて……」
「じゃあ、きっとそこにあるんだよ！　神木さん、一緒に探してあげてください！」
「ええっ?!　僕が!?」
いきなり流れ弾が飛んできて焦る神木。
「だって神木さん、大して用事ないでしょ？　リンに付き合ってあげて下さいよー」
「うーん。ま、こっちは構わないけど……」

というわけで、朝からリンの設計図探しに付き合っているというわけだ。
「もう一回、1から探してみましょう！」
「えー、だってもうこれで3周はしているよー！　他の場所も探してみた方がいいんじゃないかなぁ？」
「そんなことありません！　絶対この大道具部屋のどこかにあるはずです！　さ、神木さん。探しますよ！」
「あら、二人とも」
入口からスピカの声がする。
「どうしたの、こんなところで？」
「あ、いや……。リンの設計図探しを手伝っているんですけど……」

頭をかきながら説明する神木。
「あら。設計図って、もしかしてこれのこと？」
話を聞いたスピカが手に持っていた紙を差し出す。
「こ、これです！　これこれ！」
目を輝かせながら、差し出された設計図に目を通すリン。
「どこにあったんですか?!　これ！」
「どこって……資料室のテーブルの上よ。誰かが置き忘れてたみたいだから、持って来たんだけど……」
「……へ？　資料室？」
「お役に立てたのならよかったわ。それじゃ、私はこれで」
スピカはそう言うと足早に大道具部屋を後にした。神木は黙ってリンを睨む。
「――そう言えば、大道具部屋に行った後、資料室に寄ったよーな、寄らなかったよーな……」
「……リン！」
「わー、ごめんさーい！」
平謝りするリン。
「お詫びに、神木さんが絶対喜ぶ場所に連れていってあげるから、許してー！」
「……絶対喜ぶ場所？」
神木は訝しげに首を傾げた。

パート2

リンが連れてきたのは、市内にある日本人街『クライナ・トーキョー』（リトル・トーキョー）だった。ドイツに移り住んだ移民や現地の駐在員たちが集うコミュニティで、街中には住民たちの家の他に多くの日本食レストランや百貨店、邦字新聞社までも軒を連ねている。

「伯林にこんなところがあるなんて、驚きだなぁ」

オリエンタリズム溢れる街並みを見ながら、神木は感嘆の声を上げる。

「街には中華レストランもあるから、私もよくこの『クライナ・トーキョー』には来ているんですよ」

「赴任して以来、ずっと舞台と戦闘に掛かりっきりだったから、こんな場所があるとは知らなかったよ」

「そうでしょう？　さ、行きましょう！　今日は私、スシを食べたい気分なんです！」

「おいおい。その寿司は俺が奢るのか？」

「だって神木さんは、紳士でしょう？　紳士はレディに対して太っ腹じゃなきゃ！」

「ちゃっかりしているなぁ」

神木は呆れながらも、『クライナ。トーキョー』で一番美味しいという寿司屋『ＨＡＮＡＢＩ』に入った。

「寿司なんて、日本を出る前に食って以来だからなぁ。まさかこっちで食べられるとは思わなかったよ」

店内には、他にも日本人の客で溢れている。神木はその中で、とある少女に釘付けとなった。

少女は年齢は１０代後半といったところで、ロングの黒髪をポニーテールにまとめ、化粧をし、最新のアッパッパに身を包んでいる。

『現地に住んでいる方なのかな？　しかし、あの顔どこかで……』

「何してるんですか、神木さん。スシが冷めちゃいますよ」

「あ、あぁ、ごめん。……って、寿司は元から冷えてるんだよ」

ノリツッコミしながら食事をしていたら、いつしか少女の姿はどこにもなかった。

＊＊＊＊＊＊＊

その夜。神木は自室で日記をつけていると、ドアをノックする音がした。

「はーい、どなた？」

『私です。スピカです』

「副司令ですか。どうぞ、カギは開いてます」

中に入ってきたスピカ。その手には何やら封筒が握られている。

「なんでしょう、それで」

「神木くん。急で悪いんだけど、明日、『クライナ・トーキョー』にある日本大使館に行ってきてくれないかしら？」

「日本大使館ですか？　良いですけど……なんでまた？」

「実は、大使館主催のパーティーに私と支配人が招待されたんだけど、支配人が面倒くさいとダダをこねて聞かないの。それで、悪いんだけど、明日大使館に支配人の代わりに神木くんが参加するってことをあなたの口から向こうに伝えてほしいの」

「はぁ、分かりました」

「ごめんなさいね。無理言っちゃって」

「いえ、全然。日本大使館に行けば良いんですね？　分かりました！」

神木は元気よく返事をして、スピカから封筒を受け取った。

＊＊＊＊＊＊＊

翌日。神木は『クライナ・トーキョー』内にある在ドイツ日本大使館にやってきた。東洋趣味が強い日本人街の中に、西洋風の館があるのは何ともちぐはぐしているように思えた。

『そう言えば、ここの所忙しくてきちんと挨拶出来ていなかったな……』

そんなことを思いながら、神木は受付へと向かう。受付には目つきの悪い日本人の初老の警備員が座っていた。
「……カン・イッヒ・デァ・ヘーフン？　……何か用ですか？」
「あの、自分。伯林華撃団から参りました、帝国海軍少尉の神木裕一郎です。大使にお会いしたいのですが……」
「あぁ、伯林華撃団の方ですか。少々お待ちください」
警備員はそう言って、内線電話を掛ける。一分ほどやり取りをした後、「どうぞ、中にお入りください」と言ってくれた。
中は日本的な要素は何一つ無く、玄関に飾られている『在独日本大使館』の掛け軸ぐらいだった。神木は警備員の案内で建物の最上階にある『大使室』へと向かう。
「この部屋になります」
大使室の扉はとても広く、来るものを威圧するほどの空気を持っていた。神木は一呼吸ついてから、ドアをノックする。
『……はい』
中から男性の声がする。
「伯林華撃団より参りました、帝国海軍少尉・神木裕一郎です」
『……どうぞ。お入りください』
「失礼します」
中に入ると、髪をオールバックにして黒縁眼鏡を掛けた髭の男性が座っていた。が、神木が入ってくると立ち上がって握手を求める。
「やぁ、やぁ。君が神木裕一郎少尉か。華撃団での活躍は聞いているよ」
「挨拶が遅くなり、申し訳ございません」
「とんでもない。挨拶なんていつでも出来るからね。――おっと失礼。私も自己紹介を忘れていた。在ドイツ日本大使館特命全権大使の、若林正毅だ。よろしく」
「神木裕一郎です。よろしくお願いします」
「伯林はどうかね？　もう慣れたかい？」
「えぇ。とても住みやすいと思います。でも、日本人街があったとは知りませんでした」

「日本人街と言っても、我々のような駐在員のためのコミュニティから派生したところだからな。ま、日本が恋しくなったら遊びに来るといい」
「はい、ありがとうございます。――あの、実は、大使館で今度開かれるパーティーなのですが、支配人の都合が悪いので当日は私と副司令がお伺いするというのを、本日お伝えに来ました」
「何だ、そんなことでわざわざ大使館まで来てくれたのか。面倒をおかけしましたな。ささ、座って。くつろいでください」
　正毅がソファを勧めるため、ご厚意に甘える。
「そうだ、私の娘を紹介しましょう。――おーい、秋奈！　お客さまにお茶をお出ししなさい！」
『かしこまりました。お父様』
　奥の部屋から可愛らしい女性の声がする。
「娘さん、ですか？」
「えぇ。今年で17になるんですがね、親バカでしょうが非常に可愛いんですよ。5歳の頃は毎日のように『おとっちゃんと結婚する』なんて言ってましたからね」
「はぁ」
「失礼します」
　奥の部屋から煌びやかな和服を着た女性が、お盆を持って入ってきた。
「紹介しましょう。私の一人娘の、若林秋奈です」
　彼女の顔を見て、神木は言葉を失った。
　化粧で印象こそ違えど、昨日、寿司屋で会った少女その人だったからだ。

パート3

「……私の家内は、秋奈が3つの時に亡くなりまして。以来私が男手一つで手塩にかけて育ててきたんですわ。日本にいた時は格式高い女学校に通わせまして、礼儀やら作法やら何やらを学ばせました。やはり、若林家の娘は大和撫子でなくてはなりませんから」

正毅はそう言ってガハハと笑う。秋奈も口元に手をあて微笑を浮かべる。

神木も愛想笑いしながらチラッと秋奈の方を見る。

『……やはり、そうだよな……』

昨日寿司屋で見た”モダンガール”。あれは間違いなくここにいる秋奈だと思われるが、全く雰囲気が違うため確信が持てない。

『他人の空似？　だとしても似すぎてる……』

「……神木さん」

「は、はい」

ふいに声を掛けられたじろぐ神木。

「神木さんも日本にいたときに、見かけたでしょう。ほら、あのー、モダンガールっちゅう……」

「え、あぁ、はい。見かけましたね。特に銀座あたりに出ると洋服に身を包んだ女性をよく見ましたよ」

「それですわ。私は、その、モダンガールっちゅうんがどうも気に食わなくてね。なんと言うか、バタくさいのが鼻についてね。やはり日本女性は、栗島すみ子のような繊細な美が一番似合っていると思うんですよ」

「は、はぁ……」

何とも言えない表情をしながら、神木は隣で微笑んでいる秋奈に視線を移していた。

＊＊＊＊＊＊＊

その日の夜。ベッドに横になってぼんやり天井を眺めながら、神木

は秋奈のことを考えていた。
『片や現代的なモダンガール、その一方で貞淑な大和撫子。……うーん、考えるだけで頭がこんがらがってくる』
神木は身を起こすと、廊下に出てマレーネの部屋に向かった。ドアをノックする。
『……どなた？』
「神木だけど。ちょっといいかな？」
『……』
「手間はとらせない。ちょっと、君の意見を聞きたくて」
『……どうぞ。カギは開いているわ』
ドアを開けてまず目に入ってきたのは、壁中を埋め尽くした新聞記事の切り抜きだった。そのほとんどの記事にマレーネの写真が載っている。
「……それで？　聞きたいことは何かしら？」
マレーネが部屋の隅にキセルを持って立ったまま尋ねる来る。
「あぁ、ごめん……。マレーネ。街である女性を見かけたとして、最初に見た時は現代的なモダンガール、次に見た時は貞淑な日本女性だった時、それは別人なんだろうか？　顔も似ているんだけど、化粧で印象が全く変わっているんだ」
「……そんなことを聞くために、わざわざ？」
呆れた口調でキセルを吸う。
「僕は真剣なんだ。ドッペルゲンガーを見た気分でどうもスッキリしない」
「……女は化ける生き物よ」
「えっ……？」
驚きの表情を浮かべる神木。
「だから女優がチヤホヤされるの。女は、芝居でもプライベートでも常に役を演じているから。――でもそのことを誰も気づかないの。演じ続けるうちに、本人もそれが本当の時分だと錯覚してしまうから……」
「マレーネ……」

「気を付けることね」
マレーネはそれだけ言うと、ベッドに座り込んでキセルを吸うのに専念し始めた。神木は礼だけ述べてマレーネの部屋を後にした。
『女は化ける……か』
渡り廊下を歩きながら、神木はマレーネの言葉を反芻した。

パート4

翌日。神木はアンジュに頼まれてブロマイドの整理をしていた。段ボールの中に入っているブロマイドを仕分けしていくのだ。

「……それでぇー、この前ナターシャさんのブロマイド撮ったんですよ。本人は勇ましい感じでって言ったんですけど、ナターシャさんプロポーション抜群じゃないですか？　だから、大胆な感じで撮ったらとっても可愛かったんですよ！　ナターシャさん照れてましたけど、内心ノリノリだったんじゃないですか？」

「へぇー、あのナターシャがねぇ」

「来月入荷するんで、神木さんも是非買ってくださいね！　ナターシャさんも喜びますよ！」

「ハハッ。そうするよ」

「あ、そうだ神木さん。昨日、日本大使館に行ったんですよね？」

突然の質問に面食らう神木。

「えっ？　あぁ、確かに行ったけど……。それが何か？」

「実はぁ、お願いなんですけど、日本大使館にブロマイド届けてほしいんですよ」

「えぇ？　なんでまた？」

「先月の『ロミオとジュリエット』の舞台に、日本大使館の方が来られてて。舞台をいたく気に入ったみたいでブロマイドを大量購入すると言ってくださったんですよ。でももうその時千穐楽で、在庫が満足に無かったから入荷するまで待ってもらうことにしたんです。かなり楽しみにしておられたので、神木さん、行ってきてもらえませんか？」

「そういうことか。いいよ。で、大使館の誰宛てだい？」

「日本人の名前って覚えにくいんですよねー。えっとー、たしか、ワケバシ・マセタケっていう名前だったような……」

「ワケバシ・マセタケ？　……それって、まさか『若林正毅』じゃないかい？」

「そうです！　それです！　そんな名前でした！　じゃ、お願いしま

すね！」
アンジュはそう言うと、ブロマイドの束をどっさりと神木に渡した。
『……バタくさいのは嫌いなんじゃないのかよ』
内心呆れかえりながらも、神木はブロマイドを届けることにした。

＊＊＊＊＊＊＊

『クライナ・トーキョー』は今日も賑わっている。異国の地で日本語が日常的に聞こえてくるというのは、やはりどうも違和感を感じる。自分が伯林に馴染んでいる証だろうか。
そんなことを考えながら歩いていると、『ミカド公園』内のベンチに見覚えのあるアッパッパを着た女性が座っているのを神木は見逃さなかった。
『あれは……！　間違いない！』
神木はゆっくりと女性の背後に近づき、「秋奈くん」と声を掛けた。
女性は漫画みたいに肩を上下させてから、ゆっくりと振り返る。驚きの表情を浮かべたその顔は、間違いなく昨日見たものと一緒だった。
「やっぱりそうか、秋奈くんだったか。雰囲気がまるで違うんでびっくりしたよ。それにしてもどうしてそんなカッ」
神木の台詞は、秋奈が彼の靴を思い切り踏んづけたことで遮られた。
そのまま首に腕を回すと耳元で「ちょっと、声が大きいのよ」と小声でささやく。
「『クライナ・トーキョー』は小さな街なんだから、私がこんな恰好しているなんてことがバレたらすぐにパパの耳に入るわ！」
「す、すまない……秋奈くん、苦しいよ……」
「とりあえず、場所を変えましょう」
秋奈に連れていかれたのは、『料理処　菫』と書かれた料亭だった。
「この店はエセ日本料理屋として知られているから、ここに住んでる

日本人はまず入らないの。密会には持ってこいね」
「エセ日本料理屋？　外観はいかにも日本風だけど……」
「食べれば分かる」
　店内は閑散としていて、ドイツ人カップルが一組、顔をしかめながら茶碗蒸しをつついている所だった。
「冷奴二つ」
　秋奈はメニューも見ずに勝手に店員に注文する。
「常連なのかい？」
「まさか。豆腐なんて、不味くしようにも出来ないでしょ？」
　サバサバとした口調で答えるその様子からは、昨日の大和撫子の要素は1ミリも感じられない。
「……その姿が、本来の君なのかい？」
　恐る恐る尋ねてみる。キッと睨みつけてくる秋奈。
「当たり前でしょ!?　あんなキツキツの着物なんか着ていたら全身筋肉痛になってしまうわ」
「そ、そうか……。でも、なんでまたそんなことを……？」
「昨日のパパの発言を聞いたら分かるでしょ？」
　悲しげな表情を浮かべる。
「パパは貞淑で何でも尽くしてくれる日本女性が好きなのよ。若林家は由緒ある家柄だから、パパも私をそういう女性に育てようと腐心していた。でも時代は太正、明治じゃないの。今や時代は女性も男性と同じように自我を持って自分らしく生きるべきなんだわ」
「……なるほど。君はいわゆる、『青踏』というやつだね？」
「『青踏』は私のバイブルよ！貞淑なだけが日本女性だけじゃないってことを私に教えてくれたの！」
「でも、お父様の前ではその『青踏』も効果が無いんじゃないか？」
「そ、それは……」
　目をそらす秋奈。図星だったらしい。
「君がどんなに女性解放を叫んだとしても、肝心の身内に対して猫を被ってるようじゃ、何も変わらないんじゃないか？」
「……分かってる。それは分かってるんだけど！　もし変わってし

まった私を見たら、パパはきっと、私を拒絶する……。ママを3歳でなくした私にとって、パパは唯一無二の肉親なの。私は、パパを失いたくないの！」

思いがけなく大声となり、厨房にいた店主がビックリした表情を浮かべる。神木は「何でもない」とジェスチャーで伝えた後、「これからゆっくり考えていけばいいさ」と言った。

「こういうことは一人で抱え込まない方が良い。僕で良ければ相談相手になるよ。だから――涙を拭いて」

秋奈は差し出されたハンカチを手に取って、そのままチーンと鼻をかんだ。

パート5

数日後。神木とスピカは、日本大使館で催されるパーティー【梅雨祭り】に参加した。神木はいつも通りのモギリ服だが、スピカのドレス姿はモデルそのもので参加者たちの注目を浴びている。
「凄い注目ですね……副司令も舞台に立てばいいのに」
「私は引退の身よ。年寄りが出しゃばる隙は無いわ」
「年寄りって、まだ二十代じゃないですか……。マレーネと同世代でしょう？」
「彼女と私とでは才能に開きがあるのよ」
「やぁ、やぁ。神木くん」
燕尾服に身を包んで顔を赤らめた正毅がグラス片手に近づいてくる。その後ろには、西陣の和服で正装し、日本風の化粧をした秋奈がしずしずとついてくる。彼女がモガであることを、おそらく会場内の誰もが信じないであろう。
「パーティーに来てくれて嬉しいよ。今日は無礼講だ。じゃんじゃん飲みたまえ」
「ありがとうございます。こちら、自分の上司であります、伯林華撃団副司令の――」
「スピカ・レンテです。お会いできて光栄ですわ、大使」
正毅はスピカをじっと眺めて目を細める。
「あ、あぁ……。あなたが副司令さんで。いやぁ、こんな美人が副司令をやっていたとは、神木くんも隅におけませんなぁ」
「大使！」
「あぁ、こりゃ失敬。……あ、こちら。私の娘でございます」
正毅が後ろに控えていた秋奈が前に出てくる。
「若林秋奈でございます。本日はお越しいただきありがとうございます」
丁寧に挨拶をし、頭を下げる。
「秋奈、神木くんたちにお飲み物を。ビールでよろしいかな？」
「構いません」

「大使！」
奥の方から職員が声を掛けてくる。正毅は面倒くさいといった表情を取る。
「……ったく。――あ、それでは私はこれで」
軽い会釈をしてから正毅はその場を後にする。秋奈も飲み物を取りに二人から離れる。
『秋奈くん……』
秋奈のことを案じながら横を見ると、スピカが険しい顔で秋奈に視線を注いでいた。
「――どうしたんですか、副司令。そんな怖い顔をして」
「彼女――秋奈さんと言ったわよね？　神木くんは彼女と知り合いなの？」
「え、ええ、まぁ――。でもそれがどうしたんで――」
神木の台詞は爆発音と共に遮られた。
地中から敵蒸気機械『フェーレ』と共に、ハインリヒが現れたのだ。会場内は混乱の渦となる。
「ふん。愚かな人間どもめ。存分に叫ぶがいい！」
言うが早いが、ハインリヒは『フェーレ』のアームを動かし思い切り振り被って下す。逃げ遅れた参加者たちが地面に倒れる。その中には正毅の姿もあった。
「大使！」
神木が声を上げる。
「大使、早く逃げてください！」
「お父様！」秋奈も声を上げる。
「ほう、大使か……。ちょうどいい、見せしめにしてくれよう！」
ハインリヒはもう一度アームを大きく振り被って下す。アームについている鋭利な爪は、正毅のふくらはぎを切り裂いた。
「ぐあっ……！」
一本線の切り傷から血が流れ出てくる。
秋奈は呆然と立ち尽くして、苦悶の表情を浮かべている正毅をじっと見ている。

「いや……」
秋奈は無意識のうちに正毅のもとに駆け寄り傷元を手で圧迫する。
「秋奈くん！　危ない！　戻るんだ！」
神木が必死に声を掛ける。
「ほう。面白い。では、女共々消し去ってやる！」
ハインリヒは三たびアームを振り被る。
「いや……」
秋奈は涙をこぼしながら必死に傷口を抑え続ける。
「死ねぃ！」
『フェーレ』のアームが秋奈目がけて下りてくる。
「あ……き……な……」
口をパクパクさせながら正毅が呟く。
「に……げ……ろ……！」
秋奈はパッと目を見開く。そして次の瞬間。

「いやぁあああああああああああああ!!!!!!」

叫び声と共に秋奈の体が光り始め、巨大なエネルギーとなって『フェーレ』のアームと機体を弾き飛ばした。
「な、何ィ?!」
焦りの声を上げながら彼方へと飛んでいくハインリヒ。
神木も目の前で起きたことが信じられないでいる。
「こ、これは……」
「霊力よ」
スピカが冷静に受け答える。
「彼女の内に秘められていた霊力が、一気に解放されたのよ」
「じゃ、じゃあ、彼女は……」
スピカはアイフォトロンを取り出すと、劇場にいるつぼみたちに連絡を取る。遠くから救急車のサイレンが聞こえてくる。

「秋奈さん！　お父様を救急車に乗せたら、私たちと一緒にベルリン歌劇場に来るのよ！　分かったわね！」

スピカの迫力に気圧されながら、秋奈は「はい」と返事をした。

パート6

秋奈を劇場まで連れてきた神木とスピカは、そのまま作戦指令室へと向かう。すでに空組の三人が準備を進めている。
「これは……?!」
急な展開に付いていけていない様子の秋奈。
「ここが、伯林華撃団の総本部。作戦指令室だ」
神木が説明をする。
「俺たちは、普段は伯林歌劇団として舞台に立って芝居をするが、敵が攻めてきたときは伯林華撃団としてアイゼンクライト改に乗り、魔と戦うんだ」
「伯林華撃団……神木さんが?」
驚きの表情を浮かべる秋奈。
「黙っていてすまなかった。君のお父さんは承知だったんだけど、一応秘密部隊だからね」
戦闘服に着替えたニーナたちも集まってくる。
「……あれ、隊長? その子は?」
秋奈に気づいたナターシャが神木に尋ねる。
「若林秋奈くんだ。君たちと同じ霊力の持ち主、つまり伯林華撃団・四季組の新しいメンバーだ」
「わ、若林秋奈です。よろしくお願いします」
「へぇー。これがキモノってやつか。何だか暑苦しい服装だねぇ」
物珍しそうに秋奈の着ている着物を見るナターシャ。
「……まさか、神木さん。秋奈さんも出撃させるって言うんですか?」
ニーナが神木に聞く。困った表情を浮かべる神木。
「彼女の霊力は十分にアイゼンクライト改を動かせるわ。隊員は一人でも多い方が戦いには有利よ」
スピカが代わりに言う。
「でもそんな……秋奈さんは、秋奈さんはそれでもいいんですか?」
「――私、戦います! パパに怪我を負わせた、あいつを、私は許さない!」

「秋奈ちゃんのアイゼンクライト改もちゃーんと、整備済みだよ！」
整備室から出てきたリンがＶサインをしながら言う。
「……いいんじゃない？　本人が良いって言ってんだから」
マレーネが興味なさそうに呟く。
「よし、決まりだ！　秋奈くん、僕が君のサポートをする。だから君も無茶はしないでくれ」
「神木さん……分かりました！」
「敵蒸気機械『フェーレ』は、現在ブランデンブルク門付近にいます」
モニターを操作していたつぼみが声を上げる。
「門を破壊しようとしてるよ、こいつ！」
映像を見たアンジュが悲鳴に近い声を上げる。
「どうやら猶予は無いようね。――神木くん、出撃命令を！」
「はい！　伯林華撃団・四季組、出撃せよ！　目標、ブランデンブルク門の敵の撃破！」
「了解！」

＊＊＊＊＊＊

「くそぉ！　アームが言うことを聞かないぜ」
門をガンガン体当たりしながらハインリヒが呟く。
「まぁいい。門さえ破壊できればいい目くらましにはなるかな……」
「そこまでだ！」
背後からアイゼンクライト改が姿を現す。秋奈の機体もある。
「伯林華撃団、参上！」
「あなたが、私のパパを！　絶対許さない！」
秋奈が涙を貯めながら言う。
「ほう……貴様。あの娘か。よくも私の『フェーレ』の腕を折ってくれたな！　いでよ、ゴーレム！」
言うや否や地中からゴーレムが１０体ほど出てくる。
「行け！　奴らを叩きのめせ！」
「来るぞ、みんな、戦闘開始だ！」

「了解！」
　秋奈の機体は広範囲に攻撃をすることが出来るので、一気に襲い掛かってくるゴーレムを倒すのには非常に向いている。
「土のくせに、生意気なのよ！」
　初戦闘の割にはかなりキレの良い立ち回りを見せる。
「秋奈くん、何か、武術でも習っていたのかい？」
『パパに言われて、ずっと合気道を習ってきたのよ。まさかこんなところで活きてくるとは思ってもみなかったわ』
「ハハっ。そうだな」
　あっという間に、ゴーレムを倒してしまった。
「残るはお前ひとりだ！　覚悟しろ！」
「クソォ。こうなりゃ、攻撃あるのみ！　うわぁあああああ！」
　ハインリヒが攻撃を仕掛けてくる。ハインリヒはミサイルを飛ばしてくるため、近くにいても遠くにいてもダメージを負ってしまう。
「クソッ」
『神木さん、私を囮に使ってください！』
　秋奈から通信が入る。
『私が奴のミサイルを引きつけて攻撃すれば一気に片付けられます！』
「いかん！　そんなこと、無謀すぎる！」
『――私は、ずっと自分を偽ってきた。でも私は、自分に正直になりたいんです！　私が囮になれば、奴のミサイル攻撃を止められます！神木さん、お願いします！』
「秋奈くん――分かった。……全隊員に告ぐ。秋奈くんを囮にして奴のミサイルを引きつける。隊員は全員秋奈くんの援護に回れ！」
『了解！』
　秋奈機はUターンすると、ミサイル目がけて走り出す。
「馬鹿め！　血迷ったか！」
　秋奈は画面を見ながら、ミサイルとの距離を測っている。
『もう少し、もう少し……』
　ミサイルの尖頭が秋奈機回避不能ゾーンに入る。機体内に警報音

が鳴り響く。
「今よ！」
秋奈はミサイル全機に広範囲攻撃をする。攻撃に巻き込まれたミサイルは空中爆発して散っていく。
「な、何ィ！」
ハインリヒの表情が焦りに変わる。
「これで終わりよ！」
秋奈機はハインリヒ目がけて一直線に突っ込んでくる。『フェーレ』は避けるのも間に合わずまともに攻撃を食らった。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ハインリヒの断末魔がこだまする。そのまま『フェーレ』は行動不能となり、十秒も掛からず爆発した。
「……地獄に落ちろ、クソ野郎」
秋奈はそう毒づくと、神木たちの元へ帰還した。
「秋奈くん、怪我は無いかい？」
神木が秋奈のもとに駆け寄って聞く。
「大丈夫です。あの――いろいろありがとうございました」
「いや。助けられたのは僕たちの方だよ。秋奈くんがいなかったら、奴は倒せなかったかもしれない。――これからもよろしく頼むよ」
「はい！」
「ふーん。神木さんって、日本人の女の子には優しいんですね」
ニーナがジト目で神木を睨む。
「いぃ?! そんなこと無いよ！」
「そうですかぁ？」
「そ、そうだよ！ さ、みんな。戦いには勝ったんだし、いつもの奴やるぞ！」

「いつものやつ……？」
秋奈が首を傾げる。
「四季組は戦いに勝った後は、いつも『勝利のポーズ』をするのよ」
ナターシャが説明する。
「そうだ。今度は秋奈がやりなよ。今回の主役はあんたなんだし」
「そうだな。秋奈くん、よろしく頼むよ」
「そ、そうですか。それじゃあ……」

「勝利のポーズ、決め!!!!!!」

＊＊＊＊＊＊

二日後。シャリテー・伯林医科大学のＶＩＰ専用病室には、手当てが終わりすっかり元気になった正毅の姿があった。
神木と秋奈は正毅の見舞いに行った。ただし――秋奈は新たに買ったワンピース姿で訪れた。
病室に入ってきた秋奈を見て、正毅は目を白黒させていた。同一人物とは最初思えない様子だった。
「これが、本当の、私の姿なのよパパ。月みたいに青白く光る古風な女性じゃなくて、私は太陽のように燦燦と輝くレディでありたいの」
正毅はしばらくフリーズしていたが、やがてふぅーっと息を吐くと「好きにしなさい」と言った。
「お前の人生だ。私がどうこう言う筋合いは無い。お前は、お前らしく生きればいい。お前がどう生きようと、私はお前の父親に変わりはないからな」
「パパ……」
「……助けてくれて、ありがとうな」
正毅はそう言うとニッコリ微笑んだ。秋奈は涙をこぼしながら「あ

りがとう」と言ってハグをした。

もう一つ、秋奈が変化したことがもう一つあった。

正毅の許可を得て、正式に伯林華撃団・四季組の隊員となったのだ。

「色々迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

深々と頭を下げる秋奈を、皆拍手で迎え入れた。

みんなに祝福されながら笑顔を浮かべるモダンガールは、一番幸せそうな顔をしていた。

【Ｅｐ．３　完】

Ｅｐ．４　天使の吐息
パート１

『あなたは、いつ見ても黒い服ですね。どういうわけなんです？』
『わが人生の喪服なのです。わたし、不幸な女ですもの』
　舞台上でマレーネと秋奈が迫真の芝居をしている。観客たちも二人の演技に見入っている。
　伯林歌劇団七月公演　アントン・チェーホフ原作の舞台「かもめ　喜劇四幕」は、初日から大喝采で迎え入れられた。本格的な舞台デビューとなる秋奈とナターシャという新進女優への注目もさることながら、マレーネの圧巻の表現力、すっかり演技が板についたニーナの芝居も批評家たちや観客を魅了した。
「こんどの舞台、『かもめ　喜劇四幕』も大成功になりそうですね」
　舞台脇で演技を見ながら神木はスピカに言う。
「みんな演技も上達してきているし、お客さんも満足しているみたいだし」
「……そうね……」
　神木とは裏腹に、釈然としない面持ちのスピカ。
「どうしたんですか？　難しい顔をして」
「……何かが欠けているのよ。今の歌劇団に足りない何かがあるんだけど、それが分からないの」
「考えすぎじゃないんですか？　今だって十分だと思いますけど」
「いえ。今のままじゃ、遅かれ早かれ観客たちに飽きられてしまうわ。それを防ぐためにも、欠けている何かが何なのかをハッキリさせないと……」
　そう言って、ブツブツと考え込んでしまった。
『今の歌劇団に……欠けているもの？』
　神木は訝しげな面持ちで、舞台上で熱演している４人に視線を向けた。

＊＊＊＊＊＊＊

「みんな。お疲れ様です」
サロンでぐったりしている四人に、つぼみが紅茶を差し入れする。
「いやぁー。舞台の熱量が凄いねぇ。汗だくだくだよ」
ナターシャがそう言って、紅茶を一気に飲み干す。
「でも今回は、中日に休演日を設けてくれたし、副司令からご褒美があるですよ」
ニーナが神木に向けて言う。
「ご褒美？　打ち上げじゃないのかい？」
「違いますよー！　ね、マレーネさん？」
「……」
「マレーネ。ご褒美って、何だい？」
「……休演日に伯林フィルハーモニーで『ウィーン少年少女合唱団』によるコンサートが開かれるの」
「そのコンサートチケットをスピカさんが人数分取ってきてくれたんです」
秋奈が引き継いで答える。
「人数分ってことは、あたしたちも行っても良いってことですか？」
アンジュとリンが身を乗り出してくる。
「えぇ。みんなで行ってみるといいわ」
スピカがサロンに近づきながら言う。
「やったぁー！　良かったね、アンジュ！」
「うん！」
「あらあら、子供なんだから」
「つぼみさんだって、嬉しいでしょ?!」
「――そうね。しばらくまともなお休みも無かったからね」
「神木くんも行ってきなさい」
スピカが神木に向き直って言う。「この娘たちの監督役も兼ねて」
「えっ？　スピカさんは行かないんですか？」
「私はちょっと、用があるから。支配人はここのところずっと眠りっ

ぱなしで誘っても意味ないし」
「……分かりました」
承諾しながらも、神木はスピカの考えを推し量っていた。

パート2

休演日。連日の舞台の疲れをおくびにも出さず、神木たちは伯林フィルハーモニーへと向かった。

『ウィーン少年少女合唱団は、神聖ローマ帝国時代に結成されたインテル少年少女合唱団の一部メンバーをウィーンに連れてきて結成されたものであり、オーストリアでも屈指の歴史を誇る合唱団である』か……」

パンフレットを見ながら神木が呟く。

「世界各地から公演の以来が来ているほどの人気なんですけど、ドイツだけは合唱団の起源だからということで公演も特別に優先しているみたいなんです」

秋奈が解説する。「だから、わざわざドイツまで聴きに来る方もいるそうですよ」

「へぇー、そこまでして聴きたい合唱団、か……」

照明が暗転し、予鈴が鳴り響く。ざわざわしていた会場内が、水が引いていくかのごとく静けさになる。

会場の幕が開き、スポットライトが照らされる。そこにいたのは、白い服を着た１０歳ぐらいの年端もいかぬショートヘアの少女だった。

『何だ？　他の子供たちはどうしたんだ？』

訝しる神木。ニーナやナターシャも何が始まるんだとソワソワしている。

少女は何万といる観客に少しも動じず、軽く息を吸う。そして。

「Ａｖｅ～　Ｍａｒｉａ～」

少女の歌声を聞いた瞬間、神木は全身にゾワッと鳥肌が立った。青天の霹靂とはこのことで、まさに未体験の経験だった。

聴くものの心を浄化していく洗練された歌声。まるで天使が舞い降りたような衝撃を覚えた。
それはニーナたち四季組・空組のみんなも同じようで、ニーナとアンジュとリンは涙を流していた。
『素晴らしい……。これほど聴くものを圧巻する歌声を持つ少女がいたとは……。彼女から発しているエネルギーも凄まじいものだし……エネルギー？』
ここでハタと神木は気づく。
少女の体から薄く白いエネルギーのようなものが発せられている。他の観客たちはそのことに気づいていないが、秋奈やマレーネは感づいているようだ。
『これは、もしや……霊力？　歌っている時にだけ、霊力が体から漏れ出ているのか？』
少女のＡｖｅ　Ｍａｒｉａ　が終わると、そのまま後ろに下がって待機していた合唱団の列に加わる。そして、少年少女たちによる『歓喜の歌』が始まった。

＊＊＊＊＊＊＊

「いやー、凄かったですねー。特に最初の女の子！　歌めっちゃ上手くありませんでした？」
帰り道。興奮気味に完走を交わすニーナ、アンジュとリン。
「あれ聴くと、私達もまだまだなーと思いますよ」
「『ウィーン少年少女合唱団』って、入団テストが厳しいことで有名で、毎年の倍率は五千倍なんですって」
「五千倍！　一マルクが五千マルクになるじゃないですか！」
「……リン。人の倍率とお金は一緒にしない方が良いわ」
口々に話し合ってる三人を見つめながら、神木は考えていた。
少女が発していたエネルギーが霊力であることは間違いない。詳しくは分からないが、おそらく伯林歌劇団のメンバーの中で最も強力なものだろう。

「……リリィ・ヴィンター」
黙って横に並んで歩いていたマレーネが口を開く。神木は「えっ？」と聞き返す。
『ウィーン少年少女合唱団』の歴史の中で五本の指に入るほどの美声を持つ天才少女。入団テストでは合唱団の歴史の中で初めて、試験官が満場一致で合格を決めたという。三年前の入団以来、世界各地の公演に引っ張りだこでニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストでも紹介された実績を持つ――」
「リリィ、ヴィンター……」
神木はゆっくりと少女の名前を反芻した。

パート3

劇場に帰ってきてひとまず自室でくつろいでいると、ドアをノックする音が聞こえた。
「はい。どなた？」
『神木くん？　スピカです。ちょっといいかしら？』
「副司令ですか。どうぞ、カギは開いてます」
部屋に入ってきたスピカの手に何やら書類の束が抱えられている。
「どうだった？　コンサートは？」
「感動でした。全身鳥肌立つなんて経験初めてですよ」
「楽しめたのなら良かったわ。――それで、なぜ私が神木くんにあのコンサートを見せたか、だいたい察しはつくわね？」
「ええ。――あの少女、リリィ・ヴィンターのことですね」
「その通りよ。彼女にはとてつもないほどの霊力を持っている。歌っている時は霊力を制御する力が緩くなって少し外に漏れ出てしまっているの」
「やはりそうでしたか。目に見えるほどなんですから、相当のパワーなんでしょうね」
「伯林華撃団・四季組全員の霊力を集めてやっと同じぐらいっていった感じかしら。――巴里も紐育も5人編成だから、もう一人欲しい所ね」
ここで神木はハッとする。
「ま、まさか副司令……。リリィ・ヴィンターを伯林華撃団に入れようと考えてるんですか？」
「そうよ。彼女の霊力をみすみす逃す手は無いわ」
「で、でも彼女は今『ウィーン少年少女合唱団』のエースですよ？　いくらなんでも、そうそう簡単には……」
「――そうね。その通りよ」
スピカは持っていた書類を机の上に置く。神木は書類を手に取り目を通す。
「……これは？」

「『ウィーン少年少女合唱団』の総責任者であるカラジャン団長に送ったファックスよ。『リリィ・ヴィンターを伯林歌劇団・四季組のメンバーとして迎え入れたく云々』っていうのを支配人名義で送ったの。その返事がこれ。『リリィ・ヴィンターはウィーン少年少女合唱団の重要な団員である故、貴殿の要求は受け入れがたい』――要はダメってことね」
「それはそうですよ。突然うちのメンバーにならないかって送ってもけんもほろろになるのは目に見えてますって」
「でも、大切なのは彼女本人の気持ちじゃない？」
「……えっ？」
「これは、ウィーンで発行されているタブロイド判の記事なんだけど」
　そう言ってスピカは記事を差し出す。見出しには【由緒ある合唱団団長　ギャンブルによる多額の借金疑惑】と書かれてある。
「これは……」
「団長は普通に払っていたんじゃ追い付かないほどの借金を抱えている。その一方でリリィは合唱団の良い稼ぎ頭。手放したくないと考えるのは当然のことじゃないかしら？」
「なるほど。つまり、彼女の意思が合唱団の意向と同じであるとは限らないというわけですね？　――でも、どうやってリリィと接触するんです？」
「すでに手は打ってあるわ」
　そう言って、スピカはウインクをした。

パート4

スピカの言葉の意味は翌日判明した。

『な、なんだ、なんだこれは?!』

モギリをしながら神木は心の中で叫ぶ。列をなしているのは、年端もいかない少年少女ばかりだからだ。皆好き好きに喋りまくってる。

「今日の公演は、『ウィーン少年少女合唱団』御一行様特別招待の貸切公演よ」

モギリの横でスピカが説明する。神木は反応する余裕もない。

「劇場に団員全員呼んでしまえば、こっちから接触することは簡単だわ――ほら、噂をすれば」

スピカに言われ視線を上げると、すぐ近くに件のリリィの姿があった。

神木はリリィの順番が回ってくるタイミングで、「楽しんでいってね!」と満面の笑みで声を掛けた。対するリリィはチラッと一瞥しただけで半券を受け取ってさっさと行ってしまった。

『昨日の公演で疲れが落ちていないのかな? でも他の子供たちは皆楽しそうに話しているし……』

「どうも、こんにちは」

子供たちの列の最後尾に並んでいた、タキシードに身を包んだ小太りの男性が神木に声を掛ける。

「あぁ、どうも。あの、あなたは……」

「こりゃ失敬。私、『ウィーン少年少女合唱団』の総責任者をしております、団長のカラジャンと申します」

カラジャンはそう言ってシルクハットを取る。一見温和そうだが、目の奥が笑っていない。

『カラジャン……こいつが』

「本日は当劇場にお越しいただき、ありがとうございます。私、伯林歌劇団の副支配人をしているスピカ・レンテと申します」

スピカが恭しく挨拶をする。

「私共も、昨日皆様の公演を見に伺ったのですよ」

「ほう！　そうでしたか。いやはや、芸術を生業にする者同士、互いに高めあって行きませんとな」
ガーハッハと下品な笑いをする。
「二階の貴賓室へご案内致しますので……。神木くん、お願いね」
「は、はい。……どうぞ、こちらです」
階段を上がり二階に向かう途中、神木は何気なくリリィの話題を出した。
「昨日の公演感動しました。特に、リリィの歌声は鳥肌が立ちましたよ」
「そう言っていただけるとありがたい。リリィは、うちの合唱団の大切な儲け頭ですからな。――正直、他の有象無象の団員たちのことはどうでもいい。リリィさえ、リリィさえいてくれれば、我が合唱団は安泰なんですわ。ハッハッハ……」
カラジャンの言葉を聞いて虫唾が走る。
『こいつ……団員を何だと思ってやがる……』
怒りを内心に抑えながら、カラジャンを貴賓室の案内した神木は、そのまま舞台袖へと向かう。
「副司令！」
舞台袖で待機していたスピカに駆け寄り、先ほどのカラジャンの台詞を伝える。
「――やはり、睨んだ通りだったわね。何とかして、彼女と一対一で話が出来る機会が欲しいけど……」
スピカはそう言って、最前列に座っているリリィに目をやる。
目線を上の方に向けると、服をだらしなく着崩したカラジャンが眠そうに目をこすっている。
予鈴がなり、鋼鉄のハートの持ち主ナターシャが前座として登場し場を盛り上げた後、舞台が始まった。
その間、リリィは笑みを一つも見せなかった。

パート5

『かもめ　喜劇四幕』は子供たちにも、おおむね受けているように見えた。原作を大衆向けにデフォルメしているのもあるが、由緒正しい『ウィーン少年少女合唱団』に入れるレベルにあるのだから、これくらいの芸術の教養は身に付いているのかもしれない。団長は貴賓室で惰眠を貪っていたが。

だが、リリィは笑いどころでも無表情のままだった。

『リリィ……』

神木が不安そうに舞台袖から様子を見ている。

動きがあったのは第二幕が終わり、第三幕に移ろうとした時だった。リリィが突然立ち上がり、そのまま後ろの出入口から外に出てしまったのだ。

「神木君……！」

スピカに言われるまでも無く、神木は急いで舞台の外に出てリリィを追いかける。リリィは誰もいない食堂に入っていくと近くにあった席に座って机に顔を突っ伏した。

『どうしたんだろう……？』

神木はしばし戸惑ったが、意を決してリリィの隣の席に座って声を掛ける。「リリィ」

リリィはビクっと肩を揺らして、そのままゆっくり顔を上げる。その顔は涙でくしゃくしゃだ。

『泣いているのか……？』

「おじさん……誰？　団長の友だち？」

歌声からは想像もつかないほど幼い声だ。

「僕は、神木裕一郎。伯林歌劇団でモギリをやってるんだ、よろしくね」

「ゆーいちろー？　モギリ……？」

得体の知れない生物を見る目つきで神木を見る。

「君が、舞台の途中で飛び出してきたのを見かけてね。何かあったのかなーって思って、追っかけて来たんだ。団長とは今日初めて会った

ばかりだから友だちじゃないよ」
「……良かった……」
「……？　どうして、僕が団長と友だちだと思ったの？」
「……団長、ボクがいつも遊んでたり休憩したりすると、怒って、何時間も歌わせ続けるから……」
「――何だって!?」
　にわかに信じられない様子の神木。
「……僕で良ければ話を聞くよ。リリィ、君のことを聞かせてくれないか」
　リリィの目を真っ直ぐに見る神木。リリィはその目に偽りが無いことを悟ったのか、とうとうと話し始めた。
「……ボク、小さい時から歌うことが大好きで、一緒に住んでたおじいちゃんやおばあちゃんの前で歌うと、いつも喜んでくれたんだ。それでもっと上手くなりたい、もっと歌いたいと思って、『ウィーン少年少女合唱団』に入団しようって思ったんだ。先生たち皆、ボクの歌を褒めてくれて嬉しかった。でも――」
　リリィの顔が暗くなる。
「ボクが入団して半年ぐらい経った時に、前の団長からカラジャン団長に変わって……。カラジャンは、ボクの歌をすごく気にいってくれて、ボクを合唱団の目玉にすると言ったんだ。でも――」
「でも？」
「――その日以来、団長はボクに厳しくなったんだ。他の子よりも倍近い時間練習させて、遊びの時間はまったくくれなくなって……。他の先生は庇ってくれる人もいたけど、僕が長い時間歌い続けても声が全く枯れないことを理由にさらに練習時間を増やして、公演のスケジュールも増やして……。ボク、いつからか、歌うことに楽しさを見出せなくなっちゃった……」
「リリィ……」
「あんだけ好きだった歌が、今は、苦痛で仕方ないんだ。――今日だって、この芝居を見終わって戻れば、また真夜中まで練習させられる。それが辛くて――抜け出してきたんだ」

「……そうだったのか……」
　神木はリリィの顔を見る。幼くして、ショービジネスの世界の汚い部分を知ってしまった少女。それがどんなに冷酷なものかは想像に絶する。
「おかしいよね。十時間も歌い続けても、まったく喉も枯れないし、むしろ、歌声にキレが増すというか……」
「――リリィ。君のその特性には、霊力が関係しているんだ」
「……霊力？」
「あぁ。普通の人には見えないが、僕たちのように霊力を持つ人間は、君が歌っている時に体から白いエネルギーのような光がほとばしっているように見える。それが霊力だ。おそらく、体内に溜まっている霊力が君に素晴らしい歌声を作り出しているんだ」
「霊力……ボクに……？」
「……リリィ。僕たちの仲間にならないか？　――伯林華撃団・四季組の仲間に」
「――えっ？！」
　戸惑いの顔を見せるリリィ。
「伯林歌劇団は舞台で人々を魅了するだけでなく、伯林華撃団として魔と戦い、人々の平和を守っている。僕たちと一緒になれば、一度は嫌いになった歌も、きっとまた好きになれるさ！」
「で、でも、団長が……」
「カラジャンのことはどうでもいい。大切なのは君の気持ちだ。人間は誰しも職業選択の自由を持っている。君の本当の気持ちを僕は知りたいんだ。リリィ、君の気持ちを聞かせてくれ」
「ぼ、ボクは……」
　リリィが口をもごもごさせた次の瞬間、

ブーーーーブーーーーブーーーーブーーーー

劇場内に警報音が鳴り響く。

「何？　敵か?!」

パート6

「神木さん！」
　売店にいたアンジュが神木の元に駆け寄る。
「アンジュくん、何があったんだ？」
「知らせによると、ブランデンブルク門でまたゴーレムが現れたそうです！」
「何だって？　クソッ。アンジュくん、リリィを避難所まで連れていってくれ」
　そう言ってリリィをアンジュに預ける。不安そうにするリリィ。
「分かりました。さ、こっちにおいで……」
「ゆーいちろーは？　ゆーいちろーは避難しないの？」
「僕は、悪い奴らと戦ってくるから。大丈夫、すぐ戻ってくるよ」
　それだけ言い残すと、神木は作戦指令室へと急いだ。
　指令室にはすでに着替え終わったみんなが集まっていた。
「……ゴーレムは全部で１０体。これに関してはすぐに倒せると思うわ」
　モニター画面にブランデンブルク門の様子を映しながら、スピカが説明する。
「問題なのは……こいつね」
　彼女が指さした先に、ボロボロになった敵蒸気機械『フェーレ』に乗ったハインリヒの姿があった。
「こいつ……まだ生きてやがったのか」
　ナターシャが呆れた口調で言う。「前回倒したと思ったのに……」
「バカは死ぬまで治らない、ってね。霊力は前回よりも落ちてるけど、人間追い込まれた時に火事場の馬鹿力を発揮するから、くれぐれも油断しないこと！　いいわね？」
「はい」
「神木くん、出撃命令を！」
「はい！　伯林華撃団・四季組、出撃！　目標はハインリヒの撃破だ！」

「了解！」

＊＊＊＊＊＊＊

「――クソォ！　俺としたことが、あんな奴らにやられるなんて……」

青息吐息になりながらも態勢を保つハインリヒ。

「……だが、今度こそ、奴らを倒して……兄者に……認めてもらう！」

「しつこいんだよ。死にぞこないが」

「んあ!?」

ハインリヒの真上に、アイゼンクライト改が飛行したまま集結している。

「伯林華撃団！　参上！」

「ハインリヒ！　いい加減負けを認めたらどうだ!?」

「ククク、来たか……」

「もうお前に戦える力は残っていない！」

「馬鹿め！　俺の真の強さは、追い詰められた時にこそ発揮する！

ハ～～～ア～～～～！」

言うや否や、気をため始める。『フェーレ』から青白く光るエネルギーが放出されていく。

「……なんという奴だ。まだこれほどの霊力を残していたとは！」

「ケッ。とどのつまり馬鹿ってことじゃねぇか」

ナターシャがつまらなさそうに言う。

「う、うるさい！　馬鹿、馬鹿言うな！　貴様ら全員、塵にしてくれるわ！」

「来るぞ！　全員戦闘配置につけ！」

「了解！」

スピカの懸念通り、ハインリヒの戦闘力は前回よりも強くなっていた。

地上形態では危険だと判断した神木は、飛行形態のまま相手を倒すことにする。

『隊長！　飛行形態は攻撃力が下がるから、いつまでたっても決着つかねぇぞ！』
　ナターシャが通信で神木に言う。
「分かってる！　だから、地上でも戦えるよう飛行形態のまま相手の体力を削っていくんだ！　機が熟したら、地上での戦闘に切り替える！　いいな！」
『了解！』

パート7

一方その頃。リリィはアンジュに引率され、劇場近くの避難所へ急いでいた。
「……ねぇ、お姉ちゃん。霊力がある人が、戦うの？」
「そうね。伯林華撃団はみんな霊力を持った人たちの集まりだから。そうでないとアイゼンクライト改を操れないのよ」
「……」
「さぁ、着いたわ」
避難所の入口前に辿り着く二人。
「じゃあ、戦いが終わるまでここでみんなと大人しくしているのよ」
「お姉ちゃん、ボクも戦う！」
「……えっ？」
「ボクも、ゆーいちろーたちと戦う。ボクにも霊力があるんだよね？戦えるよね?!」
「え、ええっと……」
「リリィ、ここにおったか！」
リリィの姿を見つけたカラジャンが中から出てくる。
「どこほっつき歩いていたんだ！　団体行動取れない奴は帰ってから練習時間倍だ！」
「……団長。ボク、戦ってきます」
「あ？」
鳩が豆鉄砲を食ったような顔をするカラジャン。
「伯林華撃団として、悪い奴らと戦います。ゆーいちろーの助けをするんだ。お姉ちゃん、行こ！」
「あ、はい」
「おい、こら、どこにいく！　待たんか、リリィ！」
呼び止める団長を無視し、二人は作戦指令室へと急ぐ。
指令室に行くと、スピカが出迎えてくれた。
「リリィ、ようこそ伯林華撃団へ。リン、すぐにリリィのアイゼンクライト改を用意して」

「合点承知の助！」
「今、神木くんたちが戦っているわ。リリィは彼らの援護をよろしく。良いわね？」
「はい」

＊＊＊＊＊＊＊

『隊長！　このまま攻撃してもこっちのダメージが蓄積されていくだけだぞ！』
　ナターシャが悲鳴に近い声を上げる。
　ハインリヒとの戦いは持久戦となり、どちらかが力尽きるまでの忍耐勝負となっていた。神木のアイゼンクライト改もすでに限界に近づいてきている。
「クソッ。あともう一押しなんだが……」
「ハッハッハ！　死なばもろともだ！」
　万策尽きかけたように思えたその時、後方から剛速球で飛んでくるアイゼンクライト改を捕捉した。
「あれは……!?」
　謎のアイゼンクライト改は五機の周りをグルグル回る。すると、全員のアイゼンクライト改がみるみるうちに回復していった。
「回復能力……？　これほど強い霊力を持つとは……まさか！」
「皆さん、遅れてすみません。リリィ・ヴィンター、ただいま参上しました！」
「ええ!?　リリィ・ヴィンターが、なぜ？」
　驚きの声を上げるニーナ。対して神木は喜びの声を上げる。
「リリィ、来てくれたんだね！」
「ゆーいちろー。ボクも戦うよ。自分の足で、一歩踏み出すと決めたんだ！」
「よし！　一気に片を付けるぞ！　伯林華撃団・四季組、ハインリヒを倒すんだ！」
「了解！」

そこからの流れはあっという間だった。全回復した機体で袋叩きにあったハインリヒの『フェーレ』はとうとう限界突破し、暴走に歯止めが利かなくなった。
「おい、おい、言うことを聞けこのポンコツ！」
ハインリヒの必死の抵抗虚しく、最後は回線のショートとエンジンのオーバーヒートが重なって自爆した。ハインリヒの声も爆発と共に一切しなくなった。
「……今度こそ、奴をやっつけたか」
機体から降りて残骸に目をやる一同。
「今度ばかりは肝を冷やしたぜ。あそこまで粘るとはな」
「でも、リリィが来てくれたおかげで助かったよ。ありがとう、リリィ」
「ゆーいちろー……」
「はいはい。とりあえず、勝利したんですから、あれやりましょう！」
ニーナが音頭を取る。
「そうだ、今日はリリィが勝利のポーズって声を掛けてよ」
「えっ？　ボクが……？」
「リリィ、大丈夫だ。さぁ……」
「う、うん。それじゃあ……」

「勝利のポーズ、決め！」

＊＊＊＊＊＊＊

それから数日後。リリィは正式に伯林華撃団・四季組に入ることになった。合唱団の目玉ということで、最初カラジャン団長は猛烈に反対していたが、合唱団にいる他の先生方がカラジャンを弾劾したことで事態は急転直下。そこからはとんとん拍子で事が進んだ。

リリィが『ウィーン少年少女合唱団』から伯林歌劇団に移籍したというニュースは、瞬く間にドイツを超えヨーロッパや世界中に広がり、伯林歌劇団への注目度は一気に増した。また、歌える人材が入ったことでミュージカルなどこれまでやってこなかったジャンルにも挑戦することが可能となった。

「副司令が前に言っていた、伯林歌劇団に足りないものとは、歌だったんですね」

神木がスピカに言う。

「でも、リリィが入ってくれたことで今後はレビュウにも力を入れられるわ。新たな客層も取り入れられるわよ」

「――でも何より、リリィがまた歌うことに楽しさを見出してくれると嬉しいですね」

神木はそう言って、舞台上でみんなと笑っているリリィに目を向けた。

Ｅｐ．５　嘆きのトップスタァ
パート１

＊＊＊＊＊＊＊

長い眠りだった。
「う……く……」
男は目をゆっくりと開け、身体を起こす。ずっと横になっていたからか、身体がなまっている感覚がある。
「やっと目覚めたのね」
奥から女性の声がする。男は視線を声のした方に向ける。
「随分と長いお昼寝だったみたいね、ヨーゼフ」
ヨーゼフは頭を振る。
「あぁ。良い休暇になったよ。――ところで、ユッタ・トゥルーデとハインリヒはどうした？」
「――倒されたわ。伯林華撃団に」
「何だって？　それで……二人は……？」
ユッタはブンブンと頭を横に振る。ヨーゼフは絶望に打ちひしがれる。
「そんな……嘘だろ……？」
「嘘じゃないわ。可哀想に」
「――す、すぐに、あいつらを倒して……！」
「無理よ。目覚めたばかりなんだから。力だって、通常より下がっているはずよ」
「でも……」
「心配しないで。今回は、私が行くから。私がこの手で、華撃団を仕留めるから」
ユッタはそう言うと、踵を返してヨーゼフの元を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

”――以上により、伯林歌劇団８月公演『ジャズシンガー』の全てのプログラムを終了いたします。お忘れ物のないよう、お帰りください”

つぼみのアナウンスが劇場内に入る。観客たちはあれこれ言いながら退場していく。

リリィが新メンバーとして入ったことで歌の演目も出来るようになった歌劇団は、ハリウッド映画初のトーキー『ジャズシンガー』をミュージカル風にアレンジして上演することにした。リリィの圧倒的な歌声と、ブロードウェイ出身のマレーネの二人のぶつかり合いは、辛口批評家すら舌を巻くほどの迫力だった。

「みんな、お疲れ様」

終演後、サロンでくつろいでいるメンバーにドリンクの差し入れを持っていく神木。みんなはサロンの椅子に座りながら雑誌や新聞を読んでいた。

「今回の舞台、あらゆる評論家の方が絶賛しているんですよ！”『ウィーン少年少女合唱団』から電撃移籍したリリィ・ヴィンターとブロードウェイの元看板女優マレーネ・ミッドサマーの歌唱は、決して個性のぶつかり合いをせずにこの舞台を高尚なものへと変化している”ですって！」

ニーナがそう言いながら舞台専門雑誌を見せてくる。全ての批評家たちが☆４つ以上のスコアを付けている。

「へぇ。凄いじゃないか」

「マレーネさんの歌も凄いですけど、やっぱりリリィの歌唱力は圧倒的ですよね。何て言うか、心が洗われていくんですよ。お客さんも皆良い笑顔でしたよ」

「良かったなぁ、リリィ。みんなに褒めてもらえて」

そう言ってリリィの頭をポンポンと叩く。照れくさそうに笑うリリィ。

「――あれ？　そう言えばマレーネは？」

マレーネの姿が見えないことに気づいた神木が首をキョロキョロ

する。
「マレーネさん、自分の部屋に戻ると言ってましたよ」ニーナが答える。
「付き合い悪いよなー。まぁ、メンバーの中で年上ってのもあるから、混ざりにくいのかな？」
ナターシャが空組から差し入れされたシャーベットを舐めながら言う。
『――うーん。彼女の事なかれ主義も後々厄介になるかもしれないな。ここは一度腹を割って話し合いをしてみるか』
神木はそう考えると、マレーネの部屋の方をチラリと見た。

パート2

その夜。神木は夜の見回りがてら、マレーネと話し合いしてみることにした。

「マレーネ、いるかい？　神木だけど」

ドアをノックしながら言う。

『……何の用かしら？』

「君のことでちょっと、話があるんだ。手間はとらせないから、中に入れてくれないか？」

『……どうぞ。カギは開いているわ』

中に入ると、相変わらず新聞紙で埋め尽くされた壁が目に入ってくる。逆にそれが圧迫感を与える。

「前来た時も思ったけど、すごい数の切り抜きだね……」

「壁にあるのはファイルに収まらなかった分よ」

キセル片手にマレーネが言う。

「へ、へぇ……」

「――で、私に何の話があるの？」

「あ、あぁ。伯林華撃団も隊員が5人になって安定してきたし、君ももっと他の隊員たちの輪に入って欲しいんだ。チームワークは芝居でも戦闘でも同じだろ？　君が事なかれ主義な性格なのは分かっている。でも、もう少し隊員たちとコミュニケーションを取って欲しいんだ」

「……」

「すぐにとは言わない。例えば、サロンで談笑したり、稽古で自分からアドバイスしたりとか、そういう小さなことから始めてくれれば……」

「私は隊長に言われたことは遂行しているはずよ。それのどこが問題なの？」

「だから、そうじゃなくて、もっと他の四人とも交流を深めてほしいんだ。君の仲間じゃないか」

マレーネは黙ってキセルの煙を吐くと、「そろそろ寝るから。おや

すみなさい」とだけ言った。
「マレーネ……」
「上っ面だけの台詞は虚しいだけよ、隊長」
マレーネはそれだけ言ってそっぽを向いてしまった。

＊＊＊＊＊＊

翌日。神木はスピカのもとを訪れた。ヨハン支配人はこの所外出ばかりでロクに劇場にいないし、何よりマレーネをスカウトしたのはスピカだから、彼女に聞けばマレーネのことが何かわかると思ったのだ。
「……ふぅん。マレーネが」
「戦闘も優秀ですし、舞台も圧倒しているのは分かります。でももう少し打ち解けてほしいとも僕は思っているんです」
「……神木くんは、マレーネのことをどれくらい理解している？」
「え？　えーっと、確かドイツ人とアメリカ人の両親を持って、こっちに来る前まではアメリカのブロードウェイで看板女優として活躍してたんですよね？　――僕が把握しているのはこれくらいですけど……」
「なるほど。マレーネという人となりを知るにはあまりにも情報が不足しているわね」
スピカは立ち上がって本棚からファイルを取り出す。ファイルの表紙にはドイツ語で『マレーネ・ミッドサマー　記録』と書かれてある。
「……正直、彼女には気の毒なことをしたわと思っているわ」

パート3

「マレーネはドイツにルーツはあれど、生まれも育ちもアメリカのカリフォルニア。つまり、彼女のアイデンティティはアメリカにあるの。こっちに来るまではドイツ語は簡単な挨拶程度しか出来なかったと聞くわ。演技の学校に入って二年間修業を積んだ後、17歳でブロードウェイの舞台で鮮烈なデビューを飾ったの」

スピカはファイルに綴じられた記事を提示する。見出しには【ブロードウェイ期待の新星　堂々デビュー】の文字が踊っている。

「彼女は百年に一人いるかいないかの逸材と言われたそうよ。出演する舞台は次々と満員御礼を叩きだして、彼女を一目見たファンが感激のあまり失神するなど、一時は社会現象にもなったほどよ」

「そんなに凄かったんですか」

「新聞を読む限りね。デビューから二年経ってようやく興奮も落ち着いたみたいだけど、それでも彼女がトップスターであることに変わりはなかったわ」

神木は新聞に目を通す。どの記事にも『氷の微笑』の文字が載っている。

「この、『氷の微笑』というのは？」

「マレーネの愛称よ。クールビューティーな面立ちに切れ長の瞳から、そう言われたみたいよ」

「へぇ、『氷の微笑』かぁ……」

確かに彼女に睨まれたら吹雪が起きそうだな、と神木は一人考えた。

「――ブロードウェイでの活躍が目立っていくうちに、彼女にも霊力があることが徐々に分かってきた。それに目を付けたのが、リトルリップシアター……紐育華撃団の本拠地なの」

「えぇ?!　じゃあ、マレーネは……」

「そう。最初、彼女は紐育華撃団に所属する予定だったの。アメリカにいるんだから、自然なことよね。でもそれに待ったを掛けたのが、私だったの」

「え？　副司令が……？」
「当時、伯林華撃団新設構想はすでにあったんだけど、肝心の隊員がまだニーナしか見つけられていない状態だった。構想にはラチェットも一枚噛んでいたから、彼女を通してマレーネを伯林華撃団に配属するよう働きかけたの。ラチェットの助けもあって、マレーネも最後は伯林華撃団に配属することを了承してくれたわ。――でもそれは、彼女にとってあまりにも辛い選択でもあったわ」
「と、いうと……？」
「リトルリップシアターにいれば、ブロードウェイに立てるチャンスはまだ残されている。でも、伯林歌劇団に入ってしまえば、ブロードウェイの舞台になんてとても立てない。伯林華撃団に入るということは、彼女のブロードウェイでのキャリアの終わりを示していたの……」
「えっ?!　じゃ、じゃあマレーネは……」
「伯林に向けて発つ前日の舞台で、ブロードウェイから引退することを宣言したわ」
　スピカが示した新聞にはどれも【『氷の微笑』マレーネ　電撃引退！伯林へ発つ！】の見出しがあった。
「彼女には本当に酷なことをしたと思ってる。でも、平和を守るのに伯林も紐育も関係ないと彼女は言ってくれたわ」
「では、ブロードウェイに未練があるわけではない、と副司令はおっしゃるんですか？」
「彼女は嘘はつかないわ。もっと他の、深く根ざした部分に彼女が心を開かない原因があると思うの。――神木くん。彼女の氷のように凍った心を、溶かしてあげて」
「……分かりました！」
　神木はハッキリとした声で返事をした。

パート4

元気よく返事をしたものの、ただでさえ自分の殻にこもっている人間に力づくで押しても逆効果だ。

『――押してダメなら、引いて見ろだ！』

二日後。神木は一張羅のタキシードを着てマレーネの部屋を訪れた。神木の格好にさすがの彼女も目を丸くする。

「……一体どういう風の吹き回しなの？」

「オペラのチケットを貰ったんだ。だけど、僕はオペラとかよく分からないから、マレーネに色々と教えてもらいながら楽しみたいなと思って」

「……それって、私を誘っているの？」

「まぁ、そんなところだ」

ここは誤魔化さずにハッキリと言う。マレーネはしばらく神木の言葉の意味を推し量っていたが、やがてフッと息をつくと「少し待ってて。着替えてくるから」と言って部屋にまた戻っていった。

再び部屋から出てきたマレーネは、艶やかな美しさを兼ね備えた彫刻のように素晴らしかった。流石の神木もドキッとする。

「さて、参りましょう」

「は、はい！」

外に出ると、道行く人々がマレーネに注目した。彼女の美しさは伯林でも1、2を争うほどだろう。

「随分と、人気みたいだね」

「あら。そんなこと、分かりきってのことよ」

オペラが開かれる会場、『伯林・ドイツ・オペラ』はすでに大勢の聴衆でごった返していた。入口には【ブリーダ・レイダー　伯林サヨナラ公演】の文字が書かれた立て看板がある。

「ブリーダ・レイダーって、ドイツでも五本の指に入るオペラ歌手なのよ」

マレーネが説明する。

「へぇー。でも、伯林サヨナラって引退でもするんですか？」

「オペラの本場でもあるイタリアの有名劇場に引き抜かれたのよ。多額の移籍金を積まれてね」
「へ、へぇ……」
　席は奮発して一階のそれなりに見晴らしの良い場所を確保した。本日のプログラムは、ワーグナーの曲を中心にした内容となっている。照明が落ち、オペラが開演した。
『ビブラートの女神』と謳われているだけあって、ブリーダの歌声はまさに素晴らしいの一言だった。マレーネも真剣に見入っている。
　約二時間のプログラムが終わり、二人は『伯林・ドイツ・オペラ』を後にする。
「いや、凄かったね。オペラ聞くのは初めてだったけど、また来たくなったよ」
「まぁ、リリィと良い勝負って所かしら？　良い勉強にはなったけど」
「この後だけど、レストランでディナーを予約しているから、一緒にどう？」
「もう予約してしまったのなら、断るわけにはいかないわね」
「決まりだ」
　レストランは伯林市内を一望できる場所に店を構えていた。
「マレーネ、ご覧……」
　席に着いた神木は広々とした窓から伯林の街を見下ろす。
「綺麗ね……。紐育を思い出すわ」
　マレーネは吸い込まれるような瞳をしながらつぶやいた。

パート5

「そうだ、マレーネ。紐育にいた時のことを教えてよ」
　運ばれてくる高級料理に舌鼓を打ちながら、神木はマレーネに尋ねる。
「――スピカから最低限のことは聞いているんじゃないの？」
「そりゃそうだけど、でも君の口からも聞きたいんだ。文字よりも、やっぱり本人の言葉の方が説得力あるからね」
「――そうね。で、何が聞きたいの？」
「うーん、そうだなぁ。一番印象に残っている舞台って何かな？」
「それはやっぱり、デビューの時ね。生まれて初めて大観衆の前に立って演技をするなんて経験をしたのも初めてだったし、その多くのお客さんが私の手取り足取りを見ているのよ。とても不思議な経験であると共に、非常に充実感を覚える瞬間だったわ」
　遠い目をするマレーネ。その視線の先にはブロードウェイの舞台が映っている。
「それから何本もの舞台に立ったけど、やっぱりデビューは格別ね。自分の存在が、ブロードウェイを見に来てくれる皆に認められた気がしたから」
　ウェイターがロマネコンティを持ってきて、グラスに注ぐ。
「――君の部屋の壁いっぱいに、新聞の切り抜きが貼ってあったね。あれは……？」
「デビューから今までに私のことが載った記事を片っ端からスクラップしているのよ。新聞もニューヨーク・タイムズからボストン・グローブまで。私に関する内容が書いてあれば、それがネガティブなことでも保存するわ。あの切り抜きは、私の活躍の証なの」
「……伯林に来てからも続けているのかい？」
　神木はそろりそろりとマレーネの気持ちを探る。
「一応ね。どれもこれもべた褒めしかしていないからつまらないわ」
「伯林もゲーテを始めとして、演劇は有名だからね。そのドイツの批評家がこぞって称賛しているなら、本物だよ」

「批評家の言うことなんて気にしてないわ」
　その刹那、神木の脳の中で点と点が繋がった音がした。
『そうか。――ということは』
「……マレーネ。君にとって応援してくれるファンはどういう存在だ？」
「ファンがいてくれるから私は存在しているのよ。両親と同じ、もしくはそれ以上の大切な存在だわ」
「――でも、本当は違ったんだろ？」
「えっ？」
　マレーネが戸惑いの表情を出す。
「副司令から聞いたよ、舞台の上で電撃引退を表明したって。当然応援してくれている人からしたら青天の霹靂だろう。でも、案外人間ってのは流行に流されやすい質だ。君が伯林に渡ったころには、その人たちの興味はすぐに別のベクトルに向いてたんじゃないのか？」
「……」
「紐育にいる人が伯林にいる君の動向を知る術なんて限られているからな。自分の存在が実は大したことなかったということに、君自身が気づき、そして傷ついたんじゃないか？」
「……」
　マレーネはしばらく黙ったままでいたが、やがて「出ましょう」とだけ言うと立ち上がってさっさと出入り口まで歩いていった。

パート6

外に出ると、すでに日はとっぷりと暮れていた。
「少し、歩きましょう」
マレーネはそれだけ言って、伯林の街並みを歩いていく。春にやってきた伯林も季節はすでに夏。行きかう人々も服装はラフなものに変わっている。
「――今のブロードウェイを誰が引っ張っているか、隊長は知っている？」
しばらく道を歩いてからマレーネが尋ねてきた。神木は黙って首を振る。
「ジーン・ミューア。私が引退した次の日に華々しいデビューを飾ったわ。なめらかなブロンドに愛嬌の中に気品ある表情。私とは正反対。すでにブロードウェイの次世代スタァとして各方面から注目の的よ。お客さんは皆、私のことなんかすっかり忘れたみたい」
「……」
「私は舞台女優が天職だと思ってきた。それはひとえに、応援してくれているお客さんがいるから頑張れていると思っていた。でも、お客さんの方は新しい子が出てきたらそっちに鞍替え。私のことは何とも思っていない。それが、なんと言うか、裏切られたようなように思えたの」
「マレーネ……」
「おかしいわよね。『氷の微笑』としていつだって凛としてきた私が、こんな気持ちになるなんて。こっちに来てからもその気持ちが消えなくて。そんな気持ちを経験したことない、ニーナやナターシャたちを見ていると、いたたまれない気分になるの。だから、皆とは距離を取ってたの」
マレーネは一気に話すと、キセルを取り出して火をつける。
「――でも本当は、誰かに私の気持ちを理解してほしかっただけかもしれないわね」
「マレーネ。僕は伯林に来るまで芝居なんて観たことなかったけど、

それでも君のロミオを見た時は鳥肌が立った。役者というのは、そこにいるだけで人に感動を与えるんだ。確かに、紐育のブロードウェイのお客さんは君のことを何とも思っていなかったかもしれない。でも、例え何が起きたとしても、僕は君のファンであり続けるよ」
「隊長……」
「だからマレーネ。また伯林でも紐育の時みたいに羽ばたいてくれよ」
「……ありがとう」
それだけ言うとマレーネはそっぽを向いてキセルを吸い始めてしまった。フッと笑みを漏らす神木。
その時、神木のアイフォトロンが突然鳴り響いた。慌てて取り出して応答する。
『あ、神木くん？』
相手はスピカだった。
「どうしました、副司令？」
『また敵が現れたわ。場所は戦勝記念塔よ。すでにニーナたちは出撃したわ。神木くんも急いで！』
「分かりました！」
電話を切ると、マレーネが「敵ですか？」と尋ねてきた。
「あぁ、すぐに戦勝記念塔に急ぐぞ。伯林華撃団、出撃だ！」
「了解！」

パート7

戦勝記念塔では、ユッタが敵蒸気機械『リーリエ』を操り、ニーナ・ナターシャ・リリィと対峙していた。『リーリエ』はタコのように長い足が特徴的で、飛行形態でも相手に簡単に捕まる恐れがある。

「クソっ。隊長はまだなのか!?」

上空を旋回しながらナターシャが毒づく。

「マレーネさんもまだ来てません!」ニーナ。

「ナターシャ、どうするの?」リリィ。

「このまま飛び続けても無駄に霊力を消費するだけだ。相手が動きを見せるまでその場に待機。あとは隊長たちが来るのを待つんだ」

「了解!」

一方のユッタも、相手の動きを見定めていた。

「……どうやら敵は三人。しかもボスはいない。隙を見て突っ込めば形勢はこちらに傾く」

ユッタはマシンを起動すると、足を三人目がけて上空に投げ込んだ。

「来やがった!」

三人はちょこまかと攻撃をよけつつ、相手の体力を削っていく。

「一人だからって油断するな! 何か企んでいるかもしれない!」

ナターシャがそう言った瞬間、『リーリエ』の足が突如空中まで伸びてあっという間に三機を捕まえてしまった。

「しまった!」

足からは大量の光線が流れ出て、三人の体力を奪っていく。

「ハーハッハ! 死ね、死ねぃ!」

ユッタが高笑いをしながらさらに光線を強めようとした時、突如三人を捕えていた足がボロボロと切り刻まれていった。三人は地面に落っこちる前に脱出する。

「な、何だ?!」

ユッタは視線を別に向けると、マレーネのアイゼンクライト改がちょうどやってきたところだった。

「千両役者は遅れてやってくるのよ。伯林華撃団、参上！」
神木のアイゼンクライト改が皆の元に駆け寄る。
「みんな、遅れてすまない。大丈夫だったか？」
「あ、あぁ。なんとかな」ナターシャが答える。
「でも、マレーネさん、どうしたんですか？　見得なんか切って」秋奈が尋ねる。
「そーだよ。マレーネ、なんかいつもと違う」リリィも不安そうに聞く。
「――変わったのさ、彼女も。さぁ、グズグズしていられない。伯林華撃団、出撃！　目標は敵蒸気機械の撃破！」
「――了解！」
足を無惨に失った『リーリエ』は、攻撃力を失ったも同然だった。マレーネを中心に攻撃陣形を取り、リリィと秋奈は空中から集中攻撃を行った。
「もう諦めるんだ！　貴様に勝ち目はない！」
神木が声を張り上げる。
「……く、く、クソッたれぇぇぇぇぇ!!!　誰が、誰がてめぇらなんかに、白旗を上げるかぁあああああ!!!」
ユッタは絶叫すると、コックピット内にある自爆ボタンを叩きつける。機体から白い閃光が噴出してくる。
「――いかん！　全員退避！」
「了解！」
皆が空中へ退避した直後、『リーリエ』は激しく爆発し、残骸だけがその場にボロボロと残された。
「……終わったな」
アイゼンクライト改から降りて機体の残骸をチェックする一同。
「それにしても、マレーネが来てくれなかったら危なかったぜ」
ナターシャがマレーネに言う。
「それにあんな口上まで叩いてよー。どうしたんだ、本当に？」
「……さぁね。敵を見たら、急に体が熱くなったのさ」
そう言って、神木の方に顔を向ける。

「ありがとうね、隊長」
「マレーネ……」
「――なんかよく分からないけど、とりあえず、アレ、やります？」
秋奈がみんなに提案する。
「そうだ！　今日はマレーネが音頭を取ってよ！」
「私が？　――じゃ、いくわよ。勝利のポーズ……」

「決め！」

＊＊＊＊＊＊＊
「もうすぐ、もうすぐ目覚める……」
闇に包まれた男が何やら作業をしながらブツブツ呟く。
「これで、これでこの国はわが手に。ふふ、フハハハハハ……！」
男の高笑いは闇夜に鳴り響いた。

【Ｅｐ．５　完】

Ｅｐ．６　箱入り娘クライシス

パート１

「ユッタもやられたのか！」
ヨーゼフは愕然と床に跪く。
「なんてこった。もう、残るは私一人……兄者はこの所顔を見せないし……」
頭を抱えて怒りに震える。そして、キッと顔を上げる。
「……よかろう。復活してパワーアップした私の真の姿を見せてやる！」

＊＊＊＊＊＊

「……これは、マレーネ。これもマレーネ。これは……ナターシャか」
神木は劇場に送られてきたファンからのプレゼントや手紙を仕分けしていた。今や伯林を代表する存在となった伯林歌劇団には、国内外からファンがファンレターやプレゼントが送られてくる。それをメンバー別に分けるのも隊長である神木の仕事だ。
「神木さーん」
リンが段ボールの箱を持って現れる。
「すみません。まだ残ってましたー！　これもお願いしまーす！」
「えぇ……」
神木はガクッと肩を落とす。
「リンくんのおっちょこちょいは困ったものだよ」
「すみませーん。よろしくでーす」
全く反省していない口調で段ボールを置いて出ていく。
「……やるしかないか」
結局全部の仕分けが完了したのは、舞台の夜の部公演が終わったのと同時刻だった。
「お疲れ様です。隊長」

サロンでダラーンとしている神木に、秋奈がレモン水を差し出す。
「今週もマレーネが一位かよー。強すぎるだろ」
プレゼントの量を見ながらナターシャがぼやく。
「あら？　私とあなたとでは格が違うのよ」すました顔で言うマレーネ。
「何だとコラァ?!」
「まぁまぁ、喧嘩は止めて」
慌てて神木が仲裁に入る。
「……でもマレーネさん。一時と比べるとずいぶん明るくなりましたね。私達とも話すようになったし」
秋奈がしみじみと言う。
「そうだな。これでようやく、伯林華撃団勢揃い、ってとこかな？」
神木もほっとしたように言う。
「神木さーん」
売店で売り子をしていたアンジュがサロンにやってくる。
「アンジュくん、どうした？」
「それが、ロビーに変な人がいるんです？」
不安そうに言うアンジュ。
「変な人？　舞台のお客さんとかじゃなくて？」
「そうは見えないんです。ブロマイド求めに来るお客さんとも違うみたいだし」
「……よし。俺が行ってみるよ」
神木は立ち上がって、一階ロビーに向かう。アンジュの言っていた通り、一人だけ不審そうにせかせかと動き回る壮年の男性がいた。神木はその男性に近づく。
「お客様、本日の公演は終了しましたが、いかがなされましたか？」
男性は神木にいきなり声を掛けられて肩をビクッと揺らす。が、恐る恐る振り返って神木の顔を見ると、「あんた、劇場の人間か？」と尋ねてきた。
「え、ええ。私は劇場のモギリ係ですが――」
「支配人に会いたいんだ。支配人に会わせてくれ」

「えぇっと……支配人はただいま留守にしておりまして、副支配人しかおりませんが……」
「何でもいい！　とにかく会わせてくれ」
「あ、あの。あなたは一体……？」

「私は、ニーナの父親だ！」

パート2

「はじめまして。オットーさん」
　応接室でニーナの父親、オットーと対峙するスピカ。神木はドア付近に立っている。
『……あれ？　ニーナくんをスカウトしたのは副司令だから、父親とも面識があるんじゃないのか？』
「わざわざミュンヘンからお越しいただきありがとうございます。それで、本日は一体どういうご用件で……？」
「ニーナを連れて帰りに来た！」
　オットーが被せるように言う。神木はその言葉に面食らう。
『連れて帰る?!　一体どういうことだ？』
「……話が見えないのですが……」
「妻から聞いた。私がいない間にとんでもないことをしてくれたな！」
　だんだん沸騰してくるオットー。
「娘は私の後を継いで薬剤師になるんだ！　そのためにヴュルツブルク大学薬学部の試験対策もやって来たんだ。その将来を投げ捨てて役者だと？　断じて許すことは出来ん！」
「オットーさん、奥様からの了承は得ています。本人の意思も確認しております」
「黙れ！　この詐欺野郎！　娘は何としても私が連れて帰る！」
「オットーさん。本人の将来は本人が決めることです。彼女は、ニーナは喜んで私達の仲間になると言ってくれました」
「ニーナは騙されてるんだ！　あの子は純真無垢だからな！　とにかく、私はニーナを連れて帰る！」
「お、お義父さん。落ち着いてください」
　今にも暴れ出しそうなオットーをなだめる神木。
「モギリにお義父さんと呼ばれる義理はない！」
「オットーさんと言ったんです！　それより、オットーさん。娘さんの舞台を観劇したことはありますか？」

「あるわけないだろう！　娘がこっちにいることもつい最近知ったんだ！」
「じゃあ、文句は娘さんの舞台を見てからにしませんか？　ニーナくんも春に比べればなかなか演技も上達してファンも増えてるんですよ」
「そうですわ。せっかく娘さんが頑張ってらっしゃるのに、それを無下にすることはありませんわ」
　スピカは胸ポケットから舞台のチケットを取り出す。
「現在公演している演目は、古代ギリシアの喜劇作家アリストパネスによる戯曲『女の平和』です。特等席をご用意しますから是非楽しんでください」
　オットーはしばらくスピカを睨みつけていたが、ひったくるようにチケットを奪い取ると、そのままドスドスと部屋を後にした。
「……参ったことになったわね」
　オットーが去った後、ソファに座りなおして頭を抱えるスピカ。
「ニーナくんをスカウトした時、オットーさんはいなかったんですか？」
「ニーナのお父さんは、薬局経営の傍ら薬学部の先生でもあるの。私がスカウトに行った時はちょうど長期の出張に出てた頃なのよ。奥様と本人から了承を得たから大丈夫だと思ったけど、甘かったわね」
「まぁ、でも舞台を見ればコロッと意見変わりますよ」
「……その舞台が問題なのよ」
「へっ？」
「神木くん。『女の平和』がどういうあらすじか、知ってる？」

パート3

『女の平和』は、平和主義者だった作者のアリストパネスがペロポネソス戦争に反対する意味合いで書かれた戯曲で、アテネ・スパルタ両軍の兵士の妻が戦争に抗議する意味合いでセックス・ストライキを行い、それに懲りた兵士たちが和平を結ぶというストーリーだ。

伯林歌劇団史上最も下ネタが飛び交う舞台となったが、マレーネやニーナが堂々とした振る舞いでポンポン下ネタを言う様子やナターシャ演じる兵士のコミカルな演技が相まって観客は終演まで笑いが止まらない状況となった。

「大好評みたいですね……」

舞台袖から覗きながら神木が呟く。

「エロと笑いは紙一重なのよ。人間の根底にあるのはエロだからね。神木くんだってそうでしょう？」

「ぼ、僕はそんなこと、ありませんよ！　自分は帝国軍人なんですよ！」

「どうかしら？」

「勘弁してくださいよ～！」

「……見て、神木くん」

スピカが指さした方に目を向けると、貴賓席で顔を真っ赤にさせたオットーが座っていた。

「うわぁ。これはもう一嵐ありそうですね……」

「覚悟した方が良いわね」

その言葉を聞いて、神木は憂鬱な気分になった。

案の定、舞台が終わるとオットーは真っ先にスピカの元へやってきた。

「何だ、あの舞台は！　まるで公開処刑じゃないか！」

怒りで顔がゆでだこみたいになっている。

「お、オットーさん。今回はたまたま、あぁいうテーマだっただけです。過去には、シェイクスピアだったりミュージカルだったり、とにかく私達は様々な作品を取り上げているんです」

神木が何とかなだめるが、まるで取り付く島もない。
「うるさい！　貴様なんかに、子を持つ親の気持ちが分かるもんか！
とにかく、娘は連れて帰る！　えぇい、話せ！」
「パパ！」
取っ組み合いをしていたら、奥からニーナが歩いてきた。背後に他のメンバーもいる。
「ニーナ！」
オットーは神木を振り切ると、ニーナのもとに駆け寄る。
「ニーナ……。大丈夫だったか、さ、パパと一緒にミュンヘンに帰ろう」
「パパ、私はここに残るわ」
思いもかけない言葉だったからか、唖然とするオットー。
「な、何だって？　ニーナ。冗談はやめなさい」
「私は本気よ。私は、みんなとここに残るの」
「ニーナ。私がどれだけニーナのことを心配したのか分かっているのか！」
「想像はつくわ。でも、それとこれとは話が別よ。私は、伯林華撃団の一員ですもの」
一瞬固まるオットー。
「な、何だって……？　ニーナが、伯林華撃団、だと……？」
「黙っててごめんなさい。でも、伯林の平和を守るために、私はここを離れられないの」
「そんな……そんな、そんな……」
呆然と床に跪くオットー。
「嘘だ、嘘だ、嘘だ……！　私のニーナは、私のニーナは虫けら一匹殺せないほど純粋な子だったんだぞ！」
「子供は、親の知らないところで成長していくんです」
神木が口を挟む。
「自分も士官学校に入る前の夜に、おふくろに言われました。小さい時はまともに泳げなかったのに、それが今や未来の海軍軍人か……、ってね。オットーさん、ニーナくんは伯林の平和を守るために

も必要な存在です。ですが、大切な娘さんをお預かりしている以上、ニーナくんは隊長である私が必ず守ります。どうか、私達を信じていただけないでしょうか？」

そう言うと、神木は深々と頭を下げた。

オットーはしばらく動かないでいたが、やがてゆっくり立ち上がると一言、「よろしくお願いします」とだけ言って、その場を離れていった。

「……神木さん」

ニーナが不安そうに神木に声を掛ける。神木は微笑むと

「大丈夫さ。オットーさんも、分かってくれたよ。それに、あの言葉は嘘じゃないからね」と言った。

「神木さん……」

頬を赤らめるニーナ。と、ここで館内放送が入る。

『伯林歌劇団一同、伯林華撃団一同。荷物が届いております。至急、お集まりください』

「この放送は！」

「緊急事態発生、だ。みんな、行くぞ！」

「了解！」

パート4

「副司令！」
　神木たちが作戦指令室に着替えをしてから向かうと、すでにスピカと空組の面々が待っていた。
「副司令。何が起こったのですか？」
「帝撃で利用されている蒸気演算機を伯林でも取り入れて、敵の居所をキャッチしようと試みたの。すると、ある場所から断続的に霊力が発生していることが分かったわ」
　そう言って、蒸気演算機が指している箇所を示す。
「敵のアジトは、ビオスフェーレンレゼルヴァート・ショルフハイデ＝コリーンにあるわ！」
「ビオ……なんです？」
「ここから少し離れたところにある自然公園よ」
「――確かそのあたりって、森が多かったはずです」
　ニーナが口を出す。
「なるほど。森の中なら身を隠すのにちょうど良いってか」
「アジトさえわかればこっちのもんよ。さぁ、神木くん、出撃命令を！」
「はい！　伯林華撃団、出撃せよ！　目標、ビオスフェーレンレゼルヴァート・ショルフハイデ＝コリーンに潜伏している敵の撃破！」
「了解！」

＊＊＊＊＊＊＊

　森の中は空からの偵察が困難なため、光武形態で進軍することになった。
「おそらく、隠れ家とか、洞窟的なものがあるはずだ。油断するなよ」
「了解！」
『神木さん！』
　遠くに進んでいたニーナが通信で知らせる。

「どうした、ニーナくん」
『奥の方に洞穴があります！　中から強い霊力を感じます！』
「よし、すぐいく！　みんな、奥に進むぞ！」
「了解！」
　洞穴はアイゼンクライト改が入れるほどの大きさだった。中に入ると、あまりの霊力の強さに一瞬頭が痛くなる。
『間違いない。敵はこの中にいる！』
　神木を先頭に奥を進んでいくと、突然視界が開け、巨大な空間が現れた。
「ここは……」
「よく来たな、伯林華撃団！」
　地響きがすると共に、岩の壁を蹴破ってヨーゼフが敵蒸気機械『シュテンゲル』が現れた。
「まさか、アジトを見破られるとは思わなかったな。褒めてやろう」
「貴様は……ヨーゼフ！」
「生きていたの?!」
「俺以外の三人は全員やられた。ハインリヒ・トゥルーデ・ユッタ……。今こそ、やられた三人の仇を取る時！　前の俺とは違うぞ！」
『シュテンゲル』が戦闘態勢に入る。
「ここが貴様らの墓場となるのだ！」
「来るぞ！　伯林華撃団、ヨーゼフを撃破せよ！」
「了解！」
　ヨーゼフの言う通り、『シュテンゲル』は以前戦ったときよりも圧倒的に強くなっていた。空中戦が出来ない以上、光武形態で戦うしかない。
『数では勝っているが、パワーでは互角か……』
　厄介なことに、『シュテンゲル』は装甲も強化されているため、まともなダメージを受けてもビクともしない。
「クソ。どうすれば……」
『神木さん！』
　突然、ニーナが通信をして話しかけてきた。

パート5

『神木さん！　私が囮になってヨーゼフの注意を引きます。そのうちに！』
「いかん！　危険すぎるぞ、ニーナくん！」
『危険は承知です！』
「相手は格段に強い！　一人では危険だ！　僕も一緒に行く！　それでいいだろう？」
『は、はい！』
「各隊員に告ぐ。僕とニーナくんで奴の注意を引く。そのうちに、三人は攻撃を仕掛けろ！」
『了解！』
　神木とニーナが隊の先頭に立って、『シュテンゲル』にとびかかる。
「オラオラァ！　森の落ち葉にしてやんよぉ！」
　威勢は良いが、森の中でデカい図体で一度に二機を相手にするのは大変なようだ。
「クソッ。クソッ！」
　ブンブン腕を振り回しているうちに、『シュテンゲル』は足元をすくわれて倒れてしまった。
「今だ！」
　チャンスを見逃さず、神木が声を張り上げる。四機、一斉に『シュテンゲル』を押さえつける。
「クソッ。離せ、離せ！」
　一生懸命もがくヨーゼフだが、四人が強く機体を抑えているため身動きが取れない。
「神木さん、今です！」
　ニーナが声を上げる。
「うぉおおおおおおおおおおおお!!!!!!!」

神木がありったけの力を込めて、『シュテンゲル』のコアを貫く。

「ぎゃあああああああああああ!!!!!!」

急所を突かれた『シュテンゲル』は制御不能となった。機体から白い煙が立ってくる。

「クソッ……この俺が……二度も華撃団に負けるなんて……」

「伯林の平和を脅かす者がいる限り、僕たちは決して負けない！　それが、伯林華撃団なんだ！」

「クソッ。クソクソクソクソ！　こうなったら、てめぇらもろとも道連れだ！」

「――いかん！　自爆する気だ！　全員退避！」

「了解！」

神木の合図で全員森を離れる。その十秒後に猛烈な爆風が背後から吹いてきた。

「間一髪だったか……」

燃え盛る森を見ながら神木が呟く。

「だけど、これであたしら伯林華撃団の完全勝利だな！」ナターシャ。

「えぇ。これでまた劇に集中できるわ」マレーネ。

「手ごわい相手だったわね……」秋奈。

「でもこれで、僕たち平和に暮らせるよね！」リリィ。

「あぁ。――帰ろう。ベルリン歌劇場へ」

劇場に帰還すると、スピカと空組の面々が出迎えてくれた。

「副司令、伯林華撃団、ただいま帰還しました」

「うん。おつかれさま」

笑顔で迎え入れるスピカ。

「お疲れ様です。皆さん」つぼみ。

「ホント、心配したんだからー！」アンジュ。
「でも良かったです。皆さん無事で」リン。
「いやぁ、お疲れちゃん」
　後ろから陽気な声がする。振り返ると、ワイン片手に持ったヨハンが立っていた。
「支配人！　どうしたんですか？　ってか、どこ行ってたんですか、今まで？」
「いやぁ、ちょっと用があってねー。ついでに長期休暇も取ってた！
　でも凄いねー。ヨーゼフたちをやっつけるなんて！」
「は、はぁ……」
「さぁ、さぁ。皆さん！」
　ニーナが声を張り上げる。
「敵も倒したことだし、いつものアレ、やりましょう！」
「――そうだな。よし、みんな、入って入って、いくぞ！　――勝利のポーズ……」

「決めっ！」

＊＊＊＊＊＊＊
「……同胞が全員やられてしまうとは。少々計算外だったか」
　闇の中で男が呟く。
「……まぁ良い。奴らのコレを破壊さえすれば、こっちのものよ」
　男はそう言って、アイゼンクライト改を見上げた。

Ｅｐ．７　すてきなウィンターホリデイ
パート１

三ヶ月後。年も暮れる１２月。
スピカが神木および四季組と空組の面々を、舞台終了後にサロンへと集めた。
「みんな、集まったわね」
スピカが皆の顔を見渡しながら言う。
「スピカ、急に集合なんて、どうかしたの？」マレーネ
「まさか、敵か！　場所は、数は?!」ナターシャ。
ヨーゼフを倒して以降、伯林には平和な日々が続いていた。伯林華撃団も、伯林歌劇団としての活動に専念することが出来、毎月の公演も滞りなく行っている。
「違う、違う。そうじゃないのよ」
スピカが笑いながら手を振って否定する。
「皆、今日が千秋楽でしょ？　一年間お疲れ様。敵も倒して、舞台もやって、皆も疲れているでしょう？」
「そうかなぁ？」
リリィが首をひねる。
「リリィはまだ若いから分からないのよ。でも、身体は正直でね。あまり無理して活動を続けていると、後々そのツケを払うことになるの。――というわけで、明日から来年の１月１０日まで、伯林歌劇団は冬休み期間とします！」
「冬休み?!　休みが貰えるんですか?!」
秋奈とニーナが歓喜の声を上げる。
「そうよ、私からのご褒美。思いっきり、羽を伸ばしてらっしゃい！」
「それって、わたしたちもか!?」
アンジュが手を挙げて質問する。
「ええ。四季組・空組ともに明日から冬休みよ！」
「やったぁ――！」

「ただし、まだやることが残っているのなら、片付けた方が後々楽ね」
「アンジュ、リン。まだ事務作業が残っているでしょう？　今日中にはとても終わる量じゃないから、私達の冬休みは明後日からになるわね」
　つぼみが声を掛ける。
「なーんだぁ。もう冬休みモードに入っていたのに……」
　しょげるリンに、スピカが「まぁまぁ、それも冬休みのイベントと捉えて……」となだめる。
「まぁ、いいか。どのみちアレが明日来ることだし」
「……アレ？　リンくん、何だい、アレって」
　神木がリンに尋ねる。
「えへへ、ヒ・ミ・ツ、です」
「は、はぁ……」
「それで、神木くんはどうするの、冬休み？」
　スピカが神木に尋ねる。
「……うーん、そうですね。急なことなんで、まだ決めてないですけど。二週間もあるんなら、日本に帰るのもありだなと思いますね」
「そうね。せっかくの休みなんですもの、有効に使わないとね」
　スピカはここで言葉を切り、懐中時計で時間を確認すると「ではもう今日は遅いから、これでお開きとするわ」と言った。
　自室に戻った神木は、ベッドにゴロンと横になって天井を見つめながら、明日からのプランを考える。
『伯林観光も良いし、日本に帰るのもありだし……。うーん、迷うなぁ……』
　そんなことを考えながらボンヤリしていると、部屋のドアがコンコンとノックされた。
「はい、どなた？」

パート2　ニーナルート

「私です。ニーナです。神木さん、よろしいですか？」
「ニーナくんか。どうぞ、カギは開いてるよ」
　部屋に入ってきたニーナは心なしか緊張しているように見える。
「どうしたんだい、ニーナくん？」
　ベッドから身を起こしながら神木が尋ねる。
「神木さん、あの……明日からの冬休み、何か予定を立てましたか？」
「予定？　いや、まだ決めていないけど」
「あ、あの……。良かったら私と、その、伯林の街を観光しませんか？」
「えっ？」
「神木さん、こっちに来てからずっと舞台と戦いと、あまり観光出来てないですよね？　せっかくの休みですし、良かったら私と一緒にあちこち回ってみませんか？」
「そうだなぁ……。よし、行こう！　確かにきちんとは街を見ることが出来ていないからなぁ」
　神木の返事に、パァッと顔を輝かせるニーナ。
「良かったぁ。じゃあ、明日朝十時に一階のロビーに集合してから行きましょう！」
「あぁ、分かった。じゃあ、また明日ね」

＊＊＊＊＊＊

　翌日。先にロビーに着いた神木が待っていると、桜色のドレスに着替えたニーナが笑顔で走ってきた。
「ごめんなさい。待ちましたか？」
「いや。僕も今来たところ。――それにしても、ニーナくんの服装よく似合っているよ」
「そうですか？　えへへ、思い切って買ったんですけど、良かったぁ」

「それで、どこに連れていってくれるの？」
「そうですねぇ。――ベルガモン博物館はどうでしょう？　今年開館したばかりなんですけど、古代ローマ・古代オリエント美術のコレクションが売りなんですよ」
「へぇー、それは興味あるな。よし、じゃあそこに行こう！」
　ベルガモン博物館は川沿いにある施設で、とてつもない広さを誇っている。何と言っても、中にまるまる古代の建築物が保存されているのだから、その迫力たるや。
「凄いなぁ。これほどの規模の博物館はさすがに日本にも無いよ」
　建造物を見上げながら神木が呟く。
「私も前に一回来たばかりなんですけど、本当に圧倒されますよね」
「あぁ。西洋の歴史を肌で感じることが出来る貴重な空間だ」
　次のブースへ移動しようとした時、後ろから来たツアー客とニーナがぶつかった。
「危ない！」
　床に倒れそうになるニーナの手を握る神木。
「大丈夫?!」
「あ、はい……。ありがとうございます……」
　立ち上がりながら顔を赤らめるニーナ。
「そろそろお昼時だけど、どうする？」
「私、前から行ってみたいレストランがあったんです。そこに行きませんか？」
「よし、じゃあそこに行こう」
　件のレストランは、ブランデンブルク門の近くにあった。
「ここのレストラン、伝統的なドイツ料理を提供してくれるって雑誌で取り上げられていたんです」
「ほう……そりゃ楽しみだ」
「それにしても嬉しいなぁ。神木さんと二人きりでお食事が出来るなんて」
「に、ニーナくん……」
　照れる神木。

だが、突如遠くの方で爆発音がこだまする。
「な、何だ？　爆発か？」
神木が腰を浮かしたのと、アイフォトロンが鳴ったのはほぼ同時だった。
「も、もしもし？」
『もしもし、神木くん？』
珍しくスピカの声が切羽詰まっている。
「副司令。一体どうしたっていうんですか？」
『すぐに戻ってきて。緊急事態なの！』
「緊急事態？　――分かりました。すぐに戻ります！」
アイフォトロンを切ると、ニーナに向かって「すぐに劇場に戻ろう」と言う。
「はい！　――でも、何が起こっているんです？」
「分からない――けど、とてつもなく嫌な予感がする」
そう言って、神木は爆発がした方面に視線を向けた。

パート2　マレーネルート

「隊長、入ってもいいかしら？」
「マレーネか。どうぞ、カギは開いているよ」
　部屋に入ってきたマレーネは、なぜか微笑んでいる。
「ど、どうしたんだい、マレーネ？」
「隊長、明日からの冬休み、何か日程はある？」
「い、いや。まだ決めていないけど」
「そう。――じゃあ、私と一緒に紐育に行かない？　せっかくの長期休暇だから、久しぶりにブロードウェイ時代の同僚にも会いたいと思って」
　マレーネの提案に目を白黒させる神木。
「にゅ、紐育?!　――お邪魔にならないかな、僕なんかが行って」
「あら、隊長には是非とも来てほしいわ。それに、知見を広げることは軍人にとっては大切なことでしょう？」
「そうだな……。じゃあ、お言葉に甘えて一緒に行くことにしよう」
「ありがとう。明日の朝８時にロビーに集合。その後空港に出て１０時発の紐育行きに乗るわよ」
「何だか、話が大きくなってしまったなぁ。――じゃあ、また明日」
「おやすみなさい、隊長」
　マレーネはさっと手を挙げながら部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊

　翌日。先にロビーに来た神木は、現れたマレーネの艶やかなドレス姿に思わずドキッとした。
「どうかしら、隊長？」
「美しいよ……マレーネ」
「ふふっ。良かったわ。さぁ、行きましょう」
　空港には、春に来たばかりで久しぶりだった。二人は、１０時出発紐育行きの便のチケットを買って、飛行機に乗り込む。

「到着予定時刻は19時30分か……ちょっと遅い時間だな」
「ブロードウェイの皆には、その翌日の昼に会った方が良さそうね。その時間帯はたぶん舞台やっているでしょうし」
「そうだね」
「それにしても、まさか隊長と二人きりで紐育に行くなんて、まるで夢のようだわ」
「ま、マレーネ……」
思わぬ台詞に照れる神木。
二人を乗せた飛行機は、事故も無く定刻通りに紐育に到着した。現地はすでに夜だ。空港内は大勢の旅行客で溢れかえっている。
「とりあえず、ホテルに移動して夕飯を取って、今日はもう休むとしよう」
タクシーを拾いながら神木が提案する。マレーネもそれに同意する。
紐育の夜は、昼のような喧噪だった。

翌日。二人でダイニングの朝食を取りながら、今日の予定について話し合う。
「今日は休演日だけど、明日からまた公演があるからみんな劇場には来ていると思うの。行けば誰かしらに会えると思うわ」
「マレーネの知り合いって、どんな人たちなんだろう」
「ふふ、曲者揃い、といった感じかしら？」
「曲者か。でもマレーネには敵わないだろ？」
「あら。ご挨拶ね」
そう言ってマレーネは微笑を浮かべた。
食事が終わって支度をしてから外に出る。紐育は快晴。神木はタクシーを拾うと、マレーネがかつて在籍していたブロードウェイへと向かった。
ブロードウェイには無数の劇場が乱立しているが、その中でも特に大きな規模を誇るのが、マレーネがいた劇場『ムーンライトシアター』だ。劇場の看板には、でっかく【クリスマスキャロル】の文字が出て

いる。おそらく今上演している演目だろう。
「さ、入って」
マレーネは、関係者用の出入り口のドアを開ける。
「お、おい。大丈夫か？　ちゃんと、警備の人に挨拶してから……」
「大丈夫よ。私は顔パスだから」
そう言ってずんずん奥に入っていく。
「まったく……」
神木も慌てて後を付けていく。
マレーネは複数ある部屋の中から「待機室」と書かれた部屋を開ける。中では複数の役者が私服のまま談笑していたが、マレーネの姿を認めると皆一様に固まってしまった。
「どうしたのみんな、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして」
神木がマレーネの後ろからひょっこり顔をのぞかせる。皆美形揃いで、いかにも舞台に映えるといった感じだ。
「――マレーネ。本当にマレーネなのか？」
俳優の一人がやっと声を出す。マレーネはふふっとほほ笑む。
「この世界に私と同じ顔は二人もいらなくてよ」
「本人だ……！　みんな、マレーネが帰ってきたぞー！」
あっという間にわっと囲まれる。
「久しぶりだなぁ。伯林に行ってたんじゃなかったのか？」
「休みをもらったから帰ってきたのよ。みんなも変わってないのね」
「そりゃあもう！　いやぁ、それにしてもまた会えるなんて」
「俺らに黙って行っちゃうんだもんなぁ」
「ごめんなさい。未練なく伯林に行きたかったから」
旧友たちと会えた喜びからか、マレーネの表情がとても柔らかい。
「それより、マレーネ。こちらの方は？」
一人の俳優が神木の存在に気づいて尋ねる。
「あら。彼は私の恋人よ」
「ここここ、恋人?!」
マレーネの爆弾発言にざわめく一同。神木は顔を真っ赤にして否定する。

「ち、違いますよ！　僕は伯林歌劇団で、モギリをしている神木裕一郎です。今回はたまたまお呼ばれしただけで……」
「あら、いいじゃない。減るもんじゃなし」
　面白そうに乗っかってくるマレーネ。ますますどよめく室内。
「へぇー。そうかぁ。ついにマレーネにも恋人が出来たのかぁ！」
「おめでとう！　おい、神木さんとやら。マレーネを幸せにしてやれよ」
「結婚式の余興は任せておいて！」
　劇団員たちが口々に神木に声を掛ける。神木はてんやわんやになるだけだ。
「確かに、マレーネ。表情柔らかくなったもんなぁ」
　一人の俳優が感慨深げにつぶやく。その言葉に神木は反応する。
「えっ？　どういうことですか」
「マレーネは、『氷の微笑』という愛称そのまま、本当に笑顔を見せることは少なかったんだ。俺らは長い付き合いだから彼女の機嫌が良いか悪いかは何となく察することが出来たけど……。プライベートであれだけ表情豊かな彼女を見るのは初めてかもしれないな」
　確かに、伯林華撃団に打ち解けてから彼女の笑う回数は格段に増えている。笑っている彼女はさしずめ聖母といった感じだ。
「だからよ、神木さん！　彼女を泣かせるようなことをしたら、俺らが許さないからな！」
「――心得ておきます」
　と、ここで神木のアイフォトロンが鳴り出す。出てみると、スピカからだった。
「もしもし、副支配人？」
『神木くん？　良かった、今どこにいる？』
「マレーネと紐育のブロードウェイにいますよ」
『今すぐ戻ってきて。大変なことが起こったの！』
「えっ？　大変なことって……？」
『ワケは後で話すから、とにかく、急いで戻ってくること！』
　通信はそこで途切れた。

「隊長」
マレーネが真剣なまなざしで神木を見る。
「事件なのね？」
「あぁ。すまない、もっとゆっくりしたかったと思うんだけど」
「構わないわ。――みんな、急用が出来たから私はこれで戻るわ。クリスマスキャロル、頑張ってね」
口惜しそうにする一同。マレーネはウィンクを一つ投げると、神木と共に紐育を後にした。

パート2　リリィルート

「ゆーいちろー、いる？」
「その声はリリィだな？　いるよ、入っておいで」
　部屋に入ってきたリリィはどこかモジモジしている。
「どうした？　何かあったのか？」
「ゆーいちろー、明日からの冬休みって何か予定ある？」
「予定？　いや、特にまだ決めてないけど……」
「ぼ、ボク、ゆーいちろーと一緒に伯林動物園に行きたいんだけど……」
「伯林動物園？　そういえば、そんな施設があるって聞いたことあるなぁ」
「ボク、動物園なんて生まれてこの方行ったことなくて……。合唱団の子たちの話を聞いて、ずっと羨ましいなと思っていたんだ……だから……」
「そういうことなら、お安い御用さ。じゃあ、明日朝１０時にロビーに集合してから行こう」
「うん！　ありがとう！」
　リリィは満面の笑みを浮かべてスキップしながら部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊

　翌日。ロビーに向かうと、すでにリリィが玄関先で待っていた。
「やぁ、リリィ。待たせたかな？」
「ううん。ボクも今来たところ」
　リリィは、海軍の水兵のような可愛らしい外出用の服に着替えている。
「ねぇ、ゆーいちろー。似合ってるかな」
「うん。よく似合っているよ」
「へへ。良かったぁ」
　そう言って満面の笑みを浮かべるリリィ。

「さぁ、行こう。そろそろ電車が来る時間だ」
神木は、リリィの手を握って駅へと向かった。
伯林動物園は、伯林動物園駅から歩いて一分のところにあるヨーロッパ最大の動物園だ。３４ヘクタールを誇る園内には１８，０００頭を超える動物たちがいる。
「動物園の隣には、水族館もあるらしい。一通り見回ったらそっちにも行ってみるか」
「うん！」
動物園内は大勢の観光客でいっぱいだ。リリィと同年代の子供たちも大勢いる。
「ほら、ゆーいちろー！　こっちこっち！」
初めての動物園に興奮気味のリリィは、あちこちの動物ゾーンを行ったり来たりしている。
「ハハハ。動物さんは逃げないから、そんなに急がなくてもいいよ」
笑いながらリリィの後を追う神木。キリンのゾーンの前まで来た時、『餌やり体験実施中』の看板が目に入った。
「ほら、リリィ。キリンの餌やり体験だってさ。せっかくだし、やってみたら？」
「えぇ、でも、怖くないかな……」
「大丈夫。僕も一緒にいるから。それに、こんな経験めったに出来ないぞ」
「う、うん。分かった。やってみるよ」
飼育員からニンジンをもらい、神木の手を握りながら恐々キリンに差し出すリリィ。キリンはしばらくニンジンをじろじろ見ていたが、小さく口を開けてかぶりつくと、そのまま旨そうに食べ始めた。
「な？　怖くなかっただろ？」
神木がリリィに優しく問いかける。
「うん！　ゆーいちろーがいてくれたから、ちっとも怖くなかった！」
リリィは飛びきりの笑顔で答えた。
昼時になり、二人は園内のレストランで昼食を取ることにした。
「何でも好きなものを注文していいからね」

「じゃあ、ボク、この『ステーキ』ってやつ食べてみたい！」
「ハハハ。リリィは育ち盛りだから、栄養あるもんはどんどん食べないとな。じゃあ、僕も同じのにしよう」
運ばれてきたステーキを平らげながら、午後の予定を確認する。
「――じゃあ、午後はさっき言った通り水族館に行くでいいな？」
「うん！　ボク、水族館も行くの初めてだから！」
「よし。じゃあ、早速――」
と、ここで神木のアイフォトロンが突然鳴り出した。慌てて出ると、スピカの声が流れてきた。
『神木くん？　良かった、今どこにいる？』
「リリィと一緒に、伯林動物園にいます」
『じゃあ、近くね。今すぐ戻ってきて。大変なことが起こったの』
「えっ？　大変なことって……？」
『ワケは後で話すから、とにかく、急いで戻ってくること！』
通信はそこで途切れた。
「ゆーいちろー……」
リリィが不安げな顔をする。
「すまない、リリィ。水族館はまた今度だ。急いで劇場に戻るぞ！」
「うん！」
リリィはすぐに切り替えて、神木と共に動物園を後にした。

パート2　秋奈ルート

「あの、私だけど。隊長、いる？」
「秋奈くん？　どうしたの、こんな時間に」
「入ってもいいかしら？」
「あ、あぁ。どうぞ。カギは開いてるよ」
　部屋に入ってきた秋奈はどこか表情がぎこちない。
「それで、一体どうしたんだい？」
「隊長。明日からの冬休み、ヒマ？」
「――え？　まぁ、特に予定は立ててないから、ヒマではあるけど」
「じゃあさ、私と一緒に東京に帰らない？」
「えっ？　東京？『クライナ・トーキョー』じゃなくて、本当の東京？」
「そうよ。私のおばあ様が、茶道の家元で日本橋に教室を構えているの。パパは駐在大使だし、毎年私だけ日本に帰省してるんだけど、どうせなら隊長もどうかなと思って」
「そ、そりゃあ、日本に帰れるのは願ったりだけど、ご迷惑じゃないかな？　僕なんかが行って」
「あら。おばあ様は話し相手になれるなら誰でも大歓迎よ」
「そうだな……。久しぶりに和食も食べたいし、じゃあ、お言葉に甘えることにしよう」
「やった！　じゃあ、明日朝八時にロビーに集合ね！」
　秋奈は笑顔になりながら部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

　翌日。ロビーに向かうと、すでに秋奈が新調したピンクのワンピースを着て待っていた。
「ごめん。待たせたかな？」
「ぜーんぜん。私も今来たとこ。飛行機は１０時発の羽田着を予約しておいたから。――それよりどう？　私の服」

「すごくよく似合っているよ。やっぱり秋奈くんは、活動的な服が似合うよ」
「スピカさんに見繕ってもらったの。奮発したかいがあったわ」
そう言って秋奈は照れ臭そうに笑う。神木もつられて笑いながら
「さぁ、行こうか」と声を掛けた。
空港は大勢の客でにぎわっていた。二人は搭乗時刻になると、入場の列に並んで順番に飛行機に乗り込む。
「実は、この格好で日本に帰るのは初めてなのよ」
席に座るや否や、秋奈が神木に言う。
「今までずっと着物だったから。もしかしたらおばあ様、泡食って倒れちゃうかも」
「そうか……。でも大丈夫さ。僕が付いているんだから」
「ふふっ。ちゃんと責任取ってよね、隊長」
「お、おい。その言い方じゃあ違う意味に聞こえるって」
慌てる神木をよそに、秋奈はアイマスクを被ってしまった。
飛行機はそのまま定刻に伯林を発ち、18時間近く掛けて東京に着いた。東京は昼の12時になったばかりだ。
「ちょうどお昼時だな。腹も減ってきたし、何か食べようか」
「なら、銀座にある煉瓦亭のカツレツを食べたいな。久しく食べていないから」
「煉瓦亭か。――よし、行こう!」
二人は蒸気タクシーに乗り込むと、銀座の煉瓦亭まで向かう。昼時なので店内は混んでいたが、運よく座ることが出来た。
「えぇっと、カツレツを二人分。あと、お冷を貰えるかな?」
給仕に注文をして、本棚に立てかけてあった雑誌を手に取る。
「ふぅむ……。お、帝国歌劇団のことが載ってるよ。えぇっと、『来年正月公演を控える帝国歌劇団。年始めは、日本最古の女王・卑弥呼の伝説を大胆に脚色しお届けする』か……。面白そうだけど、さすがに舞台を見る余裕はないなぁ」
「隊長は、帝国歌劇団の舞台を見たことあるの?」
「一応ね。まだ海軍に入る前に、帝国歌劇団の公演『奇跡の鐘』を家族

と見に行ったんだ。懐かしいなぁ」
遠い目をする神木。
カツレツが届き、夢中になって食べる二人。長旅のフライトが、カツの旨味で消えてゆく。
「うーん。美味い！　やっぱり日本食は日本で食べるのが一番だなぁ！」
「長い事伯林に住んでいるとあっちの味に慣れるものだけど、やっぱり日本の料理が一番ね」
あっという間に平らげて、二人は店を後にした。食後の運動も兼ねて、日本橋まで歩いていくことにする。
秋奈の祖母の住む家は、日本橋のど真ん中に構えていた。その面積の広さは、由緒正しい家柄であることを伺わせる。表札には、『若林茶道教室』の文字が掲げてある。
「こ、こんな豪邸、入るの初めてだよ」
「大丈夫よ。こんなの見かけ倒しだから」
二人は門を潜り抜けて、中庭に出る。銀髪で若々しい着物姿の女性がちょうど縁側でお茶をたてているところだった。
「おばあ様、お久しぶりです。秋奈です」
秋奈の祖母は、二人の方に目をやる。祖母は目を細めて「まぁ、秋奈さん」と反応する。
「帰っていらしたのね。ちょうど今お茶が出来たところですよ。……あら、こちらは？」
「どうも。伯林華撃団隊長の、帝国海軍少尉、神木裕一郎です。秋奈さんにお呼ばれして同行してきました」
頭を掻きながら挨拶をする。
「あらあら、遠い所をどうも。わたくし、秋奈の祖母であります、若林奈津美と申します。ささ、どうぞこちらに」
奈津美は二人を縁側に座らせると、お茶と茶菓子を差し出す。
「何もありませんで、恐縮ですが」
「いえいえ。頂きます。――うーん、美味い！」
「京都から取り寄せた茶菓子でございます」

「あの、おばあ様。私……」
秋奈が口を開きかけるが、奈津美が「秋奈さん」と静止する。
「あなたは、あなたらしく生きればいいのですよ。他人にとやかく言われて生きる人生なんてつまらないですよ」
「じゃ、じゃあ、おばあ様は……」
奈津美は立ち上がると、「それじゃ、ごゆっくり」とだけ言って奥に下がっていった。
「――奈津美さんは、気づいていたんだね。本当の秋奈くんに」
神木がそっと声を掛ける。「自分の理解者は、案外近い所にいたりするもんなんだよ」
「全く気付かなかった……。おばあ様、茶道を教えている時の厳しいイメージが強かったから……」
秋奈はしばし呆然としていたが、やがて立ち上がると「私、ちょっと散歩してきます」と言った。
「散歩？　僕もついていこうか？」
「ううん、いいの。ちょっと、外の風にあたりにいくだけだから」
「そう……いってらっしゃい」
走り去っていく秋奈を見送る神木。
「――あの子は、母親によく似ています」
いつの間にか、背後に奈津美が立っていた。
「母親って、早くに亡くなったという秋奈くんのお母さんのことですか？」
「――娘は病気がちということを除けば、私に似てとても快活な子でした。よく言えばお転婆、悪く言えば女の子らしくないといったところでしょうか」
奈津美は神木の隣に座る。
「――若林の女は、代々自立した女性であることが特徴です。当然、秋奈にも若林の血が受け継がれているはず。私はそう信じて疑いませんでした」
「でも、それなら早く本人に言ってあげた方が……」
「私が言ってあげたところで、彼女は父親と板挟みになってしまいま

す。彼女自身が自分の意志で自立しなければいけないのです」
「なるほど……」
「神木さん」
　神木の眼を見る奈津美。
「秋奈を……孫を、どうか守ってやってください。娘を亡くしてから、私の生きがいは秋奈だけなのです。今はお互い離れて暮らしていますが、あの子のことを想うだけで私は幸せなのです。どうか、孫を守っていただけませんでしょうか？」
「――分かりました。秋奈くんは、僕が必ず守ります」
　神木は奈津美の目を真っ直ぐ見据えて、力強く言った。
　と、その時。神木のアイフォトロンが鳴り出した。急いで応答する。
「も、もしもし？」
『神木くん？　スピカだけど、今どこにいる？』
「副司令？　えぇっと、今秋奈くんと日本に帰っていますけど……」
『すぐにこっちに戻ってきて！　大変なことが起こったの！』
「え、大変な事って……!?」
『ワケはこっちで話すから、とにかく今すぐ戻ってきて！』
「わ、分かりました！」
　アイフォトロンを切ると、散歩に出ていた秋奈が「隊長！」と言いながら戻ってきた。
「外から、アイフォトロンの音が鳴ったのを聞いたんだけど、何かあったの？」
「副司令からだ。伯林で何か起きているらしい。すぐに戻るぞ！」
「了解！」
　秋奈は奈津美に向き直ると「おばあ様、すみません」と深々と頭を下げた。
「秋奈さん、いってらっしゃい。向こうで、あなたの助けを待つ人がいるのでしょう？」
「……はい！」
「ひと段落したら、またこっちにいらっしゃい。飛びきりの茶葉を用

意してまってますよ」
「はい！」
秋奈は元気よく返事をして、神木と共に若林邸を後にした。

パート2　ナターシャルート

「あたしだけど、隊長。いるかい？」
「ナターシャか。どうぞ、カギは開いているから」
　部屋に入ってきたナターシャは、珍しく緊張しているようだった。
「どうしたんだい、ナターシャ？」
「隊長。その、明日からの冬休み、もう予定入っているかい？」
「えっ？　いや、まだだけど？」
「な、ならさ。あたしと一緒に巴里に行かないか？」
「えっ？　巴里?!」
　突然の話に面食らう神木。
「い、いや。実は、傭兵時代の友達と向こうで会う約束をしているんだけど、一人で行くのも味気ないし、どうせなら隊長を誘おうと思って……」
「はぁ。そりゃ、うれしいけど、お邪魔にならないかな？」
「とんでもない。あたしの友達は皆良い奴らばかりだからな。隊長のことも喜んで仲間に入れてくれるさ」
「ふぅん。そうだな、せっかくのお誘いだし、お言葉に甘えて一緒に行くことにしようかな」
「やった！　じゃあ、明日朝7時にロビーに集合な！　遅れるんじゃねーぞ！」
「分かってるよ」
　ナターシャは喜びの表情を浮かべながら、神木の部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

　翌日。待ち合わせ時間きっかりに向かうと、アーミースタイルの服に身を包んだナターシャがすでに待っていた。
「やぁ、ナターシャ。待たせたかい？」
「いんや。あたしも今来たとこだよ。おっと、隊長。一張羅かい？」
「モギリ服のままじゃ、失礼だからね」

「ファッションに気を遣う男はモテるよ～。あたしは、アーミースタイルなら何でもオッケーだけど」
「ハハハ。でもその服だって君にぴったりだよ」
「ありがとよ。さ、行こうぜ」
　伯林から巴里まではそう遠くもないため、列車で向かうことにする。駅から巴里行きの急行に乗り込み、ミュンヘンで一度乗り換える。そこで昼食を取った後、再び列車に乗り込んで巴里まで向かう。現地に着いた時は、１５時を過ぎた頃だった。
「やっと着いたなぁ。とはいえ、もうそろそろ日も暮れそうだな」
　伸びをしながら神木が呟く。「その、友達とはいつ、どこで会う約束なんだい？」
「明日のお昼に、テルトル広場で待ち合わせして、そこからレストランで食事する予定さ」
「じゃあ、今日はもうホテルに行って羽を休めることにしよう」
「了解！　――って、プライベートなのについ言っちゃうんだよなぁ」
　そんなことを言いながら、二人は宿泊予定のホテルへと向かった。

＊＊＊＊＊＊＊

　翌日。いつもより遅めに起きた神木は、ダイニングで朝食を取りながら巴里の風景を見ていた。芸術の都、巴里。多くの芸術家たちが暮らしているという。
「お、隊長」
　先に起きていたナターシャが声を掛けてくる。
「やぁ、ナターシャ。朝のランニングかい？」
「まぁね。これだけは日課だからね。それより、今日の予定を言っておくよ」
　神木の向かいの席に座るナターシャ。
「１１時３０分ぐらいに、テルトル広場に行って、待ち合わせしている友達と集合して、その後レストランで食事っていうプランだから」
「友達っていうのは、何人ぐらい来るの？」

「うーん……」
考え込むナターシャ。「ま、待ち合わせ場所に行けば分かるよ！」
「？」
その後、時間までホテルの周りをぶらぶら散歩したり休息を取ったりして、１１時３０分に待ち合わせ場所のテルトル広場へと向かった。
広場は大勢の旅行客や画家たちで埋め尽くされていたが、肝心のナターシャの友達らしき人の姿は見受けられない。
「友達っていうのは、どこにいるんだい？」
「うーん。おかしいなぁ。ちょっと待ってて」
ナターシャは、とある古本屋の中に入っていって、店の電話を借りる。どこかに電話を掛けて、しばし通話していたが、やがて首を振ると肩をすくめて戻ってきた。
「外人部隊の事務所に問い合わせたら、どうやら緊急の出動が今朝あったらしいわ。みんな持ち場に行っているみたい」
「なんだ。じゃあ、ナターシャの友達には会えないってことか」
「そーゆーことね。で、これからどうする？」
「うーん。このまま帰るのもあれだし、二人で巴里観光でもしようじゃないか」
「賛成！」
二人は急遽プランを変更し、巴里の観光名所を巡ることにする。エッフェル塔・凱旋門・ノートルダム大聖堂……。巴里の歴史を感じさせる建造物だ。
「昔、この巴里にも怪物が現れて、帝都から出向していた大神司令率いる巴里華撃団が解決に導いたそうだ」
エッフェル塔から巴里の街を見下ろしながら、神木が言う。
「凄いよな。帝都と巴里、二つの都市を魔の手から救ったんだ」
「隊長も頑張っているよ。あの四人組を倒したじゃないか」
ナターシャが元気づけるように言う。
「それは、僕だけじゃなく君たちの協力があってこそだ。君たちがいなかったら、僕はただのモギリだよ」

「らしくねぇなぁ。自信持てよ。図々しいくらいじゃないとやっていけないぞ」
「そうだな。……そう言えば、ナターシャは巴里で生活していたのに、巴里華撃団にはスカウトされなかったのかい？」
「スピカさんがあたしをスカウトする際、念のため筋は通したらしい。けど、それだけさ。特に何も言われずに伯林に来ることが出来たってわけ」
「ふぅん。そうだったのか」
　そんな話をしているうちに、次第に空腹になってっ来た。二人は市内のフレンチレストランで食事を取ることにする。
「何だかんだ言って、二人だけで回るのも悪くなかったな」
　席に座っておしぼりを拭きながら神木が呟く。
「そうね。来れなくなった友達に感謝すべきかもね」
「おいおい」
「ふふっ。冗談よ。でも半分ホンキ」
「な、ナターシャ……」
　照れる神木だったが、突如ポケットの中のアイフォトロンが鳴り出す。慌てて出ると、相手はスピカだった。
『もしもし？　神木くん？　今どこにいるの？』
「副司令！　今ですか？　ナターシャと一緒に巴里に来ていますけど……」
『すぐに劇場に戻ってきて！　大変なことが起こったの！』
「大変な事？　一体、何が起こったというんですか！」
『ここでは上手く説明できないわ！　とにかく、一刻も早く戻ってきて！』
　スピカはそれだけ言うと通話を切ってしまった。
「隊長」
　ナターシャが腰を浮かせながら神木の目を見据える。
「伯林で何か問題が起きたらしい。すぐに劇場に戻るぞ！」
「了解！」
　二人は給仕を押しのけてレストランを後にした。

パート2　スピカルート

「神木くん、いる？　スピカです」
「副司令ですか。ちょっと待ってください」
　神木は起き上がってドアを開ける。先ほどと変わらぬ恰好でスピカが立っていた。
「どうしたんですか、一体？」
「うん。ちょっとね。とりあえず、入ってもいいかしら？」
「あぁ、どうぞ」
　スピカを部屋の中に入れる。スピカは部屋の中にあった椅子に座る。
「――それで、一体……？」
「神木くん。明日からの冬休み、もう予定たてた？」
「えっ？　あ、いや。特にまだですけど……」
「そう……。実は、友人から映画のチケットを二枚貰ったのよ。『M』っていうタイトルの映画なんだけどね、それが中々面白いって評判だから、実際見てもし可能ならうちでも脚色して公演しようかなって。でも、内容が結構暗いという噂だから、観客側の視点から神木くんにフラットな意見を言ってもらいたくて。どう？」
「映画……活動写真のことですか。僕でよければ、喜んで」
「そう？　じゃあ、明日朝9時にロビーに集合ね」
「了解しました」
　スピカはそれだけ言うと、立ち上がって部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

　翌日。神木が約束の時間五分前にロビーに向かうと、そのすぐ後にスピカがやってきた。モギリ服のままの神木に対し、スピカは高級なドレスを着ている。
「お待たせ……って、神木くん？　映画館行くのにモギリ服は無いんじゃない？」

「そ、そうですか？　一応、業務の一環かと思いまして……」
「もう……。まぁ、いいわ。次からは気を付けてね」
「はい」
　年の瀬の伯林は、さすがに普段の活気は落ち着いているように見える。歩道を歩きながら神木はスピカと会話する。
「副司令は、よく活動写真は見に行かれるんですか？」
「ちょっと。一応今はプライベートなんだから、副司令なんて堅苦しい名前で呼ばないの」
「は、はぁ……。じゃあ、スピカ、さん？」
「別にさん付けしなくてもいいのに……。神木くんて案外ウブなところがあるのよね」
「す、すみません……」
　頭を掻きながら照れた笑いをとる。それを見て呆れながらも笑うスピカ。
　劇場から少し歩いた場所にある映画館は、年末とはいえそれなりに利用客がいる。映画が誕生して３０年近く経ち、舞台を駆逐するのではないかと言われてきたが、今のところ映画と演劇は上手く共存しあっている。
　二人はチケットを買うと、そのままホールへと向かう。隣同士に座って、作品を鑑賞する。
　内容は、実在の殺人鬼をモデルにしたサイコスリラー。警察と犯人の攻防や、主演のピーター・ローレの演技が見ものだった。
「だけど、うちで上演する題材ではないわね」
　見終わって開口一番、スピカが言った。
「あまりに内容が残酷だし、残念だけどこれは映画だけで楽しむ内容ね」
「そうですね。自分も、あまり舞台向きではない題材だと思います」神木も賛同する。
「ま、それだけでも分かれば十分だわ。ロクに内容も確認せず上演した日にはクビが飛ぶわよ」
　おどけながら肩をすくめたスピカは、「ねぇ、これから昼食でもどう

?」と誘ってきた。
「せっかくなんだし、私の行きつけのレストランを紹介するわよ」
「スピカさんのオススメですか。では、お言葉に甘えまして……」
レストランは、いかにも年季が入って格式が高そうな外観だった。中に入ると、ウェイターがスピカの顔を見るなり「いらっしゃいませ、スピカ様」と恭しく挨拶をしてきた。
「今日は私のボーイフレンドも一緒だから、よろしくね」
「かしこまりました」
ウェイターが去った後に、神木が「ちょっと、副司令！」とスピカの脇を小突く。
「スピカさん、でしょ？」
「スピカさん。ボーイフレンドって……」
「あら、いいじゃない。まんざらでもないわよ」
「……えっ？」
スピカはそれだけ言って席に座る。仕方なく神木もその向かいに着席する。
食事はスピカに全てお任せして、神木はソワソワとあたりを見まわす。
「いやぁ、何と言うか、こういう雰囲気は初めてで、何とも……」
「緊張しなくていいのよぉ。こういうのは、楽しむものよ」
「は、はぁ」
徐々に料理が運ばれ出した時、スピカのアイフォトロンが突然鳴り出した。
「あら、何かしら？　ちょっと待ってて」
スピカは一旦外に出てからしばし通話する。だが、戻ってきた彼女の表情は険しいものだった。
「どうかしましたか？」神木も思わず尋ねる。
「今、つぼみから連絡があって。とにかく、すぐに劇場に戻りましょう。ワケは後で話すわ。良いわね、神木くん？」
「はい！」
二人は急いでレストランから出ると、蒸気タクシーを拾って劇場ま

で向かった。

パート3

伯林華撃団作戦指令室に、スピカ・空組・四季組、そして神木の全メンバーが集った。

「それで、副司令。一体、何があったのですか？」

神木が身を乗り出して尋ねる。

「まずは、これを見てほしいわ」

そう言って、スピカはモニターを映す。映し出されたのは、グルーネヴァント塔の麓に大きな敵蒸気機械と一人の人間が立っている様子だ。

「拡大するわよ」

スピカの合図でつぼみが人間を拡大する。そこに映っていたのは――。

「よ、ヨハン支配人?!」

立っていたのは他でもない、伯林華撃団司令にして、伯林歌劇団支配人のヨハンだった。

「ど、どうして支配人が……?!」

困惑する神木をよそに、ヨハンは映像越しに口をパクパクさせている。何か話しかけているようだ。アンジュがスピーカーをオンにする。

『やぁやぁ、伯林華撃団の諸君。いかがお過ごしかな？』

ヨハンの声はいつもの気の抜けたトーンではなく、どこか邪悪な感じがする。

「支配人、これは一体どういうことですか！　なぜ支配人が敵蒸気機械なんかと……」

神木が懸命に語り掛ける。

『その声は神木くんかな？　デートの邪魔をして悪かった。だが、こっちも機は熟したのでね』

「機？」

『我が野望、伯林征服を果たす時が、ついに来たのだ！　私はこの日を今か今かと待ち望んでいたのだ！　――そのために、我が同胞どもは

貴様らの犠牲になったがね』
「何ですって……!?　てことは……」
「最初から敵だったのよ、あいつは」
　スピカが口を挟む。
「上手いことやったわね。まさか伯林華撃団創設に一番協力してくれた人物が、実は敵の親玉とは誰も思わないでしょうし」
『その通りだ』
　得意げな顔をするヨハン。
「劇場にあまり居着かなかったのも、伯林征服のために準備していた、ということだったのね」
『そうだ！　あんなオンボロ劇場で時間を潰す暇など私には無いからな！』
「何ィ！」
　神木は歯ぎしりをしてスピカに向き合う。
「副司令。すぐに出撃しましょう！　あんな奴速攻で叩けば……」
「それが出来ないのよ」悲しそうに目を伏せるスピカ。
「出来ない？　一体どうして……」
「私達のアイゼンクライト改は、全てあいつによって破壊されたのよ」
「何ですって!?」
　神木は慌てて地下格納庫へと向かう。そこにあったのは、見るも無残な姿となったアイゼンクライト改だった。
「そ、そんな……そんな馬鹿な……」
　愕然としてヨロヨロと指令室に戻ってくる神木。
「アイゼンクライト改が無きゃ、私達は無力。……悔しいけど、あいつの方が一枚上手だったってことね」
　スピカが絞り出すように声を出す。ニーナたちも皆黙ってうつむく。
『ハーハッハッハ！　伯林が崩壊していく様を、そこでじっくり見ていくがいい！』
　ヨハンの高笑いがスピーカー越しに響き渡る。皆、言葉も出ず黙ったままだ。

「――ちょっと待って」

沈黙を破ったのは、リンだった。

パート4

「何とか、何とかなるかもしれません！」
「リンちゃん、何とかなるって、アイゼンクライト直せるの?!」神木が驚いたような声を出す。
「無理よ。アイゼンクライトは動力源である霊子回路がやられているから、工場から新たな回路を持ってこないと……」
スピカが無下に否定する。それに対しリンが手を振って、
「違います、違います。すっかり忘れてたんですけど……ちょっと来てください！」
そう言うと、リンは全員を連れだって地下格納庫のさらに地下、アイゼンクライト改を運ぶための飛行船や弾丸列車の停車場へと連れ立った。
「一体、ここに何が……?!」
全員は一様に言葉を失う。目の前に現れたのは、新品のボディと流線形のイカしたデザインのアイゼンクライト6機だった。
「こ、これは……一体……」
「アイゼンクライト改を新たに設計し直して、さらに実戦的に改良した、その名も『アイゼンクライトⅡ』です！　いやぁ、実は一週間前にはここに運ばれて来てたんですけど、ケロッと忘れてて」
リンはそう言うとペロッと舌を出す。スピカが呆れた声を出す。
「新型を作るとは聞いていたけど、もう出来ていたなんて……。ていうか、せめて私には報告すべきだったんじゃない?」
「だってぇー。その時もう腹ペコで、ご飯のことしか考えてなかったんですー」
「もう、リンったら忘れっぽいんだから」
「こんな大掛かりなもの、普通忘れるはずがないんだけど……」
つぼみとアンジュも呆れながら呟く。
「リンくん。この『アイゼンクライトⅡ』、すぐにでも起動できるか?」
神木が新品のボディに手を触れながら尋ねる。
「もっちろん！　最後に整備したのは私ですから、すぐにでも使えま

すよ！　皆さんの機体もちゃんとありますからね！」
「よし、これで形勢逆転だ！」
　神木がガッツポーズを取る。
「今回は、リンのおっちょこちょいに救われたわね……。神木くん」
　スピカが腕を組みながら声を掛ける。
「必ず、あの馬鹿を仕留めてくるのよ！」
「分かりました！」
「神木さーん！」
　先にアイゼンクライトⅡに乗り込んだニーナたちが声を上げる。
「凄いですよ、この機体。改よりも凄く動きやすいです！」
「あぁ、しかも火力も上がってるみたいだしなぁ！」
「デザインもエレガントで美しいわ」
「これなら、思う存分戦えます！」
「ゆーいちろー、やっちゃえー！」
「さぁ、神木くん！　出撃命令を！」スピカが声を張り上げる。
「はい！　伯林華撃団・四季組、出撃！　目標、敵の親玉、ヨハンの撃破！」
「了解！」

パート5

ヨハンはしばらく外で煙草を吸っていたが、やがて敵蒸気機械『フェアギスマインニヒト』に乗り込むと、機体を起動させた。
「奴らからの通信も途絶えたか……。私の野望を果たすために、邪魔をされては困るからな。霊子回路を破壊したんだ。奴らに私を止めることは不可能――」
言ってる途中で、空中から次々と砲撃を受ける。
「な、何だ?!」
見上げると、見たことのないアイゼンクライトが空を飛んでいる。
「伯林華撃団、参上！」
「な、何ィー！　馬鹿な、アイゼンクライトは、確かにこの私が……」
「切り札は最後まで取っておくものさ。さぁ、ヨハン。これで互角だ。覚悟しろ！」
「ふふっ。どうやら、少々貴様らを甘く見過ぎていたようだな。だが、切り札ならこちらにもある！」
言うや否や、『フェアギスマインニヒト』が巨大化していき、怪獣ほどの大きさとなった。
「ハッハッハ。どうだ！　この巨大化した『フェアギスマインニヒト』にかかれば、どんな建物も破壊することが出来るぞ！　貴様らのアイゼンクライトだって、ひとたまりもないぞ！」
「分かっていないな。これまで何度も危機を乗り越えた伯林華撃団に、死角など無いんだ！　みんな、行くぞ！」
「了解！」
神木の合図で、五人は一斉にヨハンにとびかかる。
「すげぇ！　乗った時も思ったけどめちゃくちゃ使いやすいぜ、これ！」
ナターシャが感嘆の声を上げる。
「本当！　これなら、あのデカブツでも倒せるわよ！」秋奈。
「みんな。油断は禁物よ。火力なら向こうだって負けていないんですし」マレーネ。

「だいじょーぶ！　ボクたちが力を合わせれば、絶対負けないよ！ね、ニーナ！」リリィ。
「えぇ。私達は、絶対に負けません！」
ニーナはそう言うと、背後に回り込んで一斉射撃を行う。
「グハァ！　後ろから攻撃するとは、卑怯だぞ！」
ヨハンが情けない声を出す。
『みんな？　聞こえる？』
スピカから皆に通信が入る。
「はい、聞こえます。どうしましたか？」
『空組が、ヨハンの敵蒸気機械を分析したの。奴の弱点は足よ。足を重点的に攻撃して！』
「了解しました！」
神木の合図で、今度は一斉に足を集中攻撃する。
「こ、こら！　こいつはガタイが良いから足場が脆いんだ！　やめ、やめないか！」
ヨハンの言うことなど耳も貸さず、皆一心不乱に足を撃つ。しばらくすると、足の付け根から白い煙が立ち始めた。
「今だ！」
神木は霊力を最大火力までつぎ込むと、そのまま一気に強烈な砲撃をする。大ダメージを食らったヨハンの敵蒸気機械はバランスを失い、そのまま倒れる。次の瞬間、大爆発が『フェアギスマインニヒト』を包み込んだ。
「やったぁ！　これで完全に敵を倒したぞ！」
喜びの声を上げる一同。だが、それとは裏腹に徐々に空が暗くなってくる。
「あれぇ？　今日、雨降るって予想だったっけ？」
空一面に雷が鳴り響き始める。と、思いきや燃え盛る『フェアギスマインニヒト』の中から無傷のヨハンの体が宙に浮かんできた。
「な、何だよ?!　これは一体！」
ヨハンの浮上が止まるや否や、突然閃光が彼の体内を通過する。その刹那、ヨハンの身体が変化していき、王冠を被り、中世の騎士の服

をまとった白髪の髭を生やした老人の姿となった。
老人は瞑っていた目をゆっくり開くと、その容姿からは想像できないほどの大きな声でこう宣言した。

「我は……カール大帝なり！　この堕落しきった国を救うべく、神聖ローマ帝国の復活を誓う！　我に逆らうものは一人残らず叩き切る！」

言い終わると、天空から見たことのない幾何学模様の建物が降ってきて、カール大帝はその中へと消えていった。

Ｅｐ．８　華撃団は平和を愛す

パート１

伯林華撃団・四季組は、再び作戦指令室へと戻っていた。モニターに映し出されているのは、例のカール大帝のアジトである。
「まさか、ヨハンの本当の正体が、カール大帝だったとわね……」
爪を噛むスピカ。「厄介だわ。カール大帝が相手じゃ、何をしてくるか分からない……」
「副司令。カール大帝というのは……？」神木が質問をする。
「神聖ローマ帝国初代皇帝。――言ってしまえば、現在のドイツの基礎を築き上げた人物よ。国王でありながら戦に明け暮れ、４６年間の治世の間に５３回もの軍事遠征を行っているの。戦いに関して言えば、彼の方が一枚上手ね」
「何とか、カール大帝を止める手は無いんですか？」
「アジトに乗り込むまでは普段と同じだけど、その後が問題よね。６対１で私達に果たして勝機があるのか……」
「そんな……そんな弱気でどうするんですか！」
「相手は西欧を統一した男よ。生半可な気持ちでは立ち向かえないわ」語気を強めるスピカ。彼女自身も、対戦したことのない相手に対応を苦慮しているようだ。
「なぁ、よく分かんねーけど」
ナターシャが口を挟む。
「そもそも、１２００年前の偉人がどうして現在に蘇ったんだ？　神聖ローマ帝国の復活とか、奴は言っていたけど……」
「考えられる仮説としては」スピカが言う。「彼の魂は成仏していなくて、ずっと他人として現在まで脈々と生き続けた。それがヨハンね。ところが、あなたたちがヨハンを倒したおかげで本体が出てきて、この世に再び現れた――」
「じゃあ、あのアジトは？」
「カール大帝の霊力が呼び起こした、さしずめ『バベルの塔』と言った

ところかしら」
髪をかき上げて、ため息をつく。
「いずれにせよ、このまま野放しにしておけばドイツは確実に崩壊するわ。何とか有効な手立てを考えないと……」
「あの、カール大帝は、神聖ローマ帝国の復活を目的に蘇ったのですよね？」
秋奈が神木に問う。
「あぁ。確か、『堕落しきったこの国を救う』とか言っていたな」
「カール大帝には、今のドイツが生きていた時代と比べて堕落したと映っているんですよね。だったら、私達がカール大帝に『ドイツは堕落していない』ということをメッセージとして伝えることが出来れば、目を覚ましてくれるんじゃないでしょうか？」
「なるほど。僕らの熱い思いを彼にぶつけるのか！」
「秋奈、そいつはグッドアイデアだぞ。押してダメなら、引いてみろだ！」ナターシャが賛同の声を上げる。
「ちょっと根性論ではあるけど、力で差があるなら理詰めで攻めるしかないわね」マレーネも賛成する。
「ボクもだーいさんせい！」リリィも無邪気に声を上げる。
「神木さん！　行きましょう！　私達の故郷を守るんです！」ニーナが声を張り上げる。
「副司令！」
スピカは黙って腕を組んでいたが、「わかったわ」と呟くと
「良いこと？　この戦いはハードになると思う。けど、必ず全員、生きて帰還すること！　――さぁ、神木くん、出撃命令を！」
「はい！　伯林華撃団・四季組、出撃せよ！　これが、最後の戦いだ！
全員、生きて未来を作るぞ！」
「了解!!!!」

パート2

カール大帝のアジトは依然伯林の上空に浮遊していた。相変わらず天気は悪く、雷が鳴っている。

神木たちが乗ったアイゼンクライトⅡは、無事にアジトまで乗り込むことに成功した。

「こちら、神木。無事、アジトに侵入しました」

『こちら、スピカ。了解。くれぐれも気を付けて』

「こちら、神木。了解」

通信を切って、ゆっくりと中に入っていく。中は薄暗く、視界が悪い。

「おそらく、カールは塔のてっぺんにいるだろう。みんな、気を引き締めていくぞ！」

「了解！」

と、その時だった。突然背後から差し込んでいた光がすっと消えた。

「何だ?!」

振替えると、無数のゴーレムの大群がウジャウジャいた。

「ご、ゴーレム!? まだ残っていたのか！」

「西欧を統べた国王に、ゴーレムを支配下にいれることはピース・オブ・ケイクというわけね」

マレーネが呟く。ナターシャが歯ぎしりする。

「クソッ。隊長、ここは私が食い止める！ 隊長たちは早く先に行くんだ！」

「いかん。ナターシャ！ こんな大群に一人で立ち向かうって言うのか！」

「隊長が倒すのはカールだろ?! こんな雑魚相手に足止めされてる場合じゃないだろ！ ――大丈夫。こいつらさっさと片づけたら、すぐに追いついてやんよ」

「ナターシャ……分かった。だけど、無茶だけはするなよ！」

神木はその場をナターシャに任せると、急いで上の階へと向かっ

た。

＊＊＊＊＊＊＊

上の階に上がると、中世の鎧や剣など、現在では非常に価値の高い調度品が所狭しと置かれているフロアだった。

「これら、全部カールの私物なのか？」

「パッと見ただけで、一国分の国家予算ぐらいの値打ちはありそうね」マレーネが分析する。

「でもゆーいちろー、何だかどれも、現実感の無い感じがするよ」

「リリィもそう思う？　何だか、どれも実態として存在しなさそうなのよねぇ」秋奈が同調する。

「ここの階には何もなさそうだな。よし、奥へ進もう」

神木がそう言った瞬間、地響きがしたかと思うと調度品が皆ゴーレムへと変化した。

「クソッ。罠ってことか！」

「隊長！　ここは、私とリリィで食い止めます！　皆さんは、早く上へ！」秋奈が叫ぶ。

「いかん。秋奈くん！」

「ゆーいちろー、大丈夫だよ！　ボクたちだけで、十分さ！」

「リリィ！」

「隊長。ここは二人に任せて先を急いだほうが良いわ」マレーネが進言する。

神木はしばし歯ぎしりをするが、「分かった」と声を絞り出して言うと、

「無茶だけはするなよ！　やばくなったら、急いで上がってくるんだ！」

とだけ残して階段を上がっていった。

＊＊＊＊＊＊＊

さらに上の階に進むと、調度品は何もない代わりにカール大帝の肖像画が多数飾られている部屋に出た。
「さっきと比べるとずいぶん質素ですね……」ニーナがポツリと呟く。
「さっきから色んなフロア見てるけど、何となくカールの人となりが分かったような気がするわ」
マレーネの台詞を神木は聞きとがめる。
「人となり、と言うと……？」
「さっきは、豪華絢爛な調度品。今度は自らの威厳を示す無数の肖像画……。だけど、もしこれらがわざと着飾ったものだとしたら、カールはきっと自分に自信が無いのよ。でもそれを隠すために、わざと煌びやかに見せているんだわ」
「なるほど……」
「だから、そこがきっと彼の急所ね」
マレーネがそう言った瞬間、肖像画のカールがゴーレムに変化して画の中から大量に出てきた。
「どうやら図星だったみたいね。隊長。ここは私とニーナで食い止めるわ」
「神木さん。ここを片づけたら、すぐに私達も行きますからね！」
「……分かった。だけど、無理だけは絶対するなよ！」
神木はアイゼンクライトⅡを飛ばして最上階へと向かっていった。

＊＊＊＊＊＊＊

最上階はこれまでのフロアとは違って、中は劇場のロビーくらいだだっ広い場所だった。
その奥、祭壇の上に座っている老人が一人。
「ほほぅ。来たか、我が野望を邪魔する不届き者めが」
カール大帝その人である。
「カール！　貴様の企みもこれまでだ！　神聖ローマ帝国の復活などということは止めて、大人しく成仏するんだ！」
「馬鹿め。この堕落しきった土地を見て、貴様は何も感じないのか。

かつて、私が君臨していた時、この地は素晴らしかった。その栄光を甦らそうとすることのどこが悪い？」
「違う！　あの頃と今とでは時代が違うんだ。僕たちは、その時代に会った生活に変化をしているんだ！　今さら中世に戻ったところで、人々が戻るわけが無い！」
「分からずやは貴様の方だ。異邦人の分際で生意気を抜かす出ない！
――どうしてもと言うのなら、この私が直々に相手しよう」
そう言うと、カール大帝は立ち上がって太くて長い剣を鞘から抜く。
「さぁ、かかってこい！」

パート3

一方、地上。スピカと空組は作戦指令室からアジトの様子を観察していた。

「副司令！　見てください、塔が！」

つぼみが声を上げる。スクリーンを見ると、宙に浮かんでいるアジトから仄かな白い光が放出し始めている。

「霊力が強まっている……。きっと中で戦闘が始まったのね」

スピカがポツリと呟く。

「大丈夫ですよね、みなさん」アンジュが不安げに尋ねる。

「大丈夫。私が整備したアイゼンクライトⅡだもの。絶対負けないわ」リンが言い聞かせるように言う。

『――神木くん』

スピカは不安そうな顔を押し殺してモニターをじっと見ていた。

＊＊＊＊＊＊

「グッ……」

神木のアイゼンクライトⅡが、壁に吹き飛ばされて叩きつけられる。

塔の中で、神木は苦戦を強いられていた。

蒸気機械も何も乗っていない、生身の人間相手にこれほど手こずるとは予想外だった。それほどまでに、カール大帝の力は強大なのだ。

「どうした……。もう終わりか？」

カール大帝がつまらないといった表情をする。

「く……。まだまだぁ！」

神木はありったけの力を振り絞ってアイゼンクライトⅡを突撃させるが、カール大帝は意にも介さないといった感じで薙ぎ払う。

「ふん。やはりこの程度か。所詮貴様は、他の者の力が無いと何もできない愚か者だ」

カール大帝が鼻で笑う。

「何だと……？」
「貴様はただ部下に命令だけして自分はぬくぬくと戦線から遠のいていた卑怯者じゃないのか!?」
「違う！　僕だって皆と一緒に戦ってきた！」
「いいや、違わない。貴様は私とは違う。私は時にこの身を危険に晒そうとも遠征を続けてきた。だが貴様はどうだ？　部下たちの協力が無ければ何もできないでは無いか！」
　ここまで言われて、神木はハッとする。
「――まさか、そのための他のみんなを足止めに……？」
「武人たるもの、敵を見てそのおおよその兵力に当たりをつけることが出来なくてはな。――さて、独り言もこれまでだ。覚悟しろ！」
　再び剣を高く掲げるカール大帝だったが、刹那、神木のアイゼンクライトⅡから大量の霊力の光が漏れ出てきた。
「何?!　この期に及んでまだそんな力が残っているのか……？」
「――確かに、僕はあなたよりも戦闘経験は少ない。実際、海軍生活の半分は軍楽隊で過ごしてきた。――でも、それでも、この国の平和を守りたいと思う気持ちは、他の誰にも負けないつもりだ！
　おりゃあああああ!!!!!」
　神木は一直線にカール大帝の右手を狙う。よけきれず、剣を手放してしまうカール。
「クソッ。火事場の馬鹿力というやつか。だが、今ので貴様はかなりの力を消耗したはず。武器など無くとも、貴様の息の根など容易く止めてやる！」
「そうはさせないわ!!!!!」
　下の階から、5機のアイゼンクライトⅡが飛んでくる。
「伯林華撃団、参上!!!」
「みんな……！　無事だったのか」神木が安堵の表情をする。
「遅れてごめんなさい。大丈夫でしたか？」ニーナ。
「ゴーレムが意外としぶとくてねぇ」ナターシャ。

「ゆーいちろー、ボクたちが来たからもう安心だよ」リリィ。
「隊長。行きましょう！」秋奈。
「私達の街を取り戻すんだろ？」マレーネ。
「みんな……」
神木は感傷を頭から振り払うと、「さぁ、覚悟しろ！　カール大帝！」と高らかに宣戦布告した。
「……面白い。伯林華撃団、勝負だ！」
カールは鬼のような形相をして６人に突っ込んでいった。

パート４

地上で６人の帰りを待つスピカと空組の３人だったが、突然外がガヤガヤと騒がしくなったと思いきや、スーツ姿の老人数名が指令室に入ってきた。
「すみません。部外者の方は立ち入り禁止なんです！」
つぼみの静止を振り切り、男たちはスピカの前に立ちはだかる。
「あら。国防省のお偉方がこぞってこんな所に何しに来られたのです？」
スピカが鼻で笑うような表情を浮かべる。代表の一人が顔を赤くする。
「我々が何度も問い合わせても誰も応答しないから、こっちからわざわざ出向いてやったんだ！」
「あら、それは失礼。ずっと指令室にこもりっきりだったものですから」
「それで、あの奇妙な建物は何なのだね？　この伯林に危害を加えるものなのか？」
髭を生やした高身長の老人議員が尋ねる。
「あの建物は、カール大帝のアジトです。現時点で伯林ないしドイツに危害を加える危険性はありません。ですが、常に危機感を持って対応すべきであると考えております」
「カール大帝だって？　馬鹿な。１０００年以上前に死んだ人間じゃないか」
「魂は死んでいなかったのです。現在、伯林華撃団・四季組が全力で対応に当たっています」
「くだらん」デブでハゲの老人議員が吐き捨てる。「そんなことで伯林華撃団を出動させているのか。現時点で我々に害がないのならそれでいいじゃないか。今すぐ華撃団を帰投させて、軍を出動させよう」
「あの建物には大量の霊力が流れています。軍が手出しできる代物ではありません」
「何だと、貴様！　我がドイツが誇る軍隊が、あんな建物に敵わないと

言うのか！　それは我々、国防省に対する侮辱だぞ！　伯林華撃団が国防省の配下にあることを忘れたか！」
　デブハゲ議員が顔を真っ赤にさせて激昂する。
「スピカ副司令。こっちの仕入れた情報だと、ヨハン司令は実は敵の大将であり、華撃団内部にスパイとして潜り込んでいたという話が出ているが、それは本当か？」先ほどの高身長議員が資料片手に尋ねる。
「――ええ、それは事実です。ヨハンは倒しましたが、彼の体内に眠っていたカール大帝の魂が、戦いによって今回目覚めたのです」
「いくら、気づかなかったとはいえ、敵の親玉を華撃団に受け入れていたというのは由々しき事態ではありませんか？　華撃団そのものの信頼にも関わってくる。スピカ副司令は、そこはどうお考えに？」
「お言葉ですが、ヨハン氏を高額寄付者であるという理由だけで伯林華撃団司令というポストに半ば強制的に推薦したのは賢人機関と、あなたがた国防省ではありませんか？　我々現場の人間に全責任を被せると言うのは、あまりにも無責任と言わざるを得ませんが」
「言い訳もそこまでだ」デブハゲ議員がずいっと前に出る。「スピカ・レンテ、貴様を諮問委員会主催の国防審議会に掛ける！　今すぐ国防省に出頭せよ！」
「黙るのはあなたたちです！」
　スピカの怒声が室内に響き渡る。これほどスピカが感情を露わにしたのは初めてだ。つぼみ・アンジュ・リンも思わず顔を見合わせる。
「さっきから聞いていれば、一体ここに何しに来たというのですか?!
　あなた方が今ここでこうして戯言を言っている間にも、私達の仲間が必死になって戦っているのです！　そして私達は彼らの帰りを笑顔で迎え入れる義務があるのです！　くだらない文句を言いに来たのなら、今すぐここから出ていきなさい！　ここは私達伯林華撃団にとって神聖な場所なのです！　これ以上ここに居座ると言うのなら、私の権限であなたたちを逮捕します！」
　スピカの気迫に気圧されて、すっかり勢いを失った国防省の面々は、犬のように尻尾を巻いて指令室を後にした。

パート5

神木たちとカール大帝の戦いは両者互角で一歩も引かず、じりじりと時間と体力が消耗していった。

『こっちの霊力もかなり使っているが、向こうだってそれは同じこと。どっちが先に倒れるか……それで勝負が決まる！』

神木が心の中で考える。一方、カール大帝も肩で息をしながら呼吸を整える。

『不思議だ……。私の剣にこれほど抵抗する輩がいたとはな……。それにあの男からは、どこか懐かしい感じを覚える。それは一体何なのだ？』

が、すぐに考えを振り払うと目の前の戦いに集中する。

『いかん、いかん。気のゆるみは、命とりだぞ……』

両者、睨み合いが続く。

『奴の残っている力を計算して……それを比較すると……よし、行ける！』

神木は通信ボタンをオンにすると、5人に向けてメッセージを出す。

「みんな、聞いてくれ。こっちも奴も、持久戦に持ち込むほどの力は残っていない。おそらく、次が最終決戦だろう。――そこで提案なんだけど、最後は6人全員の力を合わせれば、奴を倒せるんじゃないかと思うんだ」

「6人の力を合わせて……？」

「――確かに、6人の力を合わせれば奴の力より少し勝るけど、そいつはちぃっとばかし危険な賭けだぜ、隊長」

ナターシャが冷静な意見を出す。

「確かに危険な賭けだ。だけど、このままずるずる時間だけ掛けても勝ち目はない。一か八か、チャレンジする価値は十分にあると思う。僕を信じてくれないか？」

しばしの沈黙。

「――やっぱり、どこまでも真っ直ぐなんだから。私は乗るわ、その賭

けに」
　口火を切ったのはマレーネだった。
「おいおい、マレーネがやるってんなら、あたしだって！」次いでナターシャ。
「あー、ずるーい！　ボクも、ボクも！」リリィ。
「私も行きます！」秋奈。
「神木さん、私達、伯林華撃団の力を見せましょう！」ニーナ。
「みんな……ありがとう。――よし、これで決めよう！」
「どうした？　来ないのか？」
　しびれを切らしたカール大帝が話しかけてくる。
「そうか……。もう戦う気力が尽きたと言うのか。――ならば、私が一思いに楽にしてやる。覚悟しろ！」
　剣を構えて走り出すカール。その瞬間、６機が目の前からふっと消えた。
「何ッ?!」
　慌てて立ち止まるカール。
「どこだ？　……どこに消えた！」
「ここだ、カール！」
　頭上から声が響き渡る。パッと上を向くと、神木たちのアイゼンクライトⅡがカール目がけて降りてくるところだった。
「な、何ィ?!」

「これで、とどめだーーーーーー!!!!!!!」

パート6

神木たちはアイゼンクライトⅡから降りてくる。地面には、カール大帝が倒れこんでいる。
「う……うう……」
倒された衝撃で苦悶の表情を浮かべている。
「互いにもう戦う力は残っていない。これ以上の抵抗は無駄だ」
神木が諭すように言う。
「分からぬ……どうしてこの私が負けたのか……力では決して劣っていなかったはずなのに……」
「伯林華撃団の、この街を守りたいという強い気持ちが、お前を上回ったんだ。カール」
「気持ち……だと……？」
「僕たちは、伯林に住む人たちの平和を笑顔、そして未来を守るために戦っている。カール、君の失望からのドイツを新たに生まれ変わらせるという気持ちは、根底は同じだろうがやはり間違っている。僕たちは、時代と共に変化しながら未来へと向かっているんだ」
「未来……」
「この国は、僕たちが良くしていく。僕たちを、信じてくれないか？」
カールはしばらく逡巡していたが、やがて肩を揺らして笑い始めた。
「――そうか……この懐かしい気持ち……。貴様は、若かりし頃の私に似ているんだな。馬鹿みたいに青臭く、ひたすらに明日を信じていたころの、私に……」
カールはよろける足をバランス取りながらゆっくり立ち上がる。
「……私の肉体が死んだ後、私の魂は幾人もの人間の肉体を経て来た。目覚めることは無かったが、世間の変化ははっきりと見てきた。そして、時代が過ぎ行く度に失望してきた。だがそれは、私が１２００年前の人間だったからなのか――。歳を取ると、頑固になっていかんな。――貴様、名を何という」
「伯林華撃団隊長、神木裕一郎です」

「カミキか。――この国の未来、貴様らに託すぞ」
そう言って、右手を差し出すカール。神木もそれに応じ、二人はがっちりと握手を交わす。
「ふぅ……。急に肩の荷が下りた気分だな……」
そう言って目を瞑るカール。その途端、カールの体が急に光り始める。
「な、何だ……？」戸惑う一同。
「……どうやら、時間のようだな」カールが安らかな表情で呟く。「カミキ、最期に貴様と出会えて本当に良かった。私は少し疲れた。――これからは、空の上から、この国の未来を見届けることにしよう……」
次の瞬間、カールを包みこんだ光は一羽の白鳥の姿に変化して天高く昇って行った。神木は最敬礼をして、カールが天に昇るのを見送った。
「……カールも分かってくれたし、危機も未然に防ぐことが出来た。みんなのおかげだ、ありがとう！」
改めて礼を言う神木。得意満面な笑顔を見せる一同。
だが、突如大きな揺れが皆を襲う。
「な、何だ?!」
「カールが天に召されたから、この塔も消えるってことなのかしら?!」
「いかん！　全員退避！」
カールのアジトであった天空の塔は、激しい揺れを起こすと共に壁が崩壊し、ピンク色の花びらが舞うかの如く天に吸い込まれていった。
「まるで、桜が舞っているみたいですね」
劇場の前から様子を見ていたつぼみが呟く。
「そうね。伯林に咲くサクラか……。案外、ロマンチックかもね」
「あ、見てください！　神木さんたちです！」
「本当だ！　おーい！」
アンジュとリンが口々に叫びながら飛んでくるアイゼンクライトⅡに手を振る。
6人は機体から降りるとスピカの前に整列した。

「伯林華撃団・四季組、ただいまを持ちまして、全員帰投いたしました！」
神木が敬礼をする。スピカも応答する。
「ご苦労。――みんな、よくやってくれたわね」
「カールは分かってくれました。この国の未来を――天で見守るそうです」
「ふふっ。なら、カール大帝に恥じない国にしないとね」
「さぁさぁ、神木さん！　スピカさん！　戦いも終わったんですし、いつものアレ、やりましょうよ！」
ニーナが急かす。
「そうだ。今回は、神木さんが音頭を取りませんか？」秋奈が提案する。
「お、それ良いな！　よし隊長、景気よく決めてくれよ！」
「そうだな。――よし、それじゃあ――！」

「勝利のポーズ、決め!!!!!!」

パート7

戦いは終わった。
世間を騒がせたカール大帝の危機を未然に防ぐことが出来、伯林に再び平穏が訪れた。
国防省のお偉方は、敵の大将であるヨハンを見抜けなかったことに対するスピカの責任を何とか追及出来ないかと模索したが、結局『不問』となった。
伯林華撃団はひとまずお休みし、今は伯林歌劇団としての仕事で皆大はりきり。つぼみ・アンジュ・リンの三人は溜まっていた事務仕事を片付けて、神木も久しぶりのモギリに悪戦苦闘しながらも、伯林に平和が戻ったことを実感していた。
ニーナ・マレーネ・秋奈・リリィ・ナターシャも生き生きと舞台に立っている。
カールと約束した、この国の未来を守っていくという使命を強く感じながらも、忙しい日々を過ごしていた――。

＊＊＊＊＊＊＊

3月。ようやく事件の後処理が終わり、公演もひと段落したところで、神木たち一同はスピカに集合を掛けられた。
「みんな、この三か月間大変だったでしょうけど、よく頑張ってくれたわ。お疲れ様でした」
サロンに集まった皆を前にスピカが労いの言葉を掛ける。
「さて、皆に今日集まってもらったのは、二つ、報告することがあるからです。まず、一つ目。みんな、さっきもいったけどカールの事件以降ずっと働きっぱなしだったでしょう。ひと段落ついたから、しばらく休暇を取ってもらうことにするわ」
「お、休みか？　やったー」ナターシャとリリィが喜ぶ。
「ずっと働き詰めは体に悪いし、これは、私からのお礼よ」
「で、もう一つは何ですか？」ニーナが尋ねる。

「もう一つは、これは神木くんに言うことなんだけど……」
そう言って神木の方に向き直る。
「神木裕一郎少尉、貴殿の伯林での活躍が認められ、4月1日付で大日本帝国海軍航空本部への配属が正式に決まりました。貴殿の今後のますますの発展を願います。――おめでとう、神木くん。栄転よ」
「は、はい！　ありがとうございます！」
勢いよくお辞儀をする。帝国海軍航空本部と言えば、航空機の研究・計画・審査・航空要員の教育も一手に担う部署である。伯林華撃団での神木の活躍が認められたという立派な証だった。
「しばらく皆とはお別れだけど、心配しないで。この子たちも強くなったし、私が責任をもってこの街を守るから」
「はい……。いろいろ、ありがとうございました」
神木は深々とお辞儀をして、サロンを後にした。
自分の部屋に戻り、ベッドに横たわる。
『航空本部へ栄転か……。嬉しいけど、やっぱり皆と離れ離れになるのは少し寂しいな……』
そんなことを考えていると、誰かが部屋のドアをノックした。
「はい、どなた？」

パート8　ニーナエンド

「私です、ニーナです。神木さん、入っても良いですか？」
「ニーナくん？　どうぞ、カギは開いているよ」
　部屋に入ってきたニーナは寂しそうな表情をしている。
「神木さん……日本に戻るんですね」
「あぁ。――大丈夫。またすぐに会えるよ」わざと明るめな声を出す神木。
「あの、神木さん――」意を決したように、ニーナ。「お願いがあるんですけど、聞いてくれますか？」
「う、うん。何だい？」
「冬休みの時に行った、ブランデンブルク門近くのレストランにまた一緒に行きたいんです。ほら、前回はカールが現れて食事も取らずに店を後にしたから、そのやり直しも兼ねて……」
「あのレストランか。良いよ、一緒に行こう！」
「本当ですか?!　ありがとうございます！」
　飛びあがらんばかりに喜ぶニーナ。
「じゃあ、明日の午後５時３０分に、ロビーに待ち合わせで！　お願いしますね！」
「はいはい。じゃあ、また明日」
　ニーナはルンルン気分で部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊

　翌日。集合時間にロビーに向かうと、ピンク色の可愛らしいドレスを着て化粧をしたニーナが立っていた。
「ニーナくん……。すごく綺麗だよ」思わずドギマギする神木。
「本当ですか？　私、すごく嬉しいです……」
　はにかみながら満面の笑みを浮かべる。
「さぁ、行こうか……」
　ニーナの手を握り、外に出る二人。件のレストランは、以前と変わ

ることなく営業をしていた。
「いらっしゃいませ」
給仕は二人の顔を見て少し驚いたような表情を見せたが、すぐに引っ込めて営業モードに入る。
「さすがに覚えられていたか」
メニューを見ながら神木が呟く。
「ふふっ。でも、今度はちゃんといただきましょう」ニーナが笑顔で言う。
運ばれてきた料理はどれも美味しく一級品揃い。二人は楽しく談笑しながら料理をつっつく。
「それにしても、またこうしてニーナくんと一緒に食事が出来て嬉しいよ」
食後のデザートを食べながら、神木。
「しばらく伯林からは離れるけど、良い思い出が出来て良かった」
「そうですね……」
言いながら涙を目にためるニーナ。
「ど、どうしたの?!」
「ごめんなさい……私、どうしても神木さんと離れ離れになるのが辛くて……本当はお祝いしなきゃいけないのに……。私、本当は会った時からずっと神木さんのことを……」
「ニーナくん……」
神木はニーナにハンカチを差し出そうとするが、すぐにそれを思いとどまると、椅子から立ち上がってニーナを優しく抱きしめた。
「か、神木さん……」
「僕も君のことが好きだ、ニーナくん」
二人は時が過ぎるのも忘れて、お互いをしっかり抱きしめていた。
【サクラ大戦Ⅵ　ハロー・マイラブ（ニーナエンド）完】

パート8　マレーネエンド

「私よ、隊長。入っていいかしら」
「マレーネか。どうぞ、カギは開いているよ」
　部屋に入ってきたマレーネはいつになく頬を緩めている。
「どうしたんだい、一体？」
「隊長、まずはおめでとう。華撃団での活躍が認められて」
「あ、あぁ。ありがとう。しばらく伯林を留守にするけど、またみんなと会えるから」
「そうね。それで、隊長にお願いがあるの」
「お願い？」
「そう。――実は、私のファンであるヘルマン伯爵が主催する舞踏会にお呼ばれしているんだけど、隊長、私のパートナーとして一緒に参加して下さらない？」
「えぇ、舞踏会?!　……僕はそういうのには参加したことが無いんだ」
「大丈夫。私がリードするから。それに、せっかくの舞踏会なのに踊る相手がいないんじゃ締まらないわ」
「なるほど……。ダンスは自信ないけど、僕で良ければ喜んでお引き受けしよう」
「本当？　ありがとう、隊長。じゃ、明日の夜六時にロビーに集合よ」
　マレーネはそれだけ言って微笑むと、颯爽と部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

　翌日。正装した神木がロビーで待っていると、ゴージャスにドレスアップしたマレーネが階段から降りて来た。その姿は本当に聖母のような気品さを醸し出していた。
「どうかしら、隊長？」そう言って妖しげにほほ笑むマレーネ。
「すごい、綺麗だよ……」
「あら、ありがとう。うふふ。隊長もなかなか格好良くてよ」
「そ、そうかい……？　じゃ、じゃあ、そろそろ行こうか……」

舞踏会でも、マレーネは皆の注目を集めていた。何人もの男性がマレーネに言い寄ってきたが、その度にマレーネは軽くあしらっていた。
「いいのかい？　たぶん、皆それなりの貴族たちなんだろう？」
「隊長がいるんだから、それ以上は不要でしょ？」
そう言って微笑むマレーネ。
「こんにちは、マレーネさん」
屋敷の主であるヘルマン伯爵が汗を拭きながら近づいてくる。
「すっかりお客様対応に時間を取られてしまって……。おや、こちらの方は？」
神木の顔を訝しげに見る伯爵。
「私の恋人よ」さも当然のように言うマレーネ。ヘルマン伯爵は一瞬顔をこわばらせたが、一言「どうぞごゆっくり」とだけ言ってその場を後にした。
「これで私は、この屋敷に出入り禁止になったわね」
「おいおい、いいのかい。君のファンなんだろ？」
「私だってこの世界は長いのよ。ファンと、ファンに見せかけて近づいてくる男どもの区別くらいは出来るわ」
会場に流れていた音楽が変わり、ダンスタイムとなる。
「踊りましょう、隊長……」
会場の中心で踊り始める二人。マレーネは神木の胸に頭をあずける。
二人は他の参加者に目もくれず、ただずっと踊り続けていた。
【サクラ大戦Ⅵ　ハロー・マイラブ（マレーネエンド）完】

パート8　秋奈エンド

「隊長、ちょっといい？」
「秋奈くんか。どうぞ。カギは開いているよ」
　部屋に入ってきた秋奈はどことなく動作が固い。
「どうしたんだい、それで？」
「隊長。――実は、日本に帰る前に日本大使館でパーティーを開くの。それで、隊長にも是非参加してほしくて」
「パーティー？　一体、何のパーティーだい？」
「ほら、前回の梅雨祭りの時は敵が現れて満足に出来なかったでしょう。せっかくこの街も平和になったことだし、やり直しも兼ねてもう一回催すことにしたのよ」
「なるほど。そういうことなら、喜んで参加するよ。副司令も呼ぼうか、じゃあ」
「い、いや。副司令は、忙しいみたいだから、隊長だけで良いって……」
「ふぅん、そうかい……」
　急に慌てふためいた秋奈を若干訝しげに思いながらも、神木は大使館のパーティーに出席することにした。

＊＊＊＊＊＊

　翌日。神木は久しぶりにクライナ・トーキョー内に足を踏み入れた。魔の脅威が無くなったからか、コミュニティ内の日本人たちの表情が明るい。公園の前を通ると、子供たちが元気よく鬼ごっこをして遊んでいた。
『平和になったんだなぁ』
　そんなことをしみじみ思いながら、大使館へと向かう。大使館の庭にはすでに大勢の来客がおり、皆笑顔で語り合っている。
「神木くん！」
　声のした方に視線をやると、赤ら顔ですでに出来上がっている正毅が近づいてきていた。

「やぁやぁやぁ、調子はどうだい？」そう言う息は酒臭い。
「はぁ、おかげさまで。大使もお変わりないようですねぇ」
「私は何も変わらんよ。これからもこの伯林で、大使としてやっていくぞ！」
「はは……。そう言えば、秋奈くんは？　姿が見えないようですが……」
「秋奈は中にいるよ。――なぁ、神木さん。私は、秋奈は目に入れても痛くないと思うほど可愛いと思っている。それは、これからも変わらない。秋奈を泣かせたら、この私が許さないからな」
　そう言う正毅の眼は真剣だった。
「……分かりました」
　神木も真面目に返答する。その答えに満足したのか、二、三度肩を叩いてその場を後にしてしまった。
　神木は大使館の中に入って秋奈を捜索する。大使館の屋上に秋奈はいた。
「秋奈くん。ここにいたのか」
　振り返った秋奈は水色のドレスも相まってとても美人だった。
「隊長……来てくれたの」
「こんな所にいると風邪をひくよ。下に行こう」
「隊長。ここからの風景を見て」
　秋奈に言われるがまま景色を眺める。伯林市内を一望でき、なかなかの壮観だ。
「へぇ。大使館の屋上からこんな光景が見れるとは知らなかったよ」
「私……ずっとこの街にいる意味を見出せなかったの。街に遊びに行く時も大和撫子でいるように言われて、ずっと窮屈な思いをしてきたの。だから、ここから見下ろす伯林も好きじゃなかった。でもその鳥籠から私を解き放ってくれたのが、隊長だったのよ……」
「秋奈くん……」
　神木を見つめる秋奈。
「隊長……。これからも、私のことを見守ってくれる？」
「……もちろんだとも」

秋奈は満面の笑みを浮かべる。二人はいつまでも、屋上からの伯林の街並みを眺めていた。

【サクラ大戦Ⅵ　ハロー・マイラブ（秋奈エンド）完】

パート8　リリィエンド

「ゆーいちろー、いる？」
「リリィか。どうぞ、カギは開いているよ」
　部屋に入ってきたリリィは、もじもじしながら神木の方を見る。
「どうしたんだい、リリィ？」
「あの、ボク、ゆーいちろーにお願いがあるの」
「ん、何だい？」
　リリィはしばらく言いづらそうにしていたが、意を決して「ボク、ゆーいちろーと水族館行きたい！」と言った。
「水族館？」
「うん。ほら、この前動物園行った時、敵が現れたからゆーいちろーと水族館行けなかったじゃん。だから……」
「確かに、この前はそうだったな……。よし、じゃあこの前のリベンジで水族館に行くか！」
「わーい！　じゃあ、明日の１０時にロビーに集合ね！　遅れちゃダメだよ！」
「分かってるって」
　リリィは満面の笑みを浮かべてスキップしながら神木の部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

　次の日。神木がロビーに向かうと、可愛くドレスアップしたリリィがすでに待っていた。
「あ、ゆーいちろー！」
　神木に気づいて、急いで駆け寄ってくる。
「お待たせ。可愛い服だね」
「へへっ。似合うかなぁ？」照れながら聞くリリィ。
「とても似合うよ。すごく似合ってる」
「ありがとう。ゆーいちろー」

「……さ、行こう。水族館が僕らを待っているよ」
神木はそう言って、リリィの手を握ると劇場を後にした。
水族館は大勢のカップルや親子連れでいっぱいだった。平和になったことで、普段よりも大勢の人出がでているらしい。
「はぐれないように、しっかり手を握っているんだよ」神木がリリィにそう忠告する。
「うん！　ボク、絶対離さない！」
「よし。じゃあ、早速イルカショーを見に行こう」
イルカショーは子供たちに大人気のアトラクションの一つで、イルカが跳ねる度に飛び交う水に掛かると願い事が叶うと言われている。
二人は比較的前の席を陣取った。
「ここならイルカもよく見えるし、水も思いっきり掛かるだろうな」神木が呟く。
「ボク、イルカなんて初めて見るよ！」ワクワクしながら、リリィ。
イルカショーが始まる。三匹のイルカが飼育員の言うことを聞きながらコミカルな動きを見せる。その度に会場内に爆笑が起こる。神木とリリィも揃って笑う。
いよいよ終盤。三匹一斉に宙に飛ぶ大道芸。係員から水除けの布を手渡される。
「いよいよだ。願い事、ちゃんとするんだぞ」
「うん、分かってる！」
イルカが宙に華麗に舞う――と同時に猛烈な水しぶきが観客に降り注ぐ。神木もリリィも水除けがあるとはいえ少し濡れた。
「ふー、こいつは凄いなぁ」ハンカチで水分をふき取りながら、神木。
「ね、ゆーいちろー。何か願い事した？」
「ん、まぁね。そう言うリリィは、どんな願い事したんだい？」
「えー、えーっと……秘密！」そう言って顔を赤らめる。
「ハハハ、秘密か。でも、何となく、僕とリリィの願い事は一緒のような気がするな」
「えっ……？」目を丸くするリリィ。「ホント？」
「あぁ」リリィにぐっと顔を近づける神木。「ホント」

リリィはそのまま神木に抱きつく。二人はそこでいつまでもハグをし続けていた。

【サクラ大戦Ⅵ　ハロー・マイラブ（リリィエンド）完】

パート8　ナターシャエンド

「隊長、いるかい？」
「ナターシャか、いるよ。カギは開いているから、入っておいで」
　部屋に入ってきたナターシャは、どことなく照れている表情をしている。
「どうしたんだい。珍しいね、僕の部屋に来るなんて」
「ハハ、まぁね。なぁ、隊長。明日、ヒマか？」
「明日？　特に用事はないけど」
「そうか……！　いや、実は、明日久しぶりに市内をランニングしようと思っててさ。ほら、ずっと戦いっぱなしでトレーニングする時間を作ることが出来なかったから。それで……隊長も一緒に走らないか、と思って……」
「えっ？　僕が？」驚きの声を上げる神木。
「い、いや……。嫌なら良いんだ。本当に、走るだけだから……」
「――確かに最近、あまり体を動かせてないなぁ。海軍に戻ることだし、きちんと体を作っておくのはアリだな。いいよ、ランニング行こう」
「ほ、本当か?!　じゃあ、明日13時にロビーに集合な！」
　ナターシャは顔を明るくしながら神木の部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

　翌日。約束時間の五分前に運動着姿で神木はロビーに向かうと、すでにランニングウェアに着替えたナターシャが先に待っていた。
「やぁ、ナターシャ。お待たせ」
「お、来たね隊長。ふぅん、なかなか似合っているじゃないの」
「海軍士官学校にいた時に着ていたやつさ。ナターシャこそ、なかなかサマになっているよ」
　ナターシャは半袖シャツにショートパンツを穿いており、彼女のプロポーションの良さを惜しげもなく表している。

「それで、どこに行くんだい？」
「シュプレー川沿いを走っていって、トレップトアーパークで休憩しようと考えている」
「トレップトアーパークか。中々走るね」
「ランニングは長距離走らなきゃ意味無いからな。よし、じゃあ準備運動したら早速走りに行こうぜ！」
　二人は入念に準備体操をして、ランニングを始める。元傭兵らしく、ナターシャは疲れを見せず走り続ける。神木も、士官学校でしごかれまくった体力で軽快に走り続ける。
「へぇ、あたしの走りについてこれるなんて。隊長、案外タフなんだねぇ」
　トレップトアーパーク内のベンチの前に立って汗を拭きながらナターシャが言う。
「これでも、海軍士官学校を主席で卒業したんだ。これくらいへっちゃらさ」ベンチに座りながら神木が言う。
「なるほどね。さすが隊長だ」神木の隣に腰かけるナターシャ。
「さすが隊長だ、か。君の口からそんな台詞が出るとはね」
「な、何だよ」
「最初のころは僕に楯突いて来たじゃないか」そう言ってハハハと笑う神木。
「あ、あれは！　あたしも、まだ隊長のことをよく知らなかったし……」
　そう言って照れてしまうナターシャ。そのまましばらく無言になる。
「――なんかさ。隊長とこうして話していて、つくづく感じたよ。こういう何気ない光景が、実は幸せなことなんだよな。平和じゃなかったら、こんなこと、出来ないだろうし」
「……そうだな、こういう何気ないことが平和へとつながるんだ」
「だからさ、隊長……。これからも、あたしの道標となってくれないか？」
「もちろんだとも。僕はずっとナターシャの味方さ」

「へへ、ありがとよ、隊長。――さて、休憩も済んだし、隊長、ランニング続けるぞ！」
「お、おい。急に走り出すなよー！」
二人は笑いながら、伯林の街をバックに走り続けてた。
【サクラ大戦Ⅵ　ハロー・マイラブ（ナターシャエンド）完】

パート8　スピカエンド

「私ですけど、神木くん、いる？」
「副司令ですか。ちょっと待っててください」
　神木は急いでドアを開ける。「さぁ、どうぞ」
　スピカは部屋の中に入ると、しばらく室内を見渡す。
「……この部屋も見納めね。神木くんがいない時は交代で掃除してあげるから」
「あ、ありがとうございます。それで、一体……？」
「あぁ、そうそう」スピカがベッドに腰かけながら用件を伝える。
「実は明日、溜まっている書類を片付けるんだけど、一人じゃとても終わらない量なのよ。空組は空組で別の用事があるし……。だから神木くん、明日手伝ってくれない？　ご飯ぐらいは奢るわよ」
「良いですよ。明日は特に用もありませんし……」
「ありがとう、じゃあ明日の朝十時に私の部屋まで来てね。それじゃ」
　スピカはそれだけ言うと、神木の部屋を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊

　次の日。神木は十時ぴったりにスピカの部屋を訪れた。ドアをノックして来訪を告げる。
「神木裕一郎、１０：００、ただいま参りました」
『どうぞ、入って』中からスピカの声がする。
「失礼します」
　室内に入ると、机の上に山盛りの書類の山に囲まれて作業をしているスピカが目に入ってきた。
「あぁ、神木くん。来てくれてありがとう。早速で悪いけど、こっちにある資料に目を通してハンコ押してくれない？」
「あ、はい。分かりました。――にしても、何です？　この書類の山は？」
「カール大帝との一件で溜まっていた分と、ヨハンを倒したことでの

後始末とが一気に来たのよ。とりあえず、さっと目を通すだけでいいから」
「は、はい」
言われるがまま書類を読んでハンコを押していく。単純作業ではあるが、いかんせん量が多いため中々終わらない。
気が付くと、１４時を過ぎていた。
「あら、もう４時間経っていたのね」
時計を見たスピカが驚きの声を上げる。
「神木くん、ちょっと遅いけど昼ご飯にしない？　私が奢るから」
「ありがとうございます。じゃあ、お言葉に甘えて……」
二人は食堂に出てオムレツを注文する。休演日のため客の姿はない。
「ごめんね。すっかり手伝わせちゃって」
「いやぁ、そんな。副司令こそ、僕らの何倍も仕事をこなしていて頭が下がる思いですよ」
神木がそう言うと、スピカはスプーンを置いて頬杖をついた。
「――私はね、神木くん。欧州星組を離れてからの時間の方が長かった。現場に復帰して真っ先に思ったことは、何が何でも四季組・空組の皆に頼られる存在でいようって。ラチェットが紐育で頑張っているのも知っていたから、余計そう思ったのかもね。でも、皆と一緒にいて、もっと皆を頼っても良いのかなと思ったの。神木くんも、最初の頃と比べてすごく逞しくなったし」
「そ、そうですか……？」照れる神木。
「だから、神木くん。日本に帰っても、私たちのことは忘れないで。何かあったら、遠慮なく頼っていいんだから」
「……分かりました」
神木の力強い返事を聞いて、スピカはゆっくり頷く。
「――さ、そろそろ食事も終わったころだし、作業に戻るわよ」
そう言ってスピカはさっさと立ち上がって部屋に戻る。神木は「待ってくださいよー」と言いながらスピカの後を追って食堂を後にしていった。

【サクラ大戦Ⅵ　ハロー・マイラブ（スピカエンド）完】